
言葉ではなく ルーフェイア・シリーズ09

こっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉ではなく ルーフェイア・シリーズ09

【Zコード】

Z3086F

【作者名】

「」

【あらすじ】

学院を飛び出した親友を追つて、抗争のスラム街へ。心やさしい美少女が織り成す、異色の学園ファンタジー第9弾 かなり外向きの話で、8作と同じくバトル要素が多めです 反王道、「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は1行毎の改行。r空行です 現在、第11作を連載中

Matrices

授業がほとんど終わってあとは休みを残すばかりで……そんなあ
る日だったの。

「連絡？」
「誰から？」
「連絡が来たんだ」

シーモアが「いつの風に言つからには、あたりまえだけどあたし

も知っている人

「ケインからさ。

「うそ……でも旗色がよくなかったで、ガルシィに内緒で送ってきたよ」

ガルシィもケインも3年前までいたスラムの仲間で、どつちは年上。とうぜんだけど遅しいって言うか手馴れてるって言うか、ともかくちょっとやそつとじやびくともしないのよね。

から、これ、そうとうじやないのかなあ？

「やつぱり、ヤバいのかな?」

「ヤバくなきや、ケインがわざわざ連絡なんてしてくるもんか。ナティ、あんた出かけられるかい？」

「もちろん」

どこへなんて聞かない。
訊かなくたつてわかるもん。

そつか。3年ぶりなんだ。

よく考えたらあたしたち、あそこを出でから一度も帰つてないの。そりや、手紙なんかでのやりとりは、ずっと続けてるんだけど。

みんなに会えるといいな……。

Ruffeir

「今年も、あとちょっとだね」

「だな。しつかしあつという間だつたな」

あたしとイマド、珍しく2人でケンティクの町へと来ていた。

実を言つと最初は、シーモアとナティエスとの3人で出かける予定で、前から約束してた。けど昨日、急に2人とも用事が出来て流れてしまった。

2人とも「ごめんね」と言いながら、たちまちどこかへ行つてしまつたから、よほど急いでいたんだろう。

当然あたしはひとり ミルはとっくにアヴァンだ で取り残されてしまつて、見かねたイマドがいつしょに来てくれた。

「シーモアとナティエス、ビリしたのかな？」

彼を見上げながら尋ねる。

最初に会つた時から頭ひとつ以上身長差があつたけど、イマドのほうが伸びるのが早くて、今じゃあたしは彼の胸までしかない。

「さあな。ただあの調子だと、ロデステイオへ行つたんじやないか？ あいつらけつこう、ダチがあつちにいるらしいからな」「そうなんだ……」

わざわざ友達に会いに帰るなんて、うらやましかつた。戦場で育つたあたしには、学院の外には友達がない。

「また深刻になりやがつて。今ダチがいるんだからいいだろ」

「あ、うん。そうだね」

イマドに言われて思いなおす。

学校に行けて友達がいるんだから、これ以上壁むすびが贅沢だ。

「ちいこえ、……イマドは今年は、伯父さんのところへ、帰らないの？」

「いつもせうだけど、授業が残り少なくなるとイマドは、せつせつアヴァンの伯父さんのところへ帰ってしまう。」

「そりしてもいいんだナゾよ、今年は真ん中の姉貴に赤ン坊生まれたかんな。」

「帰つたら絶対こき使われるから、ギコギコにしようと思つてや」

「イマド、いろいろ上手だから」「どこで覚えたのかは知らないけれど、イマドは料理なんかが上手だった。あたしも時々教えてもらつたり、食べさせてもらつたりしてゐる。」

「そりゃ下手とは言わないけどよ、妙にアテにあれるのも考えもん
だぜ」

普通じゃあんまり聞けないよつなほやきに、つい可笑しくなる。
「けど、もう言つ劑に手抜き……しないから」

「そゆのはプライドあるさね~」

結局凝り性なのが、災いしてゐるらしい。

「まあいいや。とつあえずヒマだから、なんか作つてやるよ。リク
エストあるか?」

「ケーキ」

「イヤミが、それ? 僕じゃシルファ先輩みたいにはいかね
ぜ、それだけは」

「でも、イマドのモ、おこしいから」

シルファ先輩も、いま学院にいなかつた。タシュア先輩と一緒に、
どこかへ行つてしまつたらしい。

「んじゃそいらで晩メシ食つてから、晩メシとケーキの材料だけ買
つてくか」

「うん」

けつときょく食事をしたあと、町の一 角、食料品やなにかを売つて
いる店がひしめいている、市場へ行く事にする。

「で、なんのケーキがいいんだよ?」

「そう言われても……」

とつさには思い浮かばない。

「白いの、この間シルファ先輩に、作つてもらつたし……生オレン

ジとか、ダメ?」

「そりやムリだな。時期じゃねえから。しゃあねえ、適当に作るぞ?
?」

「ありがと」

そんな話をしながら、駅前の広場を横切っていく。
結構な広さの円形の広場は、綺麗に石畳が敷かれていて、周囲には洒落たベンチが幾つも置いてあった。
小春日和のせいか、けつこうたくさんの人で賑わっている。

「こんど昼メシでも持ってきて、一いりで食つか? あとは埠頭の方とか」

「あ、いいかも」

ちょうど駅に列車が着いたところらしくて、たくさんの人たちが階段を降りてきていった。

そこへ突然、銃声が響く。

「 行くぞ!」

「うん」

とつとつに走り出した。

騒ぎの起きた駅から慌てて逃げてくる人々の中を、つまく逆走する。そして駅員さんには悪いけれど、そのまま改札を飛び越えて構内へと飛びこんだ。

あとで入場料、払った方がいいのかな?

そう思いながらもとりあえず、自分とイマドとに防護魔法だけはかける。

「あれか? けどなんなんだよ?!

イマドが言うのももつともだった。なにしろなにかの劇映みたい

に、構内で銃撃戦が展開されてるのだから。

ただ良く見ると、襲われてるうちに応戦しているのはひとりだけで、3人ほどを相手にしている。

しかも襲っているのはあたしたちよりほんの少し年上、襲われている方にいたつては、あたしたちとさほど変わらないか、中にはもつと小さい子までいた。

再び銃声がして、応戦していた少年が倒れる。このままじゃもつと小さい子達までが、犠牲になりかねない。

2人で一瞬だけ視線を交わして、左右に散る。まず、一気にイマドが突っ込んだ。向こうが撃つてくる弾は魔法で弾き返せるから、まったく躊躇いが無い。

同時に襲っている3人の少年の手元でそれぞれ、威力こそ弱いものの電撃が炸裂する。こういう襲撃者なら大抵持っている魔力石を、イマドが暴発させたんだろう。

予想外の事態に驚いている少年の一人に、彼はあつと/or>う間に詰め寄った。

速い！

精霊の支援を受けてるならともかく、素のままとはとても思えないスピードだ。

そして次の瞬間には、剣の柄を敵のみぞおちに叩き込んでいた。この間にあたしも一人を峰打ちで昏倒させる。

一瞬にして残るはあとひとり。

その残った襲撃者に、あたしの太刀とイマドの剣との切っ先が、左右から喉元へと突きつけられた。

「あ、うあ……」

さすがに少年（？）がパニックを起こす。

「武器を捨てる」

イマドが鋭くそう言つと、彼は素直に従つた。

「ルーフェイア！」

「分かつてる」

すぐに、襲われて倒れている少年の方へと向かう。傷を調べると肩に一発当たっているだけで、それも幸い貫通していない。

簡単な回復魔法をかけると、あっさりと出血が止まる。

「お兄ちゃん、大丈夫なの？」

「うん、大丈夫よ」

連れられて来たらしい子供たち 5、6歳の子供が3人ほど

に、そう答えて安心させる。

「待つてて。すぐ病院に」

「……ダメ、だ」

「え？」

思つてもみなかつた言葉に驚いた。気を失つているとばかり思つていた、この怪我をした少年が、そうほつきりと口にしたのだ。

「どうしたんだよ？」

もたついてるあたしに、イマドが声をかける。

「イマド、それがね……病院、ダメだつて……」

「なんだよ、それ？」

言いながら彼はこっちへ来て 襲撃者はもう柱に縛り付けてあ

つた 少年の瞳を覗き込む。

「 そういうことか。しゃあねえな、とりあえずこいつらまとめて、学院連れてくか。

ルーフェイア、お前学院長に連絡してきてくれ。俺はこっち、適当にじこまかしとく

「あ、うん。分かつた」

いまいち事態が飲み込めなかつたけれど、とりあえず連絡しに行つた。イマドは時々、いつかって誰も何も言わないのに、真相を知つてしまつことがある。

「お忙しいところ申し訳ありません。あの、6年Aクラスの、ルーフェイア＝グレイスです。えっと、学院長につないでもらえますか？」

断られたんじゃないのかと思つたけれど、意外にもすんなり繋いでもらえた。

通話石の向ひの声が変わる。

「どうしましたか？ あなたがわざわざ連絡してくるんですから、なにがあつたんでしょうが」

「ええと、ケンディク駅で銃撃戦に遭遇して、とりあえず鎮圧したんですけど……どうも双方わけありらしいくて、イマドが学院へ連れていった方がいいって言つもんですから、それで……」

我ながら説明になつてない。

もつともあたし自身学院へ連れて行く理由を聞いていないから、当然かもしれないけれど。

「その年で『銃撃戦を鎮圧』などとさうと言ふのは、あまりいなでしようねえ。

いいですよ、イマドがそつと書いたのなら連れて来なさい。迎えをやりますようか？」

驚いたことにあつとひつと許可が下りた。

「すみません。怪我人と小こ子がいるので、そうしていただけると助かります」

「分かりました。すぐに向かわせますから、そのまま待機していなさい

「了解しました」

それだけ言って連絡を終える。

現場へ戻ると、もう襲撃者も怪我をした少年も移された後だった。ホームに残る血の跡を、駅員が洗い流している。

「あの、すみません。学院の者なんですけど、イマド ジャニー、友達はどこに行つたんでしょう？」

尋ねると、その駅員が半歩ほど後ずさつた。なんだか妙に怯えられている。

「えっと、あの……？」

太刀が抜き身なの、まさかっただかな？

「え、あ、いや、学院ね。その、友達なら控え室、だよ」

「ありがとうございます」

お礼を言つて、指差してくれた方へ向かつた。確かに「控え室」の文字がある。

ドアを開けて中へ入ると、武装解除されて手を縛られた襲撃者と、それを見張るイマドとがいた。

撃たれた少年はソファに寝かされて、心配そうに子供たちが覗きこんでいる。

「学院長、なんだつて？」

「迎えをよこすから、待機してるようにつって」

「そう言つながらイマドの隣へ行く。と、今度は子供たちが不安げに身じろぎした。

「あ、いけない。

慌てて太刀を鞘に収める。

「けど、駅員さんたちに、なんて……言つたの？」

「どう言つたのかが不思議で、尋ねてみる。

「別に。『学院の任務に関係することだから』つたら、すぐ納得し

てくれたぜ

「任務つて……あたしたち、傭兵隊じゃないけど……」

「どうせそこまで考えやしねえよ」

これでいいんだろうか？

でも代わりに訂正なんて、あたしに出来そうになくて、とりあえずそのままにしておくことにする。

合計7人を、港から学院の連絡船に乗せて戻つたのは、それからしばらくしてからだつた。

Imad

診療所と学院長とに全員引き渡して、やつと一息ついたのは、もう夕暮れになつてからだつた。撃たれたガキが連れてきたチビどもには、ルーフェイアがついてる。

軽食6人前ほど作りながら、俺は迷つてた。

あいつらの持つてきた「ワケ」は、あんまいもんじゃない。けど、見過ぎせる話でもねえのが困る。つか、もしルーフェイアのやつが聞いたら、速攻でここ飛び出しちまうだろ？。なんでもつて抗争のど真ん中に、飛び込んじまつことになる。

じつ言つてシーモアとナティエスが、慌ててどつかへ出かけた時から、なんかおかしいとは思つてた。

けどまさか、これほどでかい抗争のために戻つたとは……。

あの2人つてのはロデステイオの首都、ベルデナードのスラム出身だ。しかもそのスラムにいくつもある、暗殺集団 ギヤング団なんかじゃない の中でも、1、2を争うチームの所属だつたつて聞いてる。

で、そこがナワバリだかをめぐつて、別のところと全面衝突はじめたらしい。駅での銃撃戦はその延長戦だ。

前哨戦でかなり形勢がヤバくなつたシーモアたちの仲間が、せめてチビどもだけでもシーモアたちの所へつてつもりで逃がしたもののが尾けられて、最後の最後で鉢合せしたっぽかつた。

パンを重ねながら、ぼうつと考える。

ルーフェイアのヤツは、間違いなく行こうとするだらう。

なんとかして知らないようにすりや、いいんだろうけど…… チビどもが来ちまつた以上、それもムリだつた。確実にバレる。

止めるか、行かせるか。

ムリだな。

あいつが行く気になつたら、止めようなんてない。イザとなつや学院にシユマーの船呼んででも、出でつちまつはずだ。

しかもマズいことに、良くも悪くもルーフェイアのヤツは、素直で疑うつてこと知らない。そのうえ自分が、やたら人目引く美少女だつての、まるつきり自覚してねえ。

そんなのがひとりでスラムをウロウロするとか、考えるまでもなくヤバ過ぎだろう。肉食竜の前に、肉の塊置くようなもんだ。だったら行かせて、フォローするほうがまだマシだつた。

ベルデナードまでは、かなり距離がある。

いちばん早いのは、ケンディクから海超えて、大陸東南部の元ワサール国へ。そつから列車使って、隣のロデスティオに入るルートだろう。

船で丸1日、列車で4日の長旅だ。

通り抜けるワサールは、植民地化されたせいでいまもいろいろキナ臭いけど、町の治安はそれなりだ。ちゃんと列車も運行してるし、沿岸部の観光地は今も変わらず賑わつてるつていう。

ロデスティオのほうも軍政敷いてつけど、国内はけつこう自由らしい。首都のベルデナードは、観光でも有名なくらいだ。あと、あんま覚えてないし実感ねえけど、俺の生まれた国だつたりする。

ただ首都のスラムとか言われても、俺は場所さえよく知らなかつた。

まともに物事覚えてる年には、もうこの学院にいたから、俺がちゃんと知つてんのはケンティクと、叔父さんがいるアヴァン方面だけだ。

ともかく行き当たりばつたりで行つて、迷つてゐるヒマはねえから、下調べしどかないとヤバいだらう。

チビビもにでもきくか。

多分いちばん現実的な手段に、考えが落ち着く。どう聞き出すかって問題があるけど、まあどうでかなるだらう。

あとはどんだけ早く、ここを出れるかだ。

その抗争とやらがいつかは知らねえけど、シーモアたちが速攻で出でつてゐるから、そんなに余裕ねえんだらう。

行つて、どうにか出来るとは思わなかつた。

けどルーフィアのヤツはせつたい引かねえだらうし、俺もあいつらにはけつこう借りがある。

だから、やれるだけのことせつてみるつもりだつた。

Ruffer

「おーい、メシできたぞ」
そう言つて入ってきたイマジ「、真っ先に反応したのは、子供たちだった。

聞いたところでは3人とも、ベルデナードのスラムからここまで来たらしい。ただどうしてケンディクへことになつたのかはまでは、どうしても話してくれなかつた。

「うひやあ、ご馳走だよ！」

3人のなかではいちばん年かさりし少年が、皿をまるくした。

「うわあ、いっぱいだ〜！〜！」

「すっごい、これ全部食べていいの？！」

大騒ぎになる。

「……セヒルくんのあつあわせだつて。まあいいや、しつかり食えよ？」

「うん！」

一斉に手が伸びる。

たちまち奪い合いが始まった。

「あ、ダメよ、ケンカなんかしちゃ……せう、たくさんあるんだもんの」

急いで間にに入る。

「けど、こいつ俺の盗つたんだぜ！」

「ちがうよ、これあたしのだもん！..」

「の子達、満足に食べていなかつたんだろ？」自分分を確

保するのに必死だ。

「こんなに小さいのに。

スラムは過酷だと聞いたことがあるけど、急に実感して悲しくなる。

あたしも戦場は辛かつたけど、いつもこう思ってはしたことがない。

「あれっ、お姉ちゃんどうしたの？」

「あ～、泣かした～！～！」

「俺じゃないぞ！」

子供たちに騒がれて、自分がつゝ涙をこぼしていたことに気付く。

「あ、えっと、違うの。ケンカするほど……みんながお腹、空かせてたんだって思って……。

「ゆっくり、食べてね？」

3人が静まり返った。

「どうしたの？」

「ごめんなさい。もうケンカしない」

子供たちが口々に謝る。

「そんな、いいのよ。あたしがすぐ泣いたのが悪いんだもの。

ほら、ミルクもあるからね」

「うん、お姉ちゃんありがと～！」

今度は3人とも、ケンカをせずにお行儀よく食べ始めた。その姿にほっこりする。

「お～、これお前のな」

「ほう」と子供たちを眺めていたら、イマドがお皿を出してくれた。

子供たちの分とは別に、いろいろ挟んだパンが乗せられてる。

「ありがと」

あたしはいつも生存競争に弱いから、わざわざわけておいてくれたんだろう。

それにしてもイマド、いつたい何人分作ったんだろう？ 子供たちのはきつちり3人前以上あるし、自分の分も2人前くらい確保している。

子供5人で6人前？

すごいとしか言いようがない。

半分呆れながら、あたしも手をつけた。

「あ、おいしい」

思わずそう言葉が出る。

でも食べながら……どうしても気になることがあった。

「　　イマド、聞いてもこい？」

「ん？ なんだ？」

一瞬ためらひ。

けぢやつぱり氣になつて、尋ねてみた。

「あの子たち、なんで襲われたりしたの？」

あの時学院に連れて行こうとしたのは、イマドだ。だとすれば、理由が分かってるはず。

「ん~」

イマドが珍しく、口ひもつた。

「どうか、したの？」

急に心配になる。

イマドがこんな風に囁ひのをたまひいじとせ、ほととぎす。言えないなら言えないで、やつせつめつめつのがこつもだ。

「　　あたしが聞いたら、困る」と。

それならにも、無理に聞こうとは思わない。ただ雰囲気からみると、それともまた違つようだった。

「ホント言つてたくなんだけどよ、言わないわけにもいかないつーかわ……」

「?」

「の子達が来た」とが、ぢりじてそんなに複雑な話になるんだろう？

「まあここや、あとでやつくな。ぢりじてたまひいじとせ、落ち着いて話も出来ねえし

急に聞き分けのよくなつた子供たちにびっくりする。

「無理しなくて、いいのよ？」

慌ててそう言つたけれどみんな「待つてゐる」と言つて、それ以上はせがまなかつた。

「「めんね、あなたたちにまで氣を遣わせやがって」「いっていって。それより姉ちやん、早く食べやいなよ。

食べてないの、もう姉ちやんだけだぜ。」

「えつ?うわ.....」

子供たちはまだともかく、氣がついてやままでこのまにか食べ終えている。

いつたいいつの間に、食べたんだろう。

ともかくあたしだけ食べ終わっていなのもおかしいから、急いで手をつけた。

子供たちはあとめて、イマドが話しつなつてこる。

「兄ちやんや、毎間すじかつたよな~」

「お姉ちやんも強かつたよね?」

「せりやまあ、俺じこけむり学院生だかんな」

けつじつイマド、嬉しそうだ。

でも確かに、学院生の強さは半端じゃない。あたしたちくらいの年でも、上級傭兵の候補生ともいえるAクラスは特に、みっちり仕込まれてこる。

「そつか~。俺も入りたいんだよな」

「ムリだよ~」

あはは、と子供たちの笑い声が響いた。

「やつぱつや、シーモアお姉ちやんとか、ナトリお姉ちやんみたいに強くなくつりや」

「やがついてやがって」

「シーモアとナティ……ナティエス？！」

唐突に飛び出した名前に驚く。

「あれっ、姉ちゃんシーモアの姉キとナティねえ、知ってるんだ？」

もしかして、ダチとか？」

「あ、うん。そうだけど？」

なあんだと一斉に子供たちがつなづく。

「どうりでメチャメチャ強いワケだよな～」

「うん！」

子供たちが納得する。

けどあたしはそれどころじゃなかつた。

だから、イマドが言いたがらなかつたんだ。

理由はともあれ、銃撃戦に巻き込まれるような子供たちだ。とうぜん何か裏が、それもとんでもないものがあるんだろう。

その子供たちがシーモアとナティエスを知つていて、なおかつ彼女たちはスラムへと出かけて行つた。

このことに、一瞬息苦しくなる。

正確なことは分からぬけれど、ベルデナードのスラムには……銃撃戦以上のものが待つてゐるはずだ。

視線をやると、イマドが真剣な顔をしていた。その瞳が「半端な話じやない」と言つてゐる。

「ねえ」

子供たちの方に向き直つた。

「シーモアもナティエスも、大事な友達なの。何があつたか……教えてくれる？」

さつとあたし、
厳しい顔をしていたんだろう。子供たちが、ぐぐり
とつばを飲んだ。

「悪いい、待たせた」

「ううん、あたしも……いま来たとこ」

翌朝、船着場で待つてると、時間。ピッタリにイマドが来た。時間が早いから、まだ人は少ない。吐く息が白い中、任務らしい先輩が2人居るだけだ。

シーモアたち、大丈夫だらうか？

助けた子供たちの話から、シーモアたちが向かつたのは、昔いたベルデナードのスラムで間違いないのが分かつた。しかもよく聞いてみると、これから大規模な「祭り」つまりは抗争があるとう。

とんでもない話だだつた。

あたしも実際に見たわけじゃないけど、シユマーには世界各地のスラムから、一族へ加わった人も多い。そんな彼らから伝え聞いた話だと、それこそ殺るか殺られるかだつていう。

それを承知で、シーモアたちはスラムへ向かつたらしかつた。だとすれば、早くしないと2度と会えないかもしれない。

気が気じゃなかつた。

あたしが育つた戦場では、人が死ぬのは当たり前のことだつた。ついさっきまで一緒に話をしていたはずの人が、一瞬にして骸となる。そういう世界だつた。

だから……いつも怖かつた。今日は誰がいなくなるのかど。

やつとそう思わなくなつたのは、学院へ来てからだ。

もちろん父さんや母さんには、その危険がいまもあるけれど、少

なくとも友達や先輩にはそういうことはない。

それなのに。

これ以上誰かがいなくなるのは、絶対に嫌だ。

「さうあとに行こうぜ。乗り遅れるわけにやいかないからな」「そうだね」

学院の方にはさすがに本当のことは言えなくて、あたしはアヴァンの親戚宅 実際にそこににあるのはシユマーレの施設 ベイマードはアヴァンの伯父さんの家へ行くと告げてあつた。

少し気が咎めるけど、「ベルデナードのスラムへ行つて、抗争に加わります」なんて言つたら、絶対に出かける許可はもらえない。もつとも一度学院の外へ出てしまえばあとはノーチェックだし、中には「私用」と言つて強引に許可をもらう先輩 タシュア先輩かも もいるというから、ルーズといえばルーズだ。

ともかく学院側には内緒にしたまま、どうにかあたしたちは外へ出る許可がもらえた。

ただこれは、ムアカ先生のおかげもかなりある。

いつどこでどう話を訊いて気付いたのか分からぬけれど、先生にはあつという間に、あたしたちのしようとしていることを見抜かれてしまった。

なのに先生、そのまま黙つて自分の名前で、許可を出してくれたのだ。

「あの2人を、無事連れて帰つてきなさい。いいわね」

不思議な表情でそう言つた先生が何を考えていたのかは、あたしには分からなかつた。

小気味いい動力音をさせている、連絡船に乗り込む。

「とりあえずケンティクまで行って、そつから船乗り換えてワサー
ルか。向こうは何時の船だ？」

「えつと……？」

あたしが考え込むと、イマドが呆れたような顔をした。

「とりあえずケンディクまで行つて、そつから船乗り換えてワサー
ルか。向こうは何時の船だ?」

「えつと……?」

あたしが考え込むと、イマドが呆れたよくな顔をした。

「お前、自分で切符取つたんじゃねえのか?」

「そうだけど……ケンディクのロシュマーのみんなに、頼んだだけ
だから……」

ロシュマーというのは、シュマーの一族のうち、戦闘能力が一定
水準に届かないグループだ。ただ人数は今は、こっちのほうが多い。
能力の幅が広いから一概には言えないけど、だいたいは後方支援
を担当している。

イマドがため息をついた。

「お前ときたら、連絡1本入れるだけで最新兵器まで、揃えられそ
うだな」

「うん」

「マジ?」

イマドは信じられないみたいだけど、あたしは嘘は言つてない。
やろとは思わないけれど、あたしが連絡すればきっとあらゆる兵
器が揃うはずだ。

ケビンのくらこの機動性?がないと、シュマーの傭兵たちの要求
には答えきれない。

なにしろシュマーは戦闘集団だから、国際情勢や各地の戦局に敏

感に反応する。そのうえ個人主義が行き届いていて、特別な命令がない限りは各人が勝手に突発的な動きをするのが普通だつた。

実際ひたすら平穏なこのユリアス大陸はともかく、アヴァン大陸のそれなりに大きい町には必ず、ロシュマーのメンバーが数人から数十人駐在している。

「ロシュマーの連中に同情するぜ」

あたしの説明を聞いて、イマドがそんなことを言った。

「まあいいや。ともかくロデステイオまでは、押されてあるんだよな？」

「うん」

話しながら連絡船に乗りこむ。

普段は見とれるほど綺麗な景色も、今日は闇に沈んで判然としない。

スラムつて、こんな感じなんだろうか？

ほんやりとそう思つた。

ベルデナードのスラム。シーモアとナティエスの育つた場所。そしてあたしには……未知の場所だ。

学院へ来る以前はずいぶん戦場を渡り歩いたし、ベルデナードにも何度も行つたけれど、スラムにだけは足を踏み入れたことはない。どんな場所なのか見当もつかなかつた。でも一刻も早くたどり着いて、シーモアたちと無事に再会したい。そんなことを考えているうちに、連絡船が止まつた。

「行くぞ」

「うん」

荷物を持って、別の埠頭へと急ぐ。

途中の約束の場所には、ちゃんと人影があった。

「グレイス様、これがローテステイオまでの切符ですので」駐在しているロシュマーの家族が出迎えてくれる。

「ありがとう。急に頼んだりして、ごめんなさい」

そういうと彼が笑った。

「グレイス様はお優しいですね。

我々相手に気を遣つてくださいなくともいいのですよ」

「でも……」

いつもみんなよくしてくれるけれど、別にあたし自身が偉いわけじゃない。

「まあ、もうそれはいいですから、船でお乗りください。」
「ここまで来て乗り遅れてしまつては、話になつませござ
る」

「え、あ、そうね……」
ひとりの男性　名前はドワルティ　　が先に立つて案内してく
れた。

「こちらの部屋を、押さえましたので」

「　個室の一等かよ。やっぱ半端じゃねえな
　イマジが驚いたような声を出す。

「え?　いつも……そうだけど?..」

両親に連れられてあちこち渡り歩いていた頃から、船も列車もた
いては個室だった。

「金あるな~。

まあ……お前に不自由させたら、首が飛ぶんだからなびよ
「そんなひどいこと　ー」

思わずわうわうとい、ドワルティがまた笑つた。

「それも確かにありますが、グレイス様のよつとお優しいと、我々
も一生懸命になりますよ。

といひでローテステイオの、どちらまでこらつしゃるのですか?」

「ベルデナードのスラムなの。ただ、番地まではちよつと……」

だいたいは子供たちから聞き出していくけれど、あの子たちも住
所まではさすがに知らなかつた。

「わかりました。ベルデナードの方にすぐ連絡して、詳しいものを
待たせておくようにします。

あと船内や車内での細かい事ですが……ひとつやつやつお友達が「存知のようですね。」

グレイス様をよろしくお願いします」

「あ、はい」

イマドが慌てて答えた。

ドワルディが一礼して出ていく。

「お前マジ、お嬢様なのな」

「そんなんじゃないわよ……」

だいたいこの世のどこに、戦場で太刀を振り回す深窓の令嬢がいるんだろう。

ため息をつきながら部屋のソファに腰掛けた。

イマドの方は、切符を見て時間を確かめている。

「ワサークに着くのが……やっぱ明日の2000か。けどベルディナード行きの最終に乗り継ぎできるから、ラッキーだな。

つて、の人らがそんなへマやるわけねえか」

なんかひとりで感心している。

「しつかしこれからしばらく、ひたすら乗るだけってか。ヒマだな

「あ、あたし宿題、持つてきた

「は?」

イマドが硬直した。

「なんもの……持つてきたのか?」

「うん。物理と数学と世界史、もう課題、出てたし

「いや、そりや確かに出てたけどよ……普通持つてこねえぞ?」

「え? そうなの?」

なんだか微妙に会話が食い違う。

「でも、せっかく課題、でたから……」
早くやらないと、出してくれた教官に悪い気がする。
けどいつも見てもイマドは嫌がっていて、なんだかこいつにも悪い
ことをしてしまったみたいだった。

自分の気のまわらなさに、情けなくなる。

「かくは、あた」

「あ、いや、泣くな！」

うつむいたあたしか泣き出す前で、イヤでが止めた。

「けど

「だから、いいんだって。

卷之三

た。だから譲らなくていいで。
お母さん、お母さんは明めし鏡つて、そこかのば。それでいいだろ？

「あ、うん」

卷之三

二二

2人で部屋を出る。

食堂は2層ほど下で取った部屋でたしたく座る場所が決まって

七
た

べれにしみる。

カーネを見て 每度のことなかに考えこんでしまは

書いてある」とは読めるけど……どんな料理か分からなかつた。イマドのほうはすぐ決まったみたいで、もうウェイターを呼んで

頼んでいる。

「すみません、それでお願いします。

あれ？ お前頼まないのか？」

「だつて……」

そんなあたしをじつと見ていたイマドが、ふつと笑った。

「肉と魚、どっちがいいんだ？」

「え？ お魚、食べたいかな……？」

急に聞いかけられて、反射的に答える。

「そうか。そしたらすみません、これも追加してもらえますか？」

「かしこまりました」

気がつくとイマドがあたしの分まで頼んでくれていた。

「ありがと……」

「いいって。だいいちいつもだしな。

にしてもこの程度かよ。んなの俺でも作れるっての」

まだメニューを眺めながらの彼の言葉に、思わず絶句する。

そりゃイマド、料理上手だけだ。

でもじくら船内の食堂とは云々、ちゃんとしたショーフが作っているはずだ。

なのにそれを「この程度」だなんて……。

「ねえ、イマド……どうやって料理とか、覚えたの？」

いつたいどこで覚えたのか、不思議になつて尋ねる。

「ん？ まあいちおう、最初はお袋からな。

あとは適当にそこからくんでか？」

「ふうん……」

れつひとつの出来事が上手な出来事だつたんだから。

あれ?

「ちど納得してから、また不思議に思つた。

「ねえ、イマゾのねぬわさつじ、だいぶ前にへなつたつて……？」

「ああ。3つの時な」

「……？ それでどうして……？」

「たつた3つくらいで、こんなに覚えられるものなんだかつかなんだかよく分からない」。

「ま、ワケはそのうちな。それよりメシ、来たみたいだぜ」
言われて辺りを見回す。

「ど……？」

ずっと向こうの違つテーブルに、ウェイターがいるだけだ。

「あ、悪い。でももう来るつて」

「？」

不思議に思う反面、たぶんやうなんだらう、とも思った。

イマドは時々、じうじうとをする。見えない位置にいたはずなのに知つてたり、次に起ころる事が分かっているようだ。そのせいでイマドが相手に模擬試合をすると、先読みされるしひエイントも見破られるしで、いつも大変だ。

正直言つて、身体に刷り込まれた条件反射とスピードがなかつたら、負けてると思つ。

そんなことを考えてるつむか、イマドの皿つとおつ、すぐお皿が運ばれてきた。

早速彼が食べ始める。

「……何の香草だ？ 他にも変わつたスペイス入れてんな」
食べながら、何を入れたか考えてるらしかつた。

あたしも手を止めて、自分のお皿を見てみる。

「これ、なんだろ？」

魚なのは間違ひないけど、分かるのはそれだけだ。
もつとも食べられるんだから、あとはなんでもいい気がする。

「なんか初めて見る野菜だな？」

「イマドは今度は、サラダをつつきながらぶつぶつ言つてゐる。けど、あんな風に食べてて美味しいんだろうか……？」

「なんだ？ どうかしたか？」

「え？ あ、なんでもない……」

「ほつと/orしていたら、さすがに変に思われたみたいだつた。

「どうでもいいけど早く食つたらどうだ？ 冷めちゃうぜ」

「うん」

見ればイマドのほつはもう半分くらい片付いていた。あたしの倍以上頼んで、もつこれだけ食べてゐるんだから、かなりお腹が空いていたんだろう。

と、今度は彼が手を止めた。

「どうしたの？」

「いや、ちょっと引っかかるってさ」

「喉に？ でもお肉に骨つて……あつた？」

「ちがうつて」

「ちがうつて」

どうも「引っかかった」違ひだつたらしい。

ただイマドはそれ以上何も言わなかつた。視線だけはあたしのほうを向いてゐるけど、見てゐるもののはまったく別のようだ。

「いつたい何のことが、さっぱり分からぬ。」

「ねえ？」

「つたぐ、あのヤロー」

「「めん、なにがどうなつちやつてゐるの？」

「ちよつと後でな」

そう言つてイマドが立ち上がつた。

一瞬戸惑つたけれど、すぐこあたしも理由を語る。

向ひのまづから怒声が聞こえていた。言葉から察するに、さうも密航した子供がいたらしい。

騒ぎがこっちへ近づいてくる。

食堂のドアを勢い良く開けて、追われている子供が駆けてきた。

あの子は！

間違いない。

あの子は昨日ケンディクで……。

I'm a d

ほどほどか？

そんなことを思いながら俺は、頼んだものを口に運んでいた。自分で作れる程度のもんばつかだけど、時々変わった味付けしている。

ちなみに向かいに座るルーフェイアのヤツは、自分が何を食べてるかさえ、ほとんど分かつてないっぽかった。つてか、それ以前にメニュー見ても自分で頼めねえほど、こいつは食べ物に疎い。

ある意味立派といえば立派か？

「……いつだったら間違いなく、毎食携行食でも飽きずに、『おいし』って言いそうだ。」

ただ今はなにを考えてんのか、メシが進んでなかつた。

「どうでもこいナビ早く食つたらどうだ？ 冷めちまつせ」

「うん」

促すとやつと、慌てて食べ始める。

華奢な手。細い身体つき。しかもいくらも食わなくて、これでよく持つと感心する。

けど、今度は俺が手を止める羽田になつた。

「どうしたの？」

「いや、ちょっと引つかかつて……」

「喉に？ でもお肉に骨つてあつた？」

「ちがうつって

魚のホネじゃあるまいし。……。

だいいちぢりやつたら、肉の骨が喉にひつかかんだか。ただ、やう突つ込む余裕はなかつた。

「つたぐ、あのヤロー」

昼だけじや飽き足らなくて、また騒ぎ起ひしてやがる。まだ普通じや聞こえねえだろつけど、俺は船内の騒ぎを聞きつけてた。

しかも幸か不幸か、じつちへ向かつてゐる。

「ごめん、なにがどうなつたやつてゐるの？」

「ちょっと後でな」

言いながら立ち上がつた。

騒ぎが近づいてくる。

さすがに今度はルーフニアのやつも、何が起ひつたのか分かつたらしい。はつとした表情を見せた。

ガキが食堂のドア開けて、ひとり突つ込んでくる。

つたぐ、食つてるとこで走るなつての。

俺の脇を通りぬけるタイミングを狙つて足を出した。それに見事に引っかかつて、ガキが前につんのめる。

「なつ、何すんだよ……あ！」

「つたぐ、お前こそ何やつてんだ。みんな心配するだ」
走つてきたのは、昨日ケンディク駅で助けた（？）ガキのひとりだ。

「協力してもらつて済まないね。さあキハ、切符を出してもらおうか

「いつを追っかけてた船員が来て、険悪な表情でガキに迫る。

「イマド……」

「ちょい黙つてろな

心配そうなルーフェイアをとつあえず黙らせるとい、俺は船員に向
き直った。

「その、すみません。こいつ俺たち追っかけて、勝手に乗っかりやつたみたいで」

「あん？」

「それじゃ……キミの知り合いか？　あ、それとも弟か？」

「勝手に誤解してやんの。

けど確かにこいつと俺、髪の色が割と似てる。

「俺らに置いてかれたのがヤで、来ちゃつたんだと思つたんです。お騒がせしました」

「とりあえず謝つてみた。

誤解の方は、面倒だから解かない。

「なるほど。まあ気持ちはわからんでもないが……切符を持たないで乗るのはよくないな」「すみません。

「ただ思つたんですけど、こいつ切符要るんですかね？」

「幸いこのガキ、年より小さい。黙つてりやせいぜい、5つくらいにしか見えねえはずだ。」

「ふむ、確かに……」

「船員が言わされて考えこんだ。」

「そうだな。ひとりで乗つてたならともかく、連れがいるなら切符は要らんか」

「つておい、いい大人がンな簡単に言いくるめられんなよ……。内心かなり呆れただけど、ともかく顔には出さないよ」

「あとはちゃんと、俺たちで面倒みますから」

「そうしなさい。ところでキミたち、もしかして学院の生徒なのかい？」
「それに子供だけで、どこまで行くんだね？」
「めんどくさい質問するなって。

けど答えないと、もっと面倒だわ」。

「確かに俺たち、学院の生徒です。あ、このチビは違いますけど。
で、ベルデナードーまで、ちょっと人に会いに……」

嘘は言つてない。

ただ無賃乗船の件が片付いて甘くなってきた船員、今度も勝手な
解釈をした。

「そうか、あそこは孤児ばかりだと聞いていたが、君たちみたいに
会いに行ける人がいる子もいるんだな。

ベルデナードーまではずいぶんかかるが、辛抱しなさい。それと
何かあつたら私に言うといい。ワサールまで、できる限りのことは
するよ」

これでいいんだろうか。

ガキだつて時には爆弾抱えて突っ込んだりするんだし、もちつと
他人を疑うつてこと、覚えたほうがいいような。

ただ、面と向かつてそうは言えない。

「すみません、ありがとうございます」。

俺たちも大人なしでベルデナードーまで行くのは初めてなんで、
そうしてもらえると助かります」

神妙な顔して、嘘スレスレを言つてみる。
もつとも相手が、どう取るかは知らねえけど。

「そつかそつか。それにしても遠くまで大したもんだ。

ほら、立つてないで早く食べてしまいなさい。あとこの子にも、

かやさんと食べやむなしやねむりにな

「はい」

結局船員は誤解しまくったまま、引き上げていった。じつにか静かになつたところ、食べるのを再開する。

「 兄ちゃん、ありがとう
「 ん？ 気にすんなつて。だいいち途中で放り出されたらお前、どうにもならねえだろ。」

「それよつとりあえず食えよ。何か頼んでさ」
さすがに神妙な顔で礼を言つてきたガキに、そう返す。

「オイラヤ……」

「ねえ、どれにする？」

「こつが何か言いかけたけど、タイミングよくルーフェイアがメニューを出した。

「なんだこれ。これ見るとなんかあるのか？」

「え？ 何つてその、メニューだけど……」

「メニュー？」

会話が成り立つてない。

「えつとね、ここにその、いろいろ料理が書いてあって……ここから選んで、頼むの」

ルーフェイアにしちゃ珍しく、的を射た説明だ。ただ、その先是予想以上だった。

「そのね、オイラ字読めねえから、姉ちゃん読んでくれよ」

「え？ あ、ごめんね！ ええと……」

ルーフェイアのやつがメニューを読み上げ始める。

「姉ちゃん、それってどんな食いモノ？」

「え……？」

「つて、最悪の組み合せか？」

ルーフェイアの方が知つてりやまだともかく、双方で分かんねえからまさにお手上げだ。このまま放つておいたら1日経つてもまだ、料理にありつけねえだろ？

「 おい、適当に頼むぞ」

「あ、うん。兄ちゃんにまかせる」

さすがに見かねて、また俺が適当に頼む。

「イマジ、『めんね……』

「だから謝るなって。別にお前が悪いわけじゃねえだろ。

ほら、さっさと食つちまえよ

面倒を見る人数が増えて、妙に忙しい。

「ほら、お前もここに突つ立つてんじゃねー。つて、手汚ねえな。洗つてこいよ」

「え？ なんで手洗いのさ」

常識通じてねえし。

けど幸い、バタついたのはそこまでだつた。手洗わせて座らせて、メシが運ばれてきたあとは、2人とも大人しく食べ終える。

「でさ、兄ちゃん、オイラ……」

「ストップ。部屋戻つてからな」

言つて俺は立ち上がつた。

ただでさえさつきの騒ぎで注田浴びてゐるの、んなヤバい話がこじで出来る訳がない。

食べ終わつた2人もついてくる。

にしてもこいつ、どうするかな。

もつともワサールまでは降ろすワケにいかねえから、問題はその

後だ。

けびこの調子じゃ、ほつとくと何しでかすかわからんねえしね……。
けつきよく最後まで連れてくしかないだろうと思いつつ、俺は部屋へと向かった。

部屋の鍵を開けて、ガキを中へ入れる。

「すげえ部屋……」

育つたところがアレだから、こんな見んの始めてなんだろ？。つか、俺だって見たことなかつたし。

「けどイマド、どうしよう……？」

心配そつに言うルーフュイアに、俺は答えた。

「連れてこいつぜ」

「え、でも、危ないんじゃ……」

ベルデナードに何が待ってるのか、さすがに分かつてんだりう。心配性のコイツが、思つたとおりのことを言つ。

「同じだつて」

答えると、不思議そうな表情になつた。だから説明する。

「学院抜け出して来やがつたんだ、返したところでも逃げ出すのがオチだろ。

だつたら俺らで見張つてたほうがいいって

「……そつか」

今回は俺らが居たからよかつたけど、次はそつは行かない。うつかり無躰を咎められたら、大騒ぎだ。

それにこのガキは忘れてんのかもしんねえけど、昨日は襲われたくらいだ。学院の外じゃどうやっても、安全とは言えなかつた。

「オイラ、そんなチビ竜みたいに、ちょこまかしてないよ

「十分してるつての」

なんか気に触つたのか、口を尖らせたコイツに言い返す。だいたい勝手に抜け出しておいて、ずいぶんな言い草だ。

「ともかく俺らと一緒にいるつひ。ひとりでウロつこぐと口クなことねえぞ」

「冗談じゃないつて！ オイラ帰るんだ」

「だから、帰りやいいだろ」

言つてから、気がつく。微妙に話が噛み合つてない。他の2人も気づいたらしくて、思わずみんなで沈黙する。

「あー、だからさ、俺らが行くのはお前がいたスラムなんだよ。だから一緒に来いつての」

「え、そうだつたんだ！」

やつと話が繋がつた。

けどこのガキが、急に警戒した表情になる。

「どうした？」

「なんで、そこ行くの？」

俺らを「よそ者」として、疑つてる瞳をいやがる。

まあ、しゃあねえか。

もともと俺ら、全くスラムには関係ねえし。

同じ事感じたんだらう、ルーフェイアのヤツが視線を落とした。その瞳に、涙が浮かぶ。

「……いきなり泣かせてどーすんだよ」

「え、あ、その、えつと、オイラそういうこいつもりじや……姉ちゃん、じめんよ、じめんつたらーー！」

生意気なこのガキも、これには驚いたんだろう、慌ててなだめた。てか、年下に慰められるつて、なんか微妙に間違つてる。

「ううん、いいの。だつてあたしたち……ほんとは関係ないから……」

部外者が乗り込むつてことの意味を、意外にもルーフェイアのヤツ、分かってるらしい。それを指摘されたのと、でも行きたいのとで、板ばさみで泣いたつぽかつた。

つかコイツ、言い返す代わりに泣くし。

「けど、けど……シーモアもナティエスも、友達だから……」

「姉ちゃん、オイラが悪かった。ごめん、謝る」

あっさり、ガキが謝った。もひとつ生意氣だと思ってたから、これには俺も驚く。

ルーフェイアのヤツも驚いたらしくて、泣くのを忘れてガキを見た。

「その……ンな理由でさ、それもスラムの外で育つたヤツが来てくれるなんて、オイラ考えたこともなかつたんだ。

「姉ちゃんたち、すっげえいい人なんだね」

「そんなことないわ」

間髪いれずにルーフェイアのヤツが否定したけど、説得力はゼロだ。俺はともかく、コイツの人の好さは並外れてる。

「ま、そゆやつもいるつてことさ」

俺の言葉に、何度もガキが頷いた。

それから、いちばん肝心な事を思い出す。

「そついやお前、名前なんてんだ?」

「え? あ、そか、言つてなかつたつけ。オイラ、ウインつてんだ」
胸を張つて答えたガキに、ルーフェイアのヤツが返す。

「いい、名前だね」

「え、それほどでも……」

耳まで赤くなつてゐるあたり、ルーフェイアの美少女、ふりにアテられたんだろう。けつこうマセたガキだ。

「とりあえずお前、シャワーでも浴びてこいよ。その頭だと、ずつと身体洗つてねーだろ」

「え……」

ガキがあとずさつた。

「オイラ、そういうのはさ、えーと別に、死なないからいいじゃん

「入つてこい。じゃないと、甲板から海に捨てつぞ
髪に虫でもつけてそなやつと、同室はさすがに願い下げだ。

「ワインくん……入つたほうが、いいよ。

「んと、そしたらあたしが、洗つて……あげようか?」

「いいつ！ オイラひとりで入るつ！」

ルーフェイアの「親切」に、ガキが身を翻してシャワー室へ駆け込んだ。さすがに素つ裸を女子に見せるのは、ヤなんだろう。

「他人が洗つたほうが、きれいになるのに……」

さすがにここまでくると、ガキが可哀想になる。

「やらせとけよ。つかさ、学院のガキならあの年なら、だいたいの事はひとりでやるぜ?」

「あ、そつか」

やつと納得したらしい。

俺はソファに腰掛けた。

「ともかく一段落だな。つたく朝つぱらから、大騒ぎだつたぜ」

「そうだね」

「ワインの相手しながら、さてどうしたもんかと考える。

ただあのワインつてガキ、やり方によつちや役に立つかもしんな

い。なんせ出身がスラムだ。これ以上の案内役はいねえだろう。

と、ここに襲つた連中の仲間が居ないかつて訊かれた気がして、俺は答えた。

「あ、それはねえと思つぜ。俺らがとつ捕まえた連中で、全部だつたからな」

「え？」

ルーフェイアのヤツの、驚いた顔。

やべえ。

久しぶりに、血の気が引いた。

一部の家系には時々、念話が出来るヤツが出る。で、詳しい事は分かんねえけど、俺のお袋がこの家系だつたらしい。それを継いじまつたのか、俺も同じことが出来た。つても、相手もそういうヤツじやなきや話できねえし、ふだんも稀に、相手の考へてる事が聞こえるくらいだ。

ただ、この手の能力はものすごく嫌われる。
だからいつも、かなり気を付けてたワケだけど……ボケつとしてたせいでルーフェイアが「言つたこと」じゃなくて、「考へてる事」を聞いちまつたっぽかつた。

「いやその、なんとなくそれっぽいだけですよ……」

「うわ」

珍しく、いつもが鬱鬱入れず言い切る。

「読んだ……よね？」

「まかそらかと思つたけど、ここつ瞳を見てムリだと呴った。何が起こったかコイツ、ちゃんと分かってる。

なんか言おうと思つたけど、言葉が出て来なかつた。

と、ルーフロイアのヤツと瞳が合ひ。どつか怯えた、泣き出しそうな表情。

そりやそりやな。

こんな薄気味悪いこと、受け入れられるほつがおかしい。

「その、イマド、『めん……』

「つてだからなんでそこで、お前が謝つて泣くんだよ」
こつもの事とはいえ、しつこつ状況でつてのは予想外だ。

「じめんなさい……」

聞こえてねえし。

「いやだから、別にお前悪くねえだろ」「だつて、あたし……イマドが、言われたくないこと……」「はい？」

意味不明にもホドがある。

けど、表情見て気づいた。怯えてる理由は俺に読まれたことじやなくて、「嫌われたかもしれない」とほうだ。

なんでもうなるかかなり謎だけど、俺が黙った事を、自分が悪かつたと思い込んだらしい。

「言われたくねえってか、要するに俺の不注意だし。
てかおまえ、なんですぐ分かった？ 普通じゃこれ、へンだとは思つても、何が起こったかはわかんねえぞ」

これも不思議だった。

じつ言えば、今みたいなうつかりは、何度かやつたことある。ただ考え方を読まれてるとか、たいていは考えつかねえから、トキメキな言い訳で話はいつも終わつてた。

「まさかおまえ、出来るとか言わねえよな？」

さすがにないだろ？と思いつつ、言つだけ言つてみる。
ただルーフェイアのヤツ、すぐ気がついただけあって、答えがもつと度外れてた。

「ううん、あたしは出来ないけど、母さんも姉さんもそつだから…

…

「 はい？」

さすがに聞き返すと、ルーフェイアのヤツがたどたどしく、説明

始める。

「えつと、だからその、うちって……アレでしょ。そのせいか、一族のかなりが、そういう人で……」

「……お前の家が並みじやねえの、忘れてたぜ」

考えてみりや、あのシユマード。そんなもんが人並みなほつがおかしい。俺のお袋の家系以上に、変わつた連中が居てもいいくらいだ。

「要するに前にしてみつや、前たり前ひとか」

「つん」

なんか力が抜けた。

氣い遣つてた自分が、妙に情けなくなる。

「ねえ……やつぱつにママだも、母さんみたいに分かるの?..」

「お前のお袋よく知りねえから、なんともも言えねえけど。」

「けどなあ」

なんとなく頭を搔きながら、続ける。

「最初からそいつと分かってりゃ、こんなに氣なんか使わなかつたぜ
「い」「ごめん……」

「やけで泣くなつて」

また泣き出した。「イツに苦笑する。ホントに甘つたれで泣き虫だ。

「ま、俺の場合やむ」と。

なるだけ使わないよ今は氣をつかひんだけビよ、隣の席の話が
聞こえるのと一緒に……つこつ聞こえまつ時あつて。
悪りいな。もしやな時は、はつきり言つてくれていこせ

肩の荷が下りた氣分で呟つ。やつぱんなこで済むつてのは、楽
だ。

ただ、返ってきた答えは予想外だった。

「あのね、いこよ。平氣」

「何がだ?」

一瞬だけ戸惑つたけど、すぐ理解する。

「いつは最初から、考へてる事を隠す氣なんて、なかつたんだろ
う。

「サンキューな

「ううん。

だって知られて困ること ないもの」

何の気負いもなく微笑むこいつの頭を、俺はつい撫でた。

Natress

学院出てから、日田の朝イチ、あたしたちやつと古巣へ辿り着いた。

けじ久しぶりに来たスラム、変わつてなかつた。
お金ないから高速艇とか特急使えなくて、時間がかつちやつたけ
ど、じれだけでも来た甲斐あつたかな？

あいかわらずきつたないなあ。

でもその薄汚れた街並み、キライじやないの。
あの頃……悪ガキしてたあたしのこと受け入れてくれたの、ここ
だけだもん。

「なに考えてんのぞ」

「ん？ 昔のこと」

訊いてきたシーモアにあたし、ちやんとそつ答えた。
だつて別に、隠すようなことじやないから。
なにしろシーモア、あたしのこと全部知つてゐる。

「なんだおめえら、しばらく見なかつたなあ。お、シーモア、デカ
くなつたじやねえか」

耳に馴染む、獨特のスラング。

あたしつてばそんなにここに長くいなかつたから上手く使いこな
せないけど、聞くほうは慣れてるのよね。

「おつさん、触るんじやないよ。金取るぞ」

「ちつ、手厳しいなあ」

絡んできた知り合い、つて言つていいのかな？

の酔つ払い

オヤジを、シーモアつたら軽くかわすじ。
ほかにも声をかけてくる人、何人かいたり。

スラムつていわゆる都会と違つて、けつこう人の結びつきは強いの。

みんな大変だけど、助け合つてやつてる。
ワルさするのも多いけど、それは黙認。

だつてこの街、正規軍の兵士やら警察なんかがウサ晴らしに、来ては酷いことしてくんだもん。

もしなにかシティで犯罪があつたら、必ずここに誰かが犯人に仕立て上げられちゃうし。

そのうえここに住人だつてわかるうもんなら、繁華街の店とかどこも、売るの嫌がつたりするのよね。

けど、どこが違うのかな？

あたし別にここに生まれじゃないし、ここから他の町へ行つて成功して、シティで下にもおかしい扱い受けてる人もいるし。

ホント、世の中つてどうかしてるよね。腹たつな。

大人つていつたいどこ見てんだが、あたしにはちつともわかんな
い。

と、すれ違ひ様に誰かがぶつかってきた。

「つと、アンタらどこ見てんのさー。こっちの上等な服が
「あたしに向かつてカモるなんざ、いい度胸じやん、ミハーナ
「え？」

「シーモア？！」

このスラムにはよくいるこの手合いだけど、彼女はシーモアの知

り合いだつたみたい。

ただ、あたしは知らなかつた。

「シーモア、誰？」

「あ、ナティは知らないっけね。

パンテラって言うグループのミハーナ。ほら、目潰しのミハーナ
さ」

「ああ」

パンテラっていうのは、この街にたくさんある不良少女グループの中でも、最強チームの名前。で、シーモアったら今のグループに引き抜かれる前は、そこにいたって聞いたことあった。

その中でも目潰しのミハーナは、リーダーのティニーと並んで、こじじゃ相当名が知られてる。

「ウワサじゃさ、大の男を5人もノしたっていうけど、あれホント
？」

「あはは、ノしたってほどじゃないよ。あいつら分け前よこさない
上にさ、ナイフなんか出しゃがつて。

ハラたつたからティニーと2人して片っ端から役立たずにして、ついでに目玉潰してやつたんだ」

「ふうん、ほんとだつたんだ……」

シーモアから話は聞いてたけど、当人から聞くのって、やっぱり違うかも。

「それにしてもあんた、どこのモンさ。あんま見かけないね
仕方ないって分かってるけど、こう言われちゃうと、ちょっと寂
しいかも。あたし、ここの中の言葉へタだから、丸分かりだし。

「言ひの遅れたね。

「イツはナティエスって、あたしのダチさ。ガルシィンとこで、前にいつしょに世話になつてた」

「へえ……そりや驚いた」

「ミハーナが、ちょっと見下した顔になつて。
「いつからガルシィンとこは、お嬢さんを飾るよつになつたんだい？」

ちなみにあたしたちのグループは、名なしなの。というか、もう「ガルシィのとこ」って言えば通じちゃうほど有名。

もひとつ言うとあたしたちのとこは、普通?の不良とは一味違つて、強盗なんて絶対やらない。

普段はたいてい誰かの依頼 店主どうしの嫌がらせ試合みたいなものもあるけど で、ボディーガードまがいをしてるの。後はあたしたちより上になる大人のグループに頼まれて、兵隊やつたり。

手つ取り早く言えば、お金で力を売るつてとこなのかな？ どつちにしてもこの辺は、学院の傭兵隊と大差はないのかも。

レベルはかなり違うけど。

あたしとシーモアが学院にいる理由も、その辺にあつたりするし。

シーモアが続ける。

「まあ、そう思うのは分かるけどね。

けどナティ、腕はいいよ。確かに引っ張り込んだのはあたしだけど、ガルシィんとこはそんだけじゃ、居られないの知つてるだろ」

「そりや そうだけど……あつ！」

あたしが手にしてる財布見て、ミハーナ、さすがに声あげたの。

「あたいの財布、いつのまに！」

「んーと、今話してる間？」

隙だらけだつたし。

でも彼女は、やつこいつもつじやなかつたみたい。

「こなんみごとこ掏られたのは、初めてだよ。

アンタただのお嬢さんかと思つたら、見かけによらないじゅん

「えへへ

「ちょっと嬉しかつたり。

「それにしてもシーモア、アンタが学院入学したつてホントなのが
い?

確かにしばらく姿、見なかつたけどさ」

「ああ、ホントで

ミハーナの言葉にあつたりシーモアが答えて。

「いいね、なんだかあつちじや、わつちつメシまで面倒見てくれ
るつて?」

「うーん、いいくていうのかなあ?」

訊かれてちょっと、答えに困つちやつた。

確かに学院つて、飯も服もお小遣いもくれるけど、スラムにいた
ときみたいな『わくわく』はないんだもん。

「あれ、そんなもんかい?

ま、どっちでもいいや。あとでヒマ見て、つむのコーダーにも挨

拶してきなよ

「ああ、そうするよ

「あ、その時あたしも行つていい?」

シーモアが昔いたつてグループ、興味あるもん。

「そしたらあたいから、ティニーにそう言つとくよ。んじゃね

言ひざまミハーナつたら駆け出して。きっとあれ、その辺の繁華

街で誰か力モるんだろうな。

「やれやれ、こつもながり立じこやつだよ。さて、さつやうじいひ
か？」

「そだね」

まだ確かに朝だけ、マジツヘイモでにお風になつたら笑い物。
だからあたしたち、懶れ足で歩をはつたの。

Ruffeir

まだ朝のうちに、列車は終点の駅 ベルデナードに到着した。

「やつと着いたな

「うん」

ケンディクを出でから、もう6日目になる。

構内をぬけて自走階段を登つていぐと、整然とした街並みが見えてきた。

ベルデナード 既知世界最大の都市。

ただ、都市自体の歴史はさほど長くはなかつた。そもそもロデステイオという国自体が、出来てからせいぜい150年だ。

この大陸は古くから、神聖アヴァン帝国が巨大な版図を誇つていた。だが千年王国とまで称された帝国も、200年ほど前にはすっかり衰えて、地方の領主が次々と独立を宣言した。

ロデステイオも、その中のひとつだ。そして独立後、この地にあつた小さな街へ遷都、ベルデナードと名前を変えて大規模な開発が行われて今の形になつた。

その後は貿易と農業で、この国は生き延びてきた。

大戦までは。

もともと王政だったロデステイオは、30年ほど前に軍を中心とした革命が起こり、軍制が敷かれた。

当初は激しい内戦になると予想されていたけれど、意外にも政府軍は巧妙で、またたく間に国内を制圧してしまつた。

けど、問題はそのあとだ。

優秀な將軍を擁した政府軍は、そのまま肥沃な土地を擁する隣国マハイスへ侵攻。あつという間に併合したのだ。しかも勢いは止まらず、次々と隣国を支配下に収めてしまった。

当然だけどこれは他国の反感を買つて、ロデステイオ打倒の機運が高まり、戦争が始まった。

でも戦局はいろいろあつたのもの、総じて一進一退だつたらしい。連合国側が内部で足を引っ張り合つて、足並みが揃わなかつたことも大きかった。

加えてロデステイオが、さらに西方の大國エバスと同盟を組んだため、文字通り大国を二分する大戦に発展。出口の見えない状態になつてしまつた。

けつときょくこれといった成果がないまま、財政的な面で行き詰まつて、ロデステイオ・エバス同盟と連合軍は、停戦条約を結んだ。

そして今もこの国は、軍が実権を握つたままだ。

まつすぐ向こうに有名な、凱旋の塔が見える。

〔征服の証し。〕

どれだけの血の上に、あれは建てられたんだろう？

そう思うと整然とした街並みが、ひどく空虚なものに見えた。

「おい、ルーフェイア」

「なに？」

イマドが声をかけてくる。

「いや、ケンディクで切符くれたあの人……迎えがどうとか言ってなかつたか？」

「え？ あつ！」

言われてやつと、ドワルディに言われたことを思い出した。そういえば彼、『スラムに詳しいものを持たせておく』と言っていたはずだ。

「けどよ、それらしいやつ見あたらねえぜ？」

「えつと……」

ざつと周囲を見まわしてみたけれど、あたしたち以外立ち止まつてる人は見あたらない。

だいいち家の者は全員、あたしの顔だけは知つていて、万が一あたしの方がわからなくとも、必ず声をかけてくれるはずだ。なのに、誰も見当たらないということは……。

「 いないみたい」

「 いないつて……珍しい話があつたもんだな」

彼が驚く。

でも確かに珍しい話だった。なにか途中で手違いがあつたのだろうけれど、こうこうことは初めてだ。

「 どうしよう。待つてたほうがいいのかな……？」

「 んな時間ねえぜ？」

「 そうだね……」

イマドの言つとおりだつた。

最初からシーモアたちには、1日以上出遅れている。ここでもまた時間を取られたら、もしかしたら間に合わないかもしない。

「 ねえちゃんたち、なに困つてんだよ。オイラちやんと案内できるぜ」

後ろで得意げにウインがはしゃいだ。

「 さすがにシティぜんぶはムリだけどさ、スラムだつたら庭だもん」

「 そりやそりやだらうな」

少年の言葉にイマドが笑つた。

「 よし、案内してくれ。ルーフェイア、行くぞ」

「 あ、ちょっと待つて」

あたしは急いで近くの端末に駆け寄つて、表示されていた掲示板に伝言を書きこんだ。

もし迎えと入れ違いになつたら、家が大騒ぎになる。最悪、捜索隊まで、母さんそういう人だ、出されかねない。

「これでよし、と。『めんね、もつ行けるから』ベルデナードのような大都市ともなると、駅の伝言板も端末内に設けられた掲示板になつてゐる。ここに書きこんでおけば万が一すれ違いになつても、すぐメッセージが伝わるはずだ。

「ねえちゃんも大変だなあ。どうか行くのにいちいち知らせんのか」ワインが妙なことで感心する。

「こいつんちはいろいろあるからな。で、とりあえずはバスでいいのか？」

「うん」

答えたワインはそのまま階段を降り、下のロータリーに並ぶ幾つものバス停のうちの一つに並んだ。

表示を見ると「ショッピングモール行き」となつてゐる。

「ショッピングモールつて……いちばんの繁華街よね？ そうするとワインのいたスマムつて、ファーストの方なの？」

「だよ」

どうやらあたし、勘違いをしてたらしい。

ベルデナードという町はほぼ円形を作つてゐる。

そしてその円を南北に中央通りが貫いて町を2つに分断し、西側は高級住宅地と役所などの機関、東側は巨大なショッピングモールとアパート群が立ち並ぶ構造になつていた。

ただこの巨大な繁華街は、20年前に旧繁華街が移設されて出来たもので、町全体に比べると歴史は浅い。

そして再開発されるはづだった旧市街のほうは、その後大戦で計

画が中止され、そのままスラムになってしまった。

これが俗に「ファースト」と呼ばれるシティ内のスラムで、治安が悪いことで有名だ。

ただ規模のほうでは、シティ外にあるもののほうがずっと大きく、ただ単にベルテナードのスラムといつといつからを差す。

「スラムって言うからあたし、ついシティ外の方だと……」
ちなみにこのシティ外のスラムは町の西南、線路の両脇にずっと
広がっている。ローティオ国内の困窮者や、征服された近隣諸国
からの難民。そういう人が線路際に住みついて、出来たものだ。

「ごめんよ、ねえちゃん。でもさ、そっぽいぼくの言つのもヤバいか
なって」

「あ、そうだね……」

確かにこの名前を聞いたら、大抵の人は眉をひそめるだろう。
「つたく、まさかそつちの出だとはな。どうりであいつらも肝が据
わってるわけだぜ」

イマドの言つ「あいつら」は、たぶんシーモアとナティエスのこ
とだ。けど確かにあの2人、ちょっと考えられないほど非常時に落
ちついている。たまたま戦場で育つて慣れてしまつたあたしはとも
かく、普通じやあんな風になれないはずだ。
逆に言えばそれだけ……凄いところなんだろ。

「ほらねえちゃん、急いで乗らないと」

「あ、ごめんね」

ワインにうながされて、慌てて来たバスに乗つた。
朝のラッシュはもう終わつているらしく、意外に空いている。

それにしても。

大きな街だつた。

学院のあるケンティクはもちろん、イグニールさえも遙かに上回

るだらう。

大きな公園がいくつもあるし、きちんと街路樹も植えられて、この冬の最中に綺麗な緑色を保っていた。

歩道も全域で完備、しかもなめらかな石畳だ。とつぜん車道はどこも舗装されている。

そういうえば以前来た時も、夜になつても街中が明るいままだつた。ただこの国ではなぜか、その街並みが住んでいる人の豊かさにながつていない。

そうやってぼんやりと眺めているうちに、あたしは氣付いた。

「ねえ、ウイン。近いうちに何があるの？」

新年が近いからというだけでなく、町全体がどこかお祭りムードだ。

「何つて……あの大統領の記念日だよ」

「記念日……？」

必死に記憶を探る。

なにしろ小さい頃からあちこちの国を渡り歩いていたから、各国の記念日が頭の中で「じちや」「じちや」だ。

けど終戦記念はもつと後だし、建国記念はこの間のアフガンだし

……。

「んとさ、オイラもよく知らないけどさ、あの大統領が大統領になつた日だつて」

「あ、就任記念日」

よつやく思い出す。

革命後、一気に軍事大国化したこの国は、それに少し遅れて軍部出身の今の大統領が就任した。

そしてそのあとは、専制政治を引いている。なにしろ「終身」大統領といつのだから、完全に専制君主だ。

「就任記念なあ？」

「けどよ、あの大統領が死んだ日の方がよっぽどだ」

「イマドリ！」

思わず遮る。

「あ、悪い！」

このシティ内で、こんなことを口に出して憲兵にでも聞かれたら、生きて帰れる保証をえない。

「こにはそういう国だ。

でも上手い具合に、誰も聞いてなかつたようだつた。

「あ、ねえちゃんたち、次だかんね？」

「うん」

ワインがそう言ったのを幸い、3人で急いでバスを降りる。

「ねえ、ほんとここがそうなの？」
降りたところで、あたしはワインに尋ねた。
なにしろ予想と違つて、そこはちよつと「み」みはしているけど、
どうみてもふつつの繁華街だ。

「あ、ここは大通りに近いからさ、けつこう賑わつてんだ。
オイラたちがいるのは、この奥つてやつ」
言つてこの子が歩き出した。あたしとイメージも後ろへ続く。
そしてそのまま裏通りに入り、細い道をいくつも曲がると、だん
だん街並みが変わってきた。

これが……。

想像以上の場所だった。
お世辞にも綺麗とは言ひがたい町並み。住めるのかと心配になる
ような建物。
先日行つたアヴァンの貴族社会とは全く正反対なことを、肌で思
い知る。

周囲の視線も突き刺さるよつて、万が一目が合つても、みんな視
線を逸らしてしまつ。
明らかにあたしたちは よそ者なのだ。
ただ居心地の悪さは感じたものの、それ以上はなにもなかつた。
ワインが一緒にいてくれたおかげだらう。

「ねえ、どこまで行くの？」

「「めん、ねえちゃん。ちょっと歩くんだ」

なんでもシーモアたちが居着いている場所は、このスラムの中の方にある廃ビルなのだといつ。

ワインは今までどうつてかわって、元気そのものだつた。やつぱりこの子には、ここが故郷なんだつ。

あたしが知らないその言葉に、少しだけ羨ましくなる。

あたしに故郷はない。

各地にシユマ一家が所有している「ファクトリー」と呼ばれる施設には、確かに浴室もあるけれど、普段使うことはなかつた。それ以外に覚えているのは、殺戮の渦巻く戦場だけだ。あるいはそれを、故郷と呼ぶべきなんだつか……。何も無い自分に悲しくなる。

「 気にすんなよ」

「え?」

「無なけりや作ればいいだる」

そう言つてイマドが笑つた。

「ありがと」

「いいつて」

「 ねえちゃんたち、何やつてんのさ?」

見ればワインが、きょとんとした顔をしている。

「なんかいきなり、意味不明の会話してさ~」

「えつと……」

訊かれて説明に困る。

あたしは母さんや姉さんがそつだつたから慣れてしまつてゐるけれど、知らない人から見ればイマドの言動は、明らかに奇妙だつ。

「気が向いたら教えてやるよ」

それ以上は取り合わない、そんな雰囲氣でイマドが話を打ち切った。

「……？ んじゃさ、あとで教えてくれるって約束してくれる？」

「気が向いたらな」

「なんだよ、それ……」

あ、ねえちゃんたち、あそこー！」

とつぜんこの子が駆け出した。あたしたちも慌てて追いかける。ワインが飛びこんだ廃ビルは、だけどよく手入れされていた。人が住んでいる気配がある。それもけっこう大勢。

「ねえ、ここ確か廃ビルなのよね？」

「うん。でもさ、ちゃんと管理人がいて電気も通ってるぜ？」

「どうこういとー？」

よく話を聞いてみると確かにここは廃ビルなものまだしつかりしているため、勝手に「管理人」と称する人が住みついた拳句、格安で部屋を貸し出していると言つ話だった。

「ここらじやけつ」ういの方なんだぜ？ 管理人に言えばさ、水道とかも直してもらえるし」

この過酷なはずのスラムで、でも住人は逞しく暮らしているようだ。

さすがに昇降台は動かなくて、階段を使つて3階まで上がる。奥のほうから何か、声が聞こえてきた。

「だからちょっとだけ、ほんとちょっとでいいんだ」「るせえ、てめえみてえなやつに、話すことなんてねえよ！」いちばん奥で男の人が2人、言い争つている。

「ワイン、あれは……？」

「あ、ほつといていって。ここんとこいつもだからさ」「いつも？」

なんでもこの男の人はジャーナリストで、このところ取材を依頼しに日参ているのだと言つ。

「メーワクなんだよな。

ケインにいちゃん、取りこみ中悪いんだけどさ、ちよいいい？」

「え？ 今忙し つて、ワインか？ どうやつて帰つてきたんだ？」

ケインと呼ばれた、ジャーナリストを追い返そうとしていた男の人が驚く。

「「」のねえちゃんたちが、連れてきてくれたんだ。すっげえ強いんだぜ」「だからって……。まあいい、ともかく入れ。君たちもとりあえず、入るといい。

「と、あんたはダメだ！」

一緒に入ろうとしたジャーナリストの人気が、引きとめられる。それを気にしながらも奥へ行くと、部屋の中に見慣れた姿があった。

「シーモア、ナティエス！」

「ルーフェイア？」

思わず呼ぶと、不思議そうに二人が振り向く。

「あんた、なんだってここに……？ そうか、ワインのやつか」
彼女があたしたちを一瞥した。

鋭い瞳。

「シーモア？」

「あのね、ルーフェイア。ここへ来てもうつても困るの」

睨まれてすくんでいるあたしに、そうナティエスが説明する。

「でも、だつて……」

言葉に詰まつた。

このままじゃ大変なことになるのは分かっているのに、止められそうにない。

「あんたのことだ。話し聞いてすつとんで来たんだろうね。ただね、これはあたしらでカタつける話だ。部外者の出ぬ幕じゃないんだ。

悪いけど帰つとくれ
にべもない返事。

「けど……」

けど放つておいたら、シーモアたちが死んでしまうかもしない。
それなのに……。

「けど、もしも、もしも……シーモアたちが……」
もう誰にも死んでほしくなかつた。

戦場で次々と死んでいった人たちの顔が浮かぶ。
さつきまで一緒に笑っていたのに、次に会つた時はもう冷たくな
ついて……。

それにあたしは、ムアカ先生と約束したのだ。
必ず連れ帰ると。

何もできない自分が悔しくて、涙がこぼれる。

「 わかった。帰るわけにはいかないけど、そのワケ話すよ。
ともかくそれで勘弁してもらえないか?」
「 理由……?」

真剣なシーモアの口調に、あたしは驚いて顔を上げた。

Seamore

つたく、まいったね。

正直それが、いちばんの感想だ。

まさかチビどもとすれ違った拳句に、この騒ぎをルーフェイアに知られちまうなんて。

ルーフェイアは優しい。そのうえ人のこととなると、自分のことなんざお構いなしに助けに入る性格だ。
だから何も言わずにいたつてのに、偶然チビどもを保護したのがこいつだったもんだから、いろいろ知られちまつた。

で、この騒ぎだ。

なんせ海越えて大陸を半分横断して、追いかけてくるつてんだからハンパじやない。お人好しにもホドがある。

「けど、もしも、もしも……シーモアたちが……」

ここまで来た上、そう言って目の前でぽろぽろ涙こぼして泣いてちゃあ、さすがに冷たくできなかつた。

成り行きとはいえ、2人をアジトに入れたケインに、文句言いたいところだ。

「わかつた。帰るわけにはいかないけど、そのワケ話すよ。

ともかくそれで勘弁してもらえないか?」

ついそんな言葉が口をついたまう。ホントは部外者にこうこうと言つのはご法度だけど、まあ理由が理由だから、リーダーのガルシイも許してくれるだろつ。

「理由……？」

びっくりしたのか、ルーフェイアのやつが顔を上げた。

「ああ。

ただ約束してくれないか？ これ聞いたあとは、あたしらに干渉しないってね」

「……」

あ～、そんな顔するなつて！

困り果てた上目使いされいや、自分がエラく悪いことしてる気分になっちゃう。

けど幸いこの子が尋ねた先は別で、一緒に来たイマドの方を振り向いた。

ルーフェイアの視線を受けた彼氏が額くのを見て、マジでほつとする。大人しい性格のルーフェイアは、イマドの言つこと逆らつたりしない。

「O・K・分かったみたいだし、話すよ。

ま、そつは言つてもざつとだけじゃ。そもそも言つこと自体、撻破りだしね

そう言つてあたしは話しだした。

このシティ内のスラムは、なにせ治安が悪いので有名だ。だから当然、国だかが勝手に決めた法律なんざ、守られちゃいない。

ただ、完全な無法地帯つてわけじゃなかつた。なんにも知らない外の連中はそんなこと言つてるけど、スラムにはスラムのキマリつてのがある。

例えば上下関係なんかは、外の連中が思う以上にしつかりしてる。まずクリアゾンつて呼ばれる大人の一団があつて、その下にあた

しらみたいな未成年の集団、さらに下にチビガキの集団。かなりの数のグループがあるけど、専門にしてるコトなんかで、ぜんぶ細かく立ち位置やナワバリが決まつてた。

他にもいろいろ、細かい「暗黙の了解」つてやつもある。

あたしらのところは本職は殺しだけど、依頼が来ないかぎりは手出さないし、関係ないやつは絶対に巻き込まない。かつぱらいやつてるようなグループならともかく、ある程度以上はみんな、一定の不文律を守つてゐる。

逆に言えば「うだからこそ、あたしらも追い出されたりチクられたりせずに、ここに腰を据えてられるつてワケだ。

とは言え、普通じや信じらんないような話も、ここにや多いけど。

「で、今回の話の中でも、いつまでも見過ぎせない類なのが、「見過ぎ」やない……？」

スマッシュの事情には疎いルーフュニアが、不思議そうな顔になった。この子にやこんな場所で何が起つたかなんて、想像もつかないんだわい。

それは「ことかもしれない、そう思しながら説明する。

「チームのガキが殺られたんだよ。シマ争いの腹いせにね」「そんな……！」
「事実だ」

もつとも「こつこつ話自体は、やつ珍しこじやない。競合の少年たちが滅多にナワバリ争いしないけど、数が多い盗み専門のチームなんかは、よく他とぶつかって血みどろの騒ぎをやらかしてゐる。

「で、仕返しつづケか」

なんの感情もない静かな声で、イマドのヤツが確認してきた。

「そうなるかな。まあどうにかしたって、これを放つておへわけにはいかないしね」「ね

「でも、何も……」

抗争までやらなくていい、ルーフュニアのヤツはやつてたいんだわい。滅多やたらに強いくせに、この子は争いとは大っ嫌いだ。ナビゲーションに分け、こじりや通りない。

「自分でオトシマハつたらんこよしなやしが、こじりや暮らして

けないんだよ」「

どれだけきつちつカタをつけられるか。それがこのスラムでの価値だ。

ルーフェイアは黙つたままだった。多少どうしていいか、わからなくなつてゐるんだろう。

「さて、約束だよ。理由話したんだから帰つてもいい」「

いつもいつとまたこの子、泣き出しそうになつた。

「そんな顔しなさんなつて。

全部片付いたら、ちゃんと帰るわ」

「そうそう。だいいちあたしたち、学院生なのよ？

ちょっとやそつとじやケガもしないもん。だから安心して待つてね」

ナティのやつが上手く言葉を添える。

「シーモア、ナティエス……」「

ルーフェイアの瞳から、また涙がこぼれた。

「おい、とりあえず行くぞ」

泣いてるこの子を、意外にもイマドがつながす。

「でも……」「

「しゃあねえだろ、約束なんだし」「

ルーフェイアはイマドには逆らわないから、しぶしぶながらも従つた。

ドアを開けて2人を送り出す。

「悪いねイマド、この子頼むよ。

それとワイン、この2人をちゃんと外まで送つてやんな

「おつかけー

ドアのところで、ルーフェイアが立ち止った。半泣きの顔で訴えてくる。

けど今度も、イマドがその背を押した。

「ほら、行くぞ。

じゃあな、シーモア」

ワインに続いて、あつさりと2人も出て行く。

つて、やけに素直じやん。

見かけによらず食わせもののイマドが、すんなり帰ったのが気にはなったけど、その時はあたしはそれ以上考えなかつた。

Imad

背後で、アジトのドアが閉まる。けどそんなのはお構いなしに、中の様子が手に取るみたいに分かつた。

便利だな、これ。

一気に視界が広がった感じだ。

俺がいろいろ読めるのがルーフェイアにバレたあと、あいつはこの力について、知ってる事を話してくれた。

なんでもシユマージャ、この手の力をかなり上手く使ってるらしい。訓練して通話石の代わりにしたり、ふだんの情報収集に使つたりしてるっていう。

まあよく考えてみりや、通話石自体がこの手の能力を真似たって言つから、ちゃんとやれば出来て当たり前だ。

あとほかにも日常的に、視力だの聴力だのと同じ感覚で、みんなふつうに利用してるんだとか。

トラブルの元につきやならない、氣ばつか疲れるだけの能力だと思つてたけど、使いようつてことだらう。

で、ルーフェイアの説明 当人使えねえから的を射てなかつたけど もとに、試行錯誤の最中だつた。

そして真つ先に出来るようになったのが、前からなんとなく出来てた、「読み」だ。

ただ、思つてたほどのモンじゃなかつた。下手にやると、周り人ぜんぶの考え方事が聞こえちまつて、頭がガンガンする。雑踏なんか完全にお手上げだ。

その上細かいことまでは分かんなかったり、低リターン高リスクときたる。

それでもさつきはガマンして、アジトの連中から、最低限の情報は拾い出せた。

「イマド……だいじょうぶ？ なんか、辛そつ」

まだにじむ涙拭きながら、ルーフェイアのヤツが言つ。

「裏技で聞いてたら酔つた」

「あ、それで……」

これだけで通じるから、ルーフェイアがこいつのが分かるヤツだったのは、本気で助かる。

「ねえちゃんたち、『めんよ。無駄足になっちゃつたら』

「いや、それでもねえよ」

すまながるワインに、俺は答えた。

なにせ相手のチームの名前も祭りの日も、かつては覚えてる。それを知ってるだけでも相当違うはずだ。

「けどや、これからどうすんの？」

「そだな、パターンどおりなら、ルーフェイアの迎えと合流して、別の手を考えるつてどこか？」

「でも、その前に、イマド休んだほうが……」

横から口挟むルーフェイアのヤツに、大丈夫だと手を振る。

「合流してから休んだって、同じだ」

どっちしても地理やら情勢やらに明るくない俺らじゅ、ヘタに動けねえし。

「ルーフェイア、どうやつたら迎えのヤツと連絡できるん？」

「えつと……でも多分、駅で誰か待つてると思つ」

「ずっと誰か待ってるなんぞ、さすがお嬢様だ。」

「そか。そんなら考えなくて済むな」

俺がそう言う横で、ルーフェイアのヤツがため息をついた。シーモアたちを連れ帰れなかつたことが、やっぱショックだつたんだろう。

「これであつたらになんかあつたら、マジでヤベえな。
ともかくこいつは優しすぎや。

イザとなつたら力ずくでも、抗争をどうにかするしかねえだろ。
ルーフェイアの望みつてなら、シユマーレの連中も動くはずだ。
そんなこと考えながら、少し歩いた時だつた。

「君たち……」

「はい?」

後ろから声をかけられる。

振り向くと、さつき追い返されてたジャーナリストの人があつた。

「なんか用ですか？」

「君たち、あそこの子たちと知り合いなのかい？」
俺たちは顔を見合わせた。

「そりやオイラ、あそこには住んでるナゾを」
「あたしたちも確かに、友達ですけど……」
「でも、さつちり追い返されましたからね」

ウインとルーフェイアの、言葉の後を引き継ぐ。ソレでこんなやつに、関わり合いになるのはゴメンだ。
けじめんぢへせこと、向こうはさう思つてくれなかつたらし
い。

「俺はこいつのなんだがね

俺らにむけて名刺を差出す。

表には「フリージャーナリスト、ゼロール＝アレイ」と書いて
あつた。

「すまないが、話をさせてくれないか？」

「だから俺らは……え？」

今この人、話を「聞かせて」じゃなくて「させて」って言つたよ
な？

とつさにこの人を真つ直ぐ見る。

焦りが伝わってきた

なんかあるな。

原因は……例の祭りだ。

「どんな話なんですか？」

「ここにじやまざいな。

スラムの外れに俺の知り合いで店があるから、そこまでこいかい
？」

「わかりました」

一瞬、どつかヤバい場所かと思ったけど、この人が行こうとしている
のは割合まともな店だ。

場所がわからんねえけど

しょうがないから俺ら3人、ぞろぞろ後ろをくつついでく。
ただ結局その店へは、たどりつかなかつた。

「やめとくれ、その子は関係ないだろっ！」

「黙れよ、このアマ。そつ言つんだつたら出す出すもん出せつてんだ
言つて争つ声が聞こえる。

気配を探ると、すぐ先の路地で2人の女性
数人の若いヤツに囲まれてるのがわかつた。
まあケンディクじやともかく、このスラムだつたらよくある風景
だろう。

つておー！

ほんの一瞬の間に、ルーフェイアが飛び出した。
真っ直ぐ声がした路地のほうへと駆け抜けて行く。

「ルーフェイア、待てっ！」

とはいへ、あいつが待つわきやねえけど。

それにしても、ルーフェイアのやつは足が速い。

すぐに追いかけたものの一瞬の差がものを言つて、引き離されないようになるのが精一杯だ。

ほんの僅かに遅れて俺が路地へ飛び込んだときには、ルーフェイアは野次馬を潜り抜けて、男たちに向かつて行つてやがつた。

「何をしてるの！」

いいざま柄での鋭い突きを、若い女の人の腕を掴んでた、男の手首に食らわす。

痛めつけられて、思わず男が手を離した。

「下がつて！」

母娘を背後にかばうようにして、ルーフェイアが間に立ちはだかる。

「「」のやつは、ガキのクセして……」

けどあいつが怯む様子は当然なかつた。

なんせルーフェイアときたら、戦場育ちだ。この程度の「ゴロシキなんかじゃ、腕慣らしにもならないだろ」。

「お嬢ちゃん、そんな物騒なもん振りまわしたら、ケガするぜ」

「

ルーフェイアのやつが、無言で「ゴロシキを睨みつけた。

「」いつ、守るものがあると性格が一変する。自分のことだとただ泣くだけなのに、他人のこととなると挺子でも動かなくなるからたいしたもんだ。

ま、そこがいいんだけど。

とりあえず俺もただ見てるわけにゃいかねえから、野次馬をかき分けてルーフェイアの隣に並ぶ。
つて待てよ、「」の母娘……。

なんとなく読み取つてたなかから、どびつきりの情報を俺は拾い出した。

この2人、例の祭りとやらの話を知つてゐる。どうも知り合いが関係者らしい。

人が困つてると見境なく助けに行くルーフェイアの性格が、功を奏したつてやつだ。

「ほつ、お嬢ちゃんだけかと思つたら、いちおつ彼氏づれかい。こりやしたいしたもんだな」

「ゴロツキ連中が汚い笑いを浮かべたけど、幸いルーフェイアヤツは、意味が分かつてない。

ともかく一步も引こうとしない」じつに、連中のひとりが進み出した。

「さあ、ケガしたくなかったらそいどきな」

俺らはまた無言だ。つてえか、こんなやつらとは口もあきたくない。

「ガキのくせにずいぶん生意氣だな」

黙つてゐるのが気に入らなかつたんだろう、ナイフをちらつかせた。

「そういうのは、少し『教育』してやらねえとな」

「ざけんな」

隙だらけでナイフを振りかぶつたゴロツキに、俺は容赦なく下段から切りつけた。

がら空きだつた脚を大きく切り裂かれて、男が転倒する。

「じつ、このヤロウ……！」

いきりたつたゴロツキ連中が、一斉に武器を構えた。

周囲の野次馬が、蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。

ルーフェイアが太刀を抜いた。

俺ももう一度剣を構える。

けど、それ以上の乱闘にはならなかつた。

「おめえら、ちょっと待て」

緊迫しているところへ、のんびりした声がかかる。どうからともなく、また男がひとり出てきた。

あ、こいつは少しマシか？

昔軍隊でも鍛えられたのか、そこそこ力強いやつだ。
別段構えもせずにこっちへ来る。

「とりあえずお嬢ちゃんたち、この街の話も聞いてくれや
妙に馴れ馴れしい。
しかも様子見で俺らが黙つてると、お構いなしに喋り出しゃがつ
た。

「お嬢ちゃんたちそこらかばつてるけど、なんでこいつなつたか教
えてやつから。

「その親子な、金払つてねえんだ」

「お金？」

金に困つた経験なんぞないルーフェイアが、不思議そつて返す。

「そ。なにせそこいつら、借金しててね。
いつもだつて商売だから、モーゆーヤシには別の形で払つてもら
うしかないワケ」

「だからつて、乱暴しなくとも…」

「それは謝る。ケガの分は治療費も出すぞ。

けどキマリはキマリ、借りたものは返さなくちやな。それがダメ
なら差し押さえってのは、ちゃんと法律で決まつてるんだ」

「いいつ、慣れてるな。

こう言われたら手の出しようがないの、ちゃんと知つてやがる。
力任せに押すだけの手下連中とは、さすがに器が違つた。

「そういうわけだからお嬢ちゃんたち、帰つてもうらえるかい?
さすがにどうしたもんか考えあぐねる。

けどそれより早く、ルーフェイアのヤツが口を開いた。

「…いくらなの」

「は?」

突拍子もない台詞に、一瞬場に居合わせた人間　俺も　が全
員黙る。

「だから、払えばいいんでしょう?　いくらなの?」

「おいおい、冗談キツいぜ。お嬢ちゃんの小遣いで払えるよつな額
じゃないんだ」

まあ普通そう思つだろ?」

ただ相手が違う。

「 いくらか訊いてるの」

「 んじゃ参考までに教えるけど、7千ルルシにもなるだ？」

そりやまた溜めたな。

それだけの額があつたら普通の家族なら、2ヶ月以上暮らせるだ
るわ。

もつともこいつの場合、その程度じゃびくともしない。

「 じゃあ、これで足りるでしょ？」

いつもつけてるウエストポーチから無造作に取り出したのは、磨
き上げられた紅玉だつた。それも親指くらいの大きさの、どうみた
つてかなりの値打ちモンだ。

取りたて屋があんぐり口を開ける。

「 足りるの、足りないの」

「 あのなルーフェイア、足りるど」
「 じゃねえつて。これならお釣り
が来るぞ」

分かつてないこいつに、思わず俺は説明した。

「 そりなの？」

「 多分な」

やつぱり分かつてねえの。

けどこいつは分かつてないなりに分かつた？ うじくて、男のほう
に向き直つた。

「 これで清算してあげて。残りはそっちで……」

「 釣りはもらえよ」

また思わず突っ込んだ。

どうもこいつ、一般常識がない。というか、そもそも他人の借金

を抱おうつて時点で、かなり常識外れだらう。

けどなあ。

こいつの場合、それ言つてもまあムダだらうし。だいいちルーフエイアときたら、こいつになると頑として言つこと聞きやしない。

振り向くと予想外の展開に、当の親子が困惑しきつてた。

「あんたたち……？」

「すいません。あいつ、そういうヤツなんで」

とりあえず、親子にそう説明する。

いいか悪いかは別として、これはルーフエイアにとっちゃ、『ぐれあたりまえの範疇に入る話だ。

なにせ人が困つてゐのを見たが最後、息するのと同じ調子で助けに入るんだから、凄いとしか言いようがない。

「お嬢ちゃん、正氣か？」
取り立て屋の男も呆れかえつてゐる。
けどルーフェイアの方は真剣だ。

「正氣よ。さあ、どうなの」

あの調子だと「ダメだ」なんて言つもんなら、即座に切りかか
りそうだ。

しばしの間。

「ふう、やつと追い付いた

「あ、ゼロールさん」

「妙なところで出でこないでくださいよ」
ジヤーナリストのゼロールさんが、せえせえ言いながら今じり現
れた。

「やつは言つてもみんなめりやくひや足速くな……運動不足いや
キツいよ」
「あの、大丈夫ですか？」
「年だとか」
ルーフェイアのやつは単純に心配してるけど、俺はそこまで素直
じゃない。だいいちまだオヤジつてわけでもないのにこれじゃ、は
つきり言つて情けないつてやつだ。

「ガキのくせに生意気だな」
「オヤジになると、みんなそつと言つますよ」
「君なあ……」
俺に切り返されて、この人が困つて頭を搔ぐ。

「イマド、そんなこと言つたら……」

と、別のほうからも声がかかった。

「お~い、もしも~し?」

「へ?

あ、すみません

そういうや借錢取りと、やりあつてゐる最中だつたな。
見れば連中、会話から取り残されて困りきつた顔をしてゐる。

「えーと、なんの話でしたつけ

「立てかえる話だつたかな?」

「あ、それそれ

ようやく話が元へ戻つた。

「なんの話なんだ?」

そこへまたゼロールさんが口を挟む。

「あとで説明します。話がこじれるから、黙つてもうりえませんか

?」

つて言つが、もう十分こじれてる氣はするんだよな……。
でもとりあえず、この人が黙つてくれた。

「ともかく、この紅玉でどうにかしてもうりますよね?」

借錢取りに確認する。

「ああ。じつちだつてまあ、とりあえずお金が入りやいいわけだし
な。

おい、おめえら、戻るぞ」

取り立て屋が引き上げて、周囲の空氣が緩んだ。

「やれやれ、これで一段落だな」

「みんな、『めんね。寄り道しちゃつて……』」

「……そつ来るか」

ある程度ズレた台詞が来るのは予想はしてたけど、まさか「寄り道」って言つとは思わなかつた。

「ねえちやん、マジ金持ち?」

この間にもやらればへ来たワインが、呆然とつぶやく。

「いわゆる金持ちは、ちょっと違つけどな」

「ちょっともなにも、金持ちは種類なんであるのかい?」

ワケわかんないツシ「ミ」を、ゼロールさんがする。

「もう、そんなのどうだつていいでしょ……」
ルーフェイアの方は、心底嫌そうな調子だ。なにせこいつ、自分の家をけつして好いちゃいない。
ともかくその辺は終わりにして、例の母娘の方へ向き直つとし
た時だ。

「ちょっと、あんたたち！」

やつぱこいつ来たか。

俺としてはうまいこと丸く収めて、この母娘が持つてゐる「どびつ
きりの情報」をどうにかしたかつたつてのに、そうは問屋がおろさ
なかつた。

「なんだい、何さまのつもりだい！　あたしら確かに貧しいけどね、
物乞いじやないんだ！」

ルーフェイアのヤツがはつとした顔になる。

「まあまあまあ。とりあえずケガもなかつたんだからいいじや
ないか」

事態が分かつてゐるんだか分かつてないんだか、ゼロールさんがな
だめた。

ただ、ムダだと思うんだよなあ……。

「部外者は黙つといで！」

案の定一喝されて、この人が黙つた。

大人のくせにしうがねえな。

世の中頼りになるやつなんざ、案外いないもんだ。
で、そのままおばちゃんの独壇場になる。

「金持ちがここへ何しに来たかは知らないけどね、あたしらに恵んで、いい気になってるんじゃないよー。」

「「」、「」めんなさいー！」

一方的に言いたてられて、ルーフュニアがまた謝った。

「なに謝つてんのせー！ だいいち謝るつてことはやっぱあたしらダシにして、自分に酔つてただけって証拠だる」

「「」めんなさいー……」

ルーフュニアがうつむいて、せりに謝る。
いやあねえな。

場を収めようと俺が口を開きかけた時だ。

「おばちゃん、みつともねえぞー！」

意外にもワインのやつが、この中年っ女性に噛み付いた。

「みつともない」とはなんだいワイン、あたしゃ間違ったことなんか言つてないよー！」

「つやつけっー！」

どうも知り合っちらしこの2人、親子もかくやつて勢いでケンカを始めやがる。

「ウソとはなんだい、ビートがウソだつてのせー！」

「全部そつだりー！」

なんだよ、自分の借金払つてもうひとつお礼も言わねえし、だいいちねえちゃんたちが来なかつたら、ビートなつたと思つてんだよー！」

「それは……」

へえ。

ワインのヤツ、けつじついつな。

「あの醜いだもん、どうせ借金のカタに、そのオリアねえちゃん取られるところだつたんだろ。

なのになんだよ、お礼のひとつも言つたらどうだよー。」

「だからって金持ちの道楽なんぞ！」

「道楽なんかじやないやつ！

このねえちゃんたち、友達心配でわざわざケンディクからこまで来たんだかんな！ それにオイラまで助けてくれたんだ！」

「こいつがまくし立てた。

「ワイン、もつ……いいの。あたしが、悪いんだから……」

「ねえちゃん、ちつとも悪かないだろー。」

「でも……」

ルーフェイアはルーフェイアで、ひたすら自分が悪いと思つてゐる。

ともかくこのままじや、收拾がつかねえだろ。

「すいません、気に障つたんなら謝ります。
ただここつ、別にそういうつもりじゃないんですよ。性格なんです」

「性格？」

俺の言葉にて、おばちやんは訝しそうな視線だ。

「人が困つてると見ると命懸けだらうがなんだらうが、後先考えずに飛びこんじやうんですよ、こいつ」

「ホントだぜ！ オイラがケンディクの駅で撃たれそうになつた時も、ねえちゃんたちが身体張つて助けてくれたんだ。

あ、おばちやん嘘つてんな！」

「いや、あなたの言つこと疑つたりはしないけど……」
「……」

「……」

「だいいち今だつて、ねえちゃん命懸けで助けてくれたじゃないか

！」

「そりゃ、まあ……」

おばちやんがだいぶ、トーンダウンしていく。

もつとも命懸けとは思えねえけど。

けど……それ言って場をぶち壊すほど、俺も馬鹿じゃない。

「とりあえず、許してやつてもうえませんか？」

どうやらおばちやんが落ちついたらしいのを見て、やつ切り出す。

しかもいいタイミングで、ルーフロイアのやつが予想通りのこと

を言った。

「イヤだ、ここ。あたしが……悪かったんだもの」
せつぜつこいつの瞳から涙がこぼれる。

ただそれでも氣丈に？向き直つて、謝るのだけは忘れなかつた。

「出過したことをして……もつわけありますでした……」

「いや、その、わかりやいこのわ」

泣きながらのルーフュニアの言葉にせ、さすがのおばちゃんもし
じるもじるだ。

「あ、ねえちやん泣かした」
すかねずワインが突っ込む。

「ひめむせこねつー」

おばちゃん、ワインを怒鳴りつけてから、泣いてるこいつの顔を
覗きこんだ。

「こつちもまあ、こきなり怒鳴つたりして悪かつたよ。
ああもう、大きになリしてこつまで泣いてんだいー」

せつぜつまで怒つてたのはじくやら、もともとお話を好きじここの
おばちゃん、完全に涙に引っかかってやがる。

泣いてる美少女は強えな。

ある意味太刀振りまわすよ、攻撃力ありそつだ。

「い、めんなさー……」

「あやまるこないだろ。ほり、じつちおこで。

まつたぐ、これじやつのひのきのチビのせがマジだよ。はー、涙拭い
てー！」

とはいえ泣くことに関しづや、筋金入りのルーフュニアだ。当然
この程度じや泣きやまない。

必死に唇を噛んで泣くまことはしてゐけど、相変わらず涙がこぼ

れでる。

「やれやれ、ほんとに泣き虫だね。呆れたもんだ」
あ、俺知らねえと。

「」れに泣き声が漏れるが、おまけやん分かつてない。

「」めんなやこ、「」めんなやこ……」

案の定ルーフュニアのヤツが、謝りながらもつと泣き出した。
しかもこの騒ぎに、一度散つてた野次馬が戻つてくる。

「なんでも、ジャス。助けてくれたお嬢ちゃん泣かしきつたのか
？」

「べ、別に泣かせよつて……」

「けど泣いてるぜ？」

「うなると分は完全にルーフュニアだ。

なにせいつ、戦闘さえなればひたすら華奢で儂げ、ついでに
泣いてる姿ときたら、かばわなきやいけない気分せしりれる。

まあ、例外もいるけどな。

でも「」には幸い、その「例外」はいないし。

「ひでえなあ。なにも泣かすことないだらう」「元気いだ

「だから違うって言つてんだろー」

「つたく、ほらあんた、ちよつといつちへおこで！」

野次馬たちに騒がれて、やしものおばちゃんもキマリ悪くなつたらしい。

「往来の真ん中で泣かれてちや、あたしが悪いみたいでたまんないじゃないか」

「おばちゃんが悪いんだろ？」

ワイン、ナイス突っ込み。

おばちゃんが一瞬黙る。

「分かつた、分かつたよ。あたしが悪かつた！」

ともかくあんた、そのまま泣いてるわけにいかないだろ。とりあえずうちに来て、落ちついてからお帰り。いいね？」

俺がさして口を差し挟まないついで、狙いどおりの方向へ事態が転がつた。

「さ、おいで」

「あ、はい……」

言わせてまだ泣いてるもの、ルーフェイアのやつが素直にうなずく。

おばちゃんがルーフェイアの腕を掴んで歩き出しつて、オリアと呼ばれた女性 たぶん10代後半 がすぐ後ろからついていった。

「お、おい、話が違うぞ？」
ゼロールさんが慌てる。

まあ俺らをどつかの店へ連れてつて深刻な話するつもりだったわけだから、しょうがないんだろ？けど。

「俺はあいつと一緒にこます。それにこのまつが、早く事態が片付きますから」

「？ どういふことだ？」

「知りたかったら、一緒に来たらどうです？」

俺の言葉に一瞬だけこの人は考えて、ついてきた。いくらか距離のあいたルーフュイアたちを、追いかける。おばちゃんの家とやらはすぐそこだった。半分壊れかけたアパートの、3階のすみつけだ。

気配を察したのか、隣近所のドアが開く。

「あんた、大丈夫だつたのかい？ 外で騒いでたみたいだけじそ」

「ああ、」の子たちがちょいと助けてくれてね

「ほらっ、預かってた子たち返すよ」

ぞろぞろとガキが出てきた。全部おばちゃんの子供らしい。

つて、ずいぶんいるな。

あのオリアつて人もいると、8人兄弟つてことになるだらう。

「狭くて悪いけどね。まあ通りの真ん中よつマジだらうと

「すみません……」

まだ泣きながらルーフュイアのやつが謝る。

「いや……こいのせ」

不意におばちゃんのトーンが、もう一段下がった。
血がドアを開けて中を見てる。

「 そうだね。あんたが助けてくれなきゃ、サイアクこの部屋へ
だつて戻れなかつたんだ」

どうも戻つてきて事態を実感したらしい。
最初つから気がつけつて気もするけど。

「さつきは頭に血が上つてたから、怒鳴りつけたりしたけど……お
嬢ちゃん、ありがと」

「いえ……」

ルーフェイアがやつと顔を上げた。

「悪かったね、泣かせて。
お金のせいでどうかして少しでも返すから、おまないけど待つ
てくれるかい？」

「こえ、あたしそんなつもつじ……」

「悪かったね、泣かせて。
おまないにきつ考
えてなごだりうな。」

「おまけじおひじくさんな」と言われたもんだから、おひじさんなお
せいか、ここに参つてみたみたいだった。

「ほんとここ子だね。ついの子供ひ、爪の垢でも煎じて飲ませ
たいよ」

「あのお子はこんな風だったんだけじねえ……」

「え？」

涙に濡れた顔で不思議そうになつたルーフェイアに、おひじさん
が寂しく笑いかけた。

「ひとり、死んじまつてね。

助かるんだつたらなんとしてもと想つて借金までしたけど、ダメ
だつたのを」

「そんな……」

ルーフェイアの瞳に、また涙が浮かんだ。

「いいんだよ、もつ済んだことね。
それよつそんなに泣いちゃ、せつかくの可愛い顔が台無じだよ。」

向ひつで洗つておいで

とん、と背中を押されて、狭つ苦しい洗面所へあいつの姿が消えた。

「そ、あんたたちも上がりな。なんにもないけど、まあ休めるだろうからね」

「すみません」

俺たちもあがらせてもらひ。

けど、マジで狭い部屋だった。

食堂と兼用のさほど広くない居間がひとつ、他にはガキどもの寝室が一つと仕事場兼大人の寝室、台所、それにサンタリーだけだ。ここに一家9人じや、どうやつたつて狭いだろ。

「適当にそちら座つてていこよ。あたしは仕事しちまうから」

あの騒ぎで遅くなつちまつた。そう言いながらおばちゃんが奥へ移動しかける。

「ああそうだ。オリア、悪いけどチビたちに昼メシ、作ってくれるかい」

「ちよつと母さん、あたしだつて仕事あるんだよ！」

どうも伝わってくるイメージからすると、買出し行つた帰りに、途中と鉢合わせしたらしい。で、予定外に遅くなつて昼メシが押せ押せになつたんだろう。

「よかつたら俺作りますよ」

どつちも嫌がつてゐるの見て、俺はそう言つた。

もちろん下心があつたりする。ここで上手く立ち回れば、思つたより早く、コトの中心部へたどり着けるつてやつだ。

「あんたが？」

おばちゃんが、信じらんなそつな顔になつた。

「あ、おばちゃん、この兄ちゃんすっげえ上手いぜ、メシ作るの。

オイラ食わしてもらつたもん」

「へえ、そいつは楽しみだな」

なんかこのジャーナリストおやじも、ちやつかり食べる氣でいるらしい。

「そりゃ、じゃあ悪いけど頼もうかね？」

なにせ今日納める仕事が、まだ残つててね。とてもじゃないけど時間がなくてや。通りすがりの人間に頼んだりして、申し訳ないけど……」

「別にいいですよ。俺、料理そんな嫌いじゃないです」

人に言えねえ理由 知られたらバカにされる」と請け合いで手に入れた特技だけど、けつこうこれ、あつこうつちで役に立つ。「使っていい材料、どれです？」
いながら俺は、昼メシ作りに取りかかった。

どうやらツキが二つにあるらしいことを、確信しながら。

Diath Side

男性がひとり、真昼のスラムを歩いていた。年齢は30代後半といつた雰囲気で、ごく淡い金髪に薄い灰色の瞳をしている。顔立ちは……かなりの美男子で通るだろう。

当然周囲が振り返って興味を示す。が、当人は知らん顔だ。

「なにや、お高くとまつちまつて…」

誘いこむのに まだ明るいと言うのに 失敗して、悪態をついてみせる女性までいたが、やはり気を惹かれた様子はなかつた。もつとも彼の場合、別段女性に興味がないというわけではない。ただ単に件の女性が、趣味ではなかつたというだけだ。

彼はここに慣れている様子だつた。

「おう、ディアスじゃねえか。ずいぶん久しぶりだな」
たまたまビルから出てきた中年の男性が、気さくな調子で声をかける。

ディアスと呼ばれた彼は、軽く頭を下げる応えた。

「レニーサンどこか？ 帰りはこっち寄つてけや」
それにもうなずいて、また彼は歩を進めた。

同じスラムでもこのあたりはまだ入り口のほうで、わけのわからぬ飲食店やなにかがひしめいている。
と、その一角へ彼の身体が沈んだ。
地下へと続く階段に足を踏み入れたのだ。

降り切つた先の薄暗い廊下を抜けると、小さなバーがあつた。

時間が時間なので開いているわけはないのだが、男性はためらい

もなくドアを開ける。

「ディアス？」

扉が開いた音に振りかえったこの店の女主人が、驚いたような声をあげた。

「いつたいどうこう風の吹き回しよ？ まあいいわ、とりあえずかけたら」

うながされてディアスが、カウンターにかけた。

なにも言わないうちに飲み物が出される。

「で、なに？」

「あなたがわざわざ出向くからには、なにがあるんでしょ」

「金髪の少女の話を聞かなかつたか。太刀を持っている」

初めて彼が声を出した。低く落ちついた声だ。

「太刀持つた金髪の女の子？ それ多分、セジのところの連中と、やりあつてた子じやないかしら」

偶然通りかかつたと、女主人が言つ。

「ともかく凄かつたわよ。割つて入つたと思つたら、あつという間に柄の一撃で、オリアちゃん助け出してね。

たまたまレードが来たから丸く収まつたけど、そうじやなかつたらもうひとりの男の子と一緒に、あの連中叩きのめしてたんじやないかしら？」

「今居場所は？」

愛想の欠片もないような訊き方だったが、この女性が気にした様子はない。

「ジャスおばさんのところへ、上がりこんだみたいね。といつより、あんまり泣くんで連れていかれた、って言うほつが正解かしら？ ともかくそこからは、動いてないみたいよ

そこまで聞くと、ディアスが立ち上がった。

「あんまり、つれないわね。しばらへりこでよ
女性が彼の手を掴んで引き止める。

「そうすれば取つておきの」と、教えるわ

一瞬ディアスが困ったような表情になつた。

「悩む事ないじゃない。あなたにも擅しないもの
時間がない。明日の祭りに用がある」

「あり……」

女性は一瞬驚きの表情を見せたが、すぐにもとの落ちついた様子
に戻る。

「それもそうよね。あなたじゃ

なにか思い当たつたのだが、そもそもありなんと言わんばかりの顔
だ。

「ひとつ聞くが、なぜクリアゾンは動かない？」

「それどこのじやないのよ」

そう言つて彼女が肩をすくめる。

「……」 つて言つてもやうやう3ヶ用になるけど、あつち
こつちのトツ端が、身内やら堅気の連中にクスリばらまこちやつて。
おかげで組織はガタガタよ。だいぶお互いに、殺りあつてもいるし
ね。

とてもじゃないけど、ちびちゃんたちの仲裁してゐる余裕なんか

いわ

いの言葉にディアスが考へこんだ。

「それになにしろ、今回の話は根が深いのよ。

両方のチームが腹いせに相手のとこの子供殺してゐるから、ひょつ

とやそつとじや收まりそつにないの」

言つて女性が、また肩をすくめてため息をつく。

「あの連中がまさかそんな真似するなんて、思わなかつたんだけど。
けどあなたが来たなら、どうにかなるかもね」

ほんとならクリアゾンの仕事だけどね、と呟きながら彼女がもう
ひとつグラスを差し出した。

「これ、イケるわよ」

中身を見たディアスの表情が、微妙に変わる。

「急ぐのは分かるけど……少しほは時間あるでしょ？」

彼女が意味ありげな視線を向け、ディアスが立ち上がった。

Nat-ti-ess

「ねえ、シーモア。ワイン遅くない？」

「きっと、どつか寄り道でもしてんじゃないのかい」

鈍いんだか鋭いんだかわかんないルーフェイアを、あたしが

追い返したあの話。

「うーん、やっぱりそうかな？」

でもワインが拾われたのって、あたしが学院行くじゅうじゅうと
前だから、いまいちよく知らなかつたり。

「きっとわうだと思つね。けだま、ルーフェイアたちが帰つてよ
かつたよ」

「そつかなあ……？」

シーモアはそう言つたが、あたしはなんか腑に落ちなくて。

「だつて、絶対おかしいもの。

見かけはともかく、イマドつて中身は思つくり食えないやつ。
あの好青年ぶりに騙されたら最後、ヒドイめに食つての間違いなし
だもの。

「あいつがあんなにあつさり引き下がるなんて、絶対裏になんかあ
りそつじやない？」

「そう言わると、そんな気もするけどね。

でもあいつだって、ルーフェイアを巻き込みたくないと思つよ
「それもどうかなあ……？」

確かに「イマド」は巻物「よたくな」だらうナビ、なにセルーフヨイアだもん。

あれで案外あの子、強情だつたりするし。なんかいろいろ、ワケわかんない関係者いるらしいし。

あの子のこと、あたしたちいまでも、あんまりよく知らない。でもアヴァンへ任務で行つた時も、山ほどドレス用意したり、ともかく半端じゃないのよね。

「まあどうだつてこさ。」「やめるわけにはいかないんだ」「やうだね」

伝言には詳しい」とは書いてなかつたんだけど、来てみてわかつたの。

あたしたちも知つてるチームの小さい子、殺されちゃつてた。

許せないな！

殺つたのがどこかはわかつてた。

「」とテリトリーが重なるチーム。

それで今度祭り よつは戦争のことなんだけど

するのに手

不足で、あたしたちまで呼ばれたのよね。

「けどわあ、久しぶりだよね~」

「ああ。ちょっとワクワクするかな?」

学院つてば傭兵学校だけど、けつこう大人しいの。

そりやもちろん普段の実地訓練なんかは厳しいけど、こんな風に血みどろになつたりはしないもん。

「明日でいいんでしょう?」

「明日のちょうどお昼だね」

見ると部屋の中、みんな思い思いに武器の手入れとかしてゐる。昔とかわんない光景に、ちょっとほつとしたりして、やうしてあたし、思いついたの。

「ねえ、シーモア、街へ出よ」

「街へ？」

「うん。せつかくだもん、ちよつとお金稼いでや、今晩くらにみんなでぱあつとやらなー？」

あたしがそつぱつと、シーモアも乗つてきて。

「いいね、それ。んじゃ行こつか……つてあんた、腕なまつてんじやないかい？」

「なにせ学院行つてからは、掏る機会もなかつたろ？」

「だいじょうぶ、ちやんと訓練はしてたの。それに今つて記念日前でしょ？ みんな氣が緩んでるし。

あと内緒だけね 時々やつてた

学院に知れたらおおいとだけど。
でもちやんと、全部返してやる。

「よし、あんたがそつぱつならだいじょうぶだらうしね。久しづりにやるか」

「うん。

そつぱつ、ついでにルーフェイアたちがどつしたか、探つて」
うよ。それと連中のこともいっしょに
「やつだね」

これで話しばキマリ。

リーダーのガルシイに断つてあたしたち、久しづりに街へと出だした。

Ruffer

向こうの部屋から、縫製機の音が聞こえる。
なんでもここのおばさんとお姉さんが2人がかりで服を縫つて、
そのお金で家族みんなが暮らしているんだそうだ。

けど多分……それでも乐じやないんだろう。狭い家と质素な室内
を見れば、おおむねのことはわかる。

ただおばさんは、とてもいい人だった。

あたしがあれほどのことを見たつていうのに、親切に家へあげて
くれて、昼食まで駆走してくれたのだから。

でも昼食そのものは、いつのまにかイマドが作ったらしい。
イマドって、じうじてこいつがいいんだろう。

彼は誰とも上手にやれる。

今もむかへ、おまわりやこじの姉さんの信赖を勝ち取つてしまつ
たようだった。

「ホント、すまないね、洗い物までしてもらつちまつて。

けどなんだつてあんただけ、ここへ来たんだい？」

一段落してその辺に座つてこらイマドに、ジャスおばさんと尋ね
る。

ちらりとこりを見た彼に、あたしはうなずいた。こりこう込み
入った話は、イマドのまづがまづと上手こ。

「れつかもワインがちゅつと壺つてしまつたけど、友達追つかけてき
たんですよ」

「俺は取材中に、この子たちと一緒になつたもんですから」

イマドに次いで答えたゼロールさんの言葉に、おばさんの顔が険しくなった。

「取材ならお断りだよ」

「いや、俺が用事なのは、この子たちですから。用が済んだら帰りますよ」

— そうかい、それならいいけどね……

おばさんが納得（？）する。

ゼロールさんがなにも聞こうとしなかつたから、信用したのかも
しない。

「ともかくあんた、ヘンなマネはするんじゃないよ。で、お嬢ちゃんたち、友達ってのは誰なんだい？」一瞬イメージが黙つた。どう言えばいちばんいいのか、考へているんだろう。

「……こじや有名かもしだせんね。」

だから、さすがに心配で

何か意図があるんだ!!」シーモアたちの名前は出さない

「祭りって…… そうか、そういうことなのかい。 それにしても驚いたね、あいつらに絡もつなんて」
「ほんと、それ命知らずって言ひよ」
お姉さんまでがそう言ひ。

「でも、友達だから……」

気が付いた時にはあたし、もうそう言っていた。

危険なのは、さすがのあたしでも分かる。けどだからこそ、放つてなんかおけなかつた。

「ひえよつと思つたけれどやつぱりダメで、また涙があふれてくる。

「大事な、友達なんです……」

しん、と部屋が静まり返つた。小さな子供たちまでが口をつぐむ。

「世の中、まだあんたみたいな子もいるんだねえ」

おばさんの大きな手が、あたしの頭を撫でた。

「ほり、そんなに泣くんじやないよ。

それとその話だつたらね、あたしも心当たりがある。夜まで待てるかい?」

「え? あ、はい……」

別になにか予定があるわけじやない。

こちおうイマドの方を見たけれど、彼も別に止めない。あたしはうなづいた。

「そうかい。じゃあ夜まで待つてもいいよ。ただ、狭いのはガマン
しどくれ」

「すみません。ありがとうございます」

結局この家に、しばらくなさせてもいいことがあります。

「そうかい、それとあたしはお陰で一通り仕事が片付いたんでね、
ちょっと納めてくるよ。

何かわからなかつたら、オリアにでも訊いとくれ

「あ、はい」

おばさんが箱を抱えて出でていく。

イマドモうつかり居所を占拠していく、居間と廊下とを、
行つたり来たりしていた。どうも特技を生かして、今度は夕食に取
りかかってるらしい。

ウインはワインで、たちまちこの家の子たちと仲良くなつて、一
緒に遊んでいる。

ただあたしのほうは、居場所がなかつた。

イマドのように家事ができるわけでもないし、もうりんおばさん
たちの仕事も手伝えない。

あたしって、ダメだな。

落ちこみながら、丁寧に繕つてあるソファの隅に座りこむ。
けど、この家の人たちを見ているのは楽しかつた。

狭い部屋にひしめく子供たちが、喧嘩をしたり笑い転げたりして
いる。

羨ましかつた。

あたしは一人っ子で、あとは年の離れた従兄姉しかいない。その上戦場で育つてしまつたから、こんな経験はしたことがなかつた。と、隣にゼロールさんが来た。

「あんたの連れ、変わつてるな。またメシ作つてる」「イマド、家事が上手ですから」「なんだそりや？」

なんだつて言われても……。上手く答えられなくて、あたしは黙つてしまつた。会話が続かない。

どうしよう。

なにか話さなければいけない気がして、必死に話題を探す。そして、思い出した。

「ゼロールさん、さつき確か……話があるつて、仰つてませんでし
たか？」

「ん？ あ、あの話か」

あたしに言われて初めて、ゼロールさんは思い出したみたいだつ
た。

「よひしければ、教えてもらえませんか？」

「ああ。さて、どこから話すかな……」

快くゼロールさんが、承諾してくれる。

「明日」の連中が言つ『祭り』つまりは抗争なんだが、それ
があるのは知つてゐるだろつ？」「

「はい」

知らないわけがなかつた。

それがあるからこそ、シーモアたちもあたしたちも、ここへ来たのだから。

「俺はずっと、このスラムを取材してるんだ。なにせ同じシティに住んでながら、スラムの外の人間は、ここをないものとして扱つてるからね」

「そうなんですか……？」

あたしはベルデナードには、時々ホテルを使って滞在した程度だから、そのあたりの事情は全く知らなかつた。

「自分の汚いとこを見せつけられるみたいで、嫌なんだろうな。ともかく俺は、そんなのがまた嫌で、何年もここを取材してるんだ」

そのせいでの、所属していた新聞社を辞めさせられて、今はフリーなんだといつ。

「だからこの抗争の話も、わりと早くから耳にはしてたんだよ。で、すぐに聞き込んだりしてみてね」

そこでゼロールさんは一回言葉を切つた。

「そうしてるうちに、妙な話が聞こえてきたんだ」

「妙な話、ですか……？」

わざわざこいつからには、よほどなんだろうなど、見当がつかない。

「その、どんな……？」

「双方のチームの子供がそれぞれ殺されてるんだが、それをやつたのが中年の男性だつて話でね。

でもどっちのチームにも、せいぜい二十歳前後までしかいないんだよ」

「え？」

どちらのチームにも該当者がいないのなら、その中年男性は、全く関係ない人ということになる。

「それじゃ、さつき聞いた『縄張り争いの腹いせ』っていうのは……？」

「まあシマ争い自体はあつたんだろうけどね。ただ子供が　あ、すまない」

話の途中でゼロールさんが立ち上がって、じこの家の子に席を譲つた。

「お姉ちゃんも、ちょっとといい？」

「ごめんね」

慌ててあたしもソファから立ち上がる。

どいた後へはこここの子たち　あたしより年上の人もいる　が　数人、教科書とノートを広げて座りこんで、話が打ち切りになつた。

「宿題……？」

「ああ」

後ろから見てみると、歴史だった。

あ、Jの問題。

シユマーの人間が絡んだ戦争だから、かなり詳しく聞かされるところだ。

けどあたしよりは2つくらい上の男の子は、歴史が苦手みたいで考えこんでいる。

「そうだ、おじさん教えてくれよ」

「へ？ 僕？」

ダメっ、俺はダメ！ 勉強は苦手だ！」

ゼロールさんはそう言いながら、台所へ逃げて行ってしまった。

「ちえっ、頼りないおっさんだな。しゃあねえ、適当に書いとくか」舌打ちしながらこの人が、ペンを握りなおす。

けどこれじゃ、ぜんぜん違う答え……。

差し出がましいとは思つたけれど、横から話しかける。

「あの……Jの年代はこの事件があつたから、これに繋がる話を選べば……」

「え？ あ、そうか。

けど待てよ、お前、俺より年下だよな？」

「あ、はい。たぶん……」

多分といふか、間違いなくあたしのほうが年下だろう。

「それでもう、Jんなの分かるのか」

「いえ、行つてゐる学校がペース早くて……だから……」

まさか家が傭兵集団だから歴史に詳しいとは言えなくて、そう言い訳する。

ただこの言い訳も嘘じやなかつた。

学院は英才教育で知られている。当然学科の進度も早くて、あた

したちの学年でも一般校に比べて2年は進んでいた。

「ふうん。っこもあるんだな。

そしたらこっちは分かるか?」

「すみません、数学はちょっと……」

数学は授業についていくだけで精一杯で、その先まではとても分

からない。

「そつか、お前も苦手なんだ。んじゃ頑張つて解くしかねえな。

つてお前、名前は?」

「え、あ! すみません、家へ上がらせていただいてるのに、名乗

つてもいなくて」

成り行き任せの済し崩しで、自己紹介をえしていないのを思い出

す。

「えつと……ルーフェイア＝グレイスです。それと……向こうで料理してるのが、イマドです」

「へえ、ルーフェイアか。なんかいい名前じやん。俺はベック。それからカーツにエバンにショーンにアーヴィングにマリー、あとあつちの赤ん坊がアーダで、向こうの姉貴が……」

一瞬で混乱する。

「じめんなさい、もう一回……」

やつは言つたけれど、もう一回説いても覚えられる自信はなかつた。

「あ、わりいわりい。覚えられるわきやねえよな。とりあえず俺がベックな」

「あたしショーン！」

おねえちゃん、こっちも教えて！」

綺麗な亞麻色の髪をした女の子が、勢い良く声を上げる。

「算数？ ちよつと自信ないけど……」

けど幸い問題を見てみると、教えて上げられそうだった。

「これは、ここをこうすれば……」

「そつかあ。おねえちゃんすこいへ」

「そんなこと、ないわ。習つたところだもの」

そうしていふうちに、次々と声がかかる。

「ねえねえ、こつも教えて！」

「これ？ これは……」 うつ風に線を引けばわかるでしょ？」

「僕も教えて～！」

「「」めんね、ちょっと待つて」

声をかけられるのは嬉しいけれど、そんなに一度には見られない。

「順番にみてあげるから……」

「」の説明したらいにか考えながら、ひとつひとつ宿題に付き合つた。

自分に兄弟がいないせいか、こんな風にまとわりつかれるのが、とても楽しい。

「なんだ、ずいぶん馴染んだじゃねえか」

一段落したのか、イマドとゼロールさんが戻つてきた。

「もう、終わつたの？」

「ああ、下ごしらえは終わつたかんな。あとは直前で間に合ひつ。お、懐かしい問題やつてるじやねえか」

イマドも一緒に宿題を見始めた。苦手な理系を任せられたから、これだとずいぶん楽だ。

ちなみにゼロールさんは、今度は仕事部屋へ逃げて行つてしまつた。

「やたつ、今日は早く終わつた！ お兄ちゃん、お姉ちゃん、ありがと！」

「あたしもおわり 」 どつもありがと」

「どういたしまして」

「」ちどに倍の人数が見られるようになつたおかげで、ほどなくみんなの宿題が片付き始める。

「今日はかあちゃんに怒られなくて済みそうだぜ」

「 何が怒られないんだい？」

できあがつた仕事を納めに行っていたおばさんも、戻ってきた。

「 おかえりなさい」

「 あ、おかえりっ！」

かあちゃん、宿題終わつたから遊んでいいだろー。」

「 ホントかい？」

半信半疑のおばさん、ベックさんについて、小さいうちから一人を見せた。

「ホントだよ、ほりー。」のおねえちゃんが、教えてくれたんだ
「俺も終わつた」

「へえ、驚いたね。ちゃんとやつてあるじゃないか。」お嬢ちゃん
「んに、しつかりお礼言つたかい？」

「うん！」

あたしが見たことのない、家族のやり取り。

「そつかい、じゃあ夕ご飯にじょうか。すぐ作るからひよつと待つ
て……」

「あ、オイラ帰る」

急にワインが立ち上がつた。

「どうしたの？」

「だつてオイラ、つい長居しちゃつた。みんな呆れかえつてると
思つし」

「あ……」

確かにワインは、あたしたちをスラムの外へ送るために、ついで
きただけだ。なのにこんなに時間がかかつてたら、普通は心配する
だろ？。

「ねえ、ひとりで大丈夫？ もつ暗くなつて……」

「平氣平氣。だいいちオイラ、ここに育ちだぜ？」

おばちゃん、サンキュー。ねえちゃん、にいちゃん、またな！」

弾けるようにワインが出て行つた。

その後ろ姿に、イマドが苦笑する。

「あのバカ、もつ出来てんだから、食つてきやいいのによ」
「出来てつてあんた タ食までやつてくれたのかい？」

今度はおばさんが呆れ顔になった。

「すいません。つい」

「いや、それはいいんだけど……大変だつたりうへ。」

「そうでもないです。けつこいつ寮なんかで、みんなに作らされてますから」

思わず可笑しくなる。

イマドが料理上手なのは、学院では有名だ。何があるたびに食事は彼が作らされているし、それ以外にも、よくあたしに作ってくれる。

「あんた、いい嫁さんに……あ、いや、そうじやないか。

ともかくもうひとり帰つてくるから、そうしたらありがたく、夕飯いただこうかね」

「もうひとり……」主人ですか？」

そう言つとおばさんが、手をひらひら振つて笑つた。

「ダンナなんてちゃんとしたもの、いるわけないだろ。いちばん上の子だよ。いつもは家に寄り付かないのに、今夜は帰るつて連絡があつてね。

ほら、噂をすればだ」

言つてこるひびきドアが開いて、20歳くらいの男の人人が入つてきた。

身長はタシュア先輩と同じかそれ以上で、身体つきはもつとがつしりしている。髪は栗色で、瞳は青灰色。ただ肌は、ずいぶん日に

焼けていた。

「なんだ、お客様がいるのか」

瞬間はつとする。

「この人、並じやない。

ちょっと見ただけじや分からないけれど、視線の配りかたや動きかたが、普通じやなかつた。

これは……いつも人を殺している人間の動きだ。

（イマド……）

隣にいたイマドに思わず囁く。

（心配すんな。最初っから、俺の担当ではこいつだ）

例によつてなにもかも見透かしてゐらしい彼が、やつぱり囁き声で返してきた。

ただそつは言われても、落着かない。なにしろこれだけの人だ。きつとすぐ、あたしたちの素性に気がつくだろつ。

「ずいぶん可愛い子だな。誰の友達」

思つたとおり、言葉の途中でこの人が、あたしの太刀に目を留めた。

瞬間、ナイフが抜かれて殺気がほとばしる。あたしも思わず身構えた。

「お前ら、連中の回しモノかっ！ 人んちあがりこみやがって、ぶつ殺してやるぜ」

室内に緊張が走る。

けじじうかなるより早く、おばさんが怒鳴りつけた。

「ひひひ、帰つてくるなり何考えてんだい！ ここの家のなかで、そんな騒ぎは許せないよー」

言いながらおばさん、容赦なく男の人の頭を殴る。

「ひてえなあ！ けじじう言ひけじお袋、もしこいつが連中の殺し屋だつたら、どうするんだ」

「んなわけないだろ。もしここの子たちがその気なら、ひとつに殺されてもや」

信じられない言葉が飛び交う親子喧嘩に、呆然とするしかなかつた。

「『めんね。うちのアーチキ、ちょっとイカれちゃつてや』あたしのようすに気付いたのか、オリアというお姉さんが話しかけてくる。

「グループのアタマつて気取つてゐるけど、どうは悪せばっかり。こつちは迷惑でしようがなによ」

何も返せなかつた。

兄弟や家族つていつのは、もつと違うものだと思つてたの……。

「ほりアーチキ、いい加減にしなよ。この子がびつくつしてゐるじゃなこのや」

「オリア、お前まで甘ひじょろこ」と……」

「なに言つてんだよ、じつかしてのせア一キだら。」この子に手え

出したら、俺だつて黙つちゃいないからな」

「ベック、さては惚れたか?」

計10人の家族 赤ちゃんまでが泣き出してしまった が
騒ぎ始めて、なにがなんだか分からなくなつてくる。

「イマジ、じうじょり……」

「ほつとけよ。そのうかがいにかなつて」

相変わらずイマジはマイペースだ。

「なんだ、ずいぶん騒がしくなつたな」

奥の部屋からひょいっと、ゼロールさんが顔を出す。

「あの、ゼロールさん、止めてください!」

「放つておけば、そのうち止まるんじやないか?」

「……」

イマジとまるひきり回じ」とを叫ぶ。

でも2人の言葉通り、数分もしなかつて、丸くへつ取まつたよう

だった。

「分かつたね。あんたがバカやつてほつつきあるつてる間に、この
子が借金立て替えてくれたんだ。
ちゃんとお礼でも言いな!」

おばれんが一喝する。

「やつやどりも。

ナビホントに、連中の回しモノじやねえんだな

「ダチですかね」
お兄さんの言葉に、さりとてマイマドが答える。

「ダチ？ 誰のだ」
「それは言えません。言つたらそこいつば、じつなるか分かりませんから」

また雰囲気が険悪になる。

「そんなに信用できねえんだから、やつをと出でたらいいだ」

「はいはい、そこまで」

じつしたらいいが困つてこると、ゼロールさんがのんびりした調子で、間に入つてくれた。

「ダグくん、そんなじや女子にモテないぞ」「るせえな！」

つて、なんであんたまでいるんだ！」

ゼロールさん、この男の人と顔見知りだつたらしき。

「いやまあか、じいじが君の血筋とはね。
知らすにあがらせてもらひたけど、おかげで事態が変えられそう
だよ」

「あんたと話すじいさんはねえつー。」

なにがどうなつてるんだらう。

イマドモゼロールさんも、何か考えがあるらしいけど、それが何
なのががまつたく分からぬ。そもそも、じんな騒ぎになつてしま
つた原因さえ、分からぬくらいだ。
かといつてこんなに取りじいんでたら、聞いつにも聞けないし……。

「なに考えこんでんの?」

「あ、オリアさん」

またお姉さんが氣が付いて、声をかけてくれた。

「その、どうしてみんなが騒いでるか、分からなくて……」

「へ?」

お姉さんがおかしな声を出す。

「あんたが、なんにも知らなかつたの?
まさか、兄貴が誰かもしらないとか?」

「はー」

オリアさんが頭をかかえた。

どうもあたし、またおかしなことを言つたりしき。

「あの、大丈夫ですか?」

「あ、うん、大丈夫大丈夫。

兄貴兄貴、ストップ。」の子ね、兄貴が誰か知らないんだって

「は？」

「こんどはお兄さんが、おかしな声を出して動かなくなつた。

「マジかよ」

「マジらしくよ」

そのまま沈黙が降りる。

少しあつて、お兄さんがやつと口を開いた。

「ホントに知らないんだな？」

「あの……記憶違いじゃなければ、お名前もつかがつてないんですけど……」

再び沈黙が降りる。

おばさんがひとり爆笑した。

「ほりみろ、だから言つただらう？」の子はそんな悪い子じゃないよ

「みてえだな」

頭をかきながら、お兄さんも座りこむ。

「あんなんだ、その……ようは俺は、殺し専門のチームのトップなんだ」

「そりなんですか」

よくわからないけれど、トップと並んで……。

「偉いんですね」

「おこ、それは違うだろ……」

「そりなんの？」

なにかのグループとかのトップっていうのは、偉くないんだろ
うか？

首をかしげていると、ゼロールさんが真ん中へ出てきた。

「ようするに、ここにいる彼が、祭りの片方のトップなんだよ」「じゃあ、シーモアたちが戦おうとしてる……相手、なんですか？」
「やつこいつこと」

この言葉にやつと納得する。

抗争を控えたチームのトップなら、自分だけじゃなくて、家族まで巻き込まれる可能性がある。

だから見知らぬあたしたちがあがりこんでるのを見て、とつそこのあんなことになってしまったんだわ。

「すみません。そんなこと知らずに、上がりこんだりして……すぐ
帰りますから」

「え？ あ、いや、もつ今更だからまわねえよ。
ほら、座んな」
帰りかけたあたしを、お兄さんが引き止めてくれた。

「すみません……」

「気になんない。」いつも濡れ衣着せたしな

「あ！」

お兄さんが言つた『濡れ衣』で思い出す。

「ゼロールさん、さつきの話……」

「ああ、そうだつたな」

そういえば、と云つて、ゼロールさんが顔をあげた。
まさかとは思つたけど、忘れてたんだろつか？

「ダグくん、これは何度か君のところを訪ねたのと、関係あるんだ
が……」

一瞬覚えてないんじゃないかと不安になつたけど、ゼロールさんは無事話し出す。

「どうも今回の子供殺しの件、裏がありそうな気がするんだ」

「ハッ。言つに事欠いてそれとはな。

ウラもなにも、あいつの傍には連中が使つてゐるナイフが落ちていた。

それを見てたやつだつているんだぜ？」

「その田撃者が誰かは知らないが……本当に見たのかい？」

ゼロールさんの言葉に、思わずイメージと顔を見合せる。

「……どう意味だよ」

ダグさんも同じことを思つたみたいで、鋭い声で訊き返した。

「例えば、なんだがね。

その田撃者が、嘘を言つてたとしたら？」

「嘘……？」

みんなの困惑を無視して、ゼロールさんが続ける。

「たまたま現場近くで寝てたっていう、ホームレスから俺が聞き出したのじゃ、君のところの子供を殺つたのは、中年の男なんだそうだ。

ただ報復が怖くて、人には言えなかつた そう言つてたよ」

「信じらんねえな」

ダグさんが一蹴した。

確かに「聞いた」という以外に、なんの証拠も無いから、そう言 われても仕方がないだろつ。

けど、いつたいどれが本当なんだろつ?

シーモアたちは、『繩張り争いの腹いせに殺された』と言つた。 だけど疑われてるダグさんの方も、誰か子供が殺されてるらしい。 そして、シーモアたちの仲間がやつたと思っている。 しかもゼロールさんは、ぜんぜん関係ない第三者がやつたと言つ ていて……。

「ここまで状況が揃うと、なんとなぐゼロールさんの話が正しそう だ。けどそうすると今度は、「どうして」というのが分からなくな る。

「すいません、へんなこと聞きますけど……今まで何人殺されたん です?」

やつぱり腑に落ちないような顔をしながら、イマドが訊いた。

「人数か?」

幸いひとりだけだ。たまたま、ひとりで出でたとこを……

「あつ！」

はつとして大きな声をあげてしまつたあたしに、みんなの視線が集まる。

「どうした？

　　そうか、まあいな。行くぞー！」

それ以上あたしが言わないうちに、意味を悟つたイマドが、武器を手に立ち上がつた。

「おい、いつたいなんなんだ？」

「ワインです。

ダグさんと入れ違いに帰ったんですけど、向こうのチームの子で、ひとりで帰つて……」

要領を得ない説明だつたけれど、ダグさんもゼロールさんも、これだけで意味は察してくれた。

「そうか、あの子がチームの子なのは知られてる。もしかしたら、狙われるかもしれない。

ダグくん、スラムを案内してくれないか？」

「冗談言つな。向こうのガキがどうなるうと、俺の知つたこつちやねえ」

「報酬を出してもいい。ともかく頼む！」

ゼロールさんが食い下がつたけれど、お兄さんは知らん顔だった。

「俺は金で買われるほど、安かねえよ」

「どうしよう。

ここに住んでいないあたしたちだけじゃ、どの道がどこくつながつているかもよく分からない。

けど、早くしないと……。

「おい、ルーフェイア、いいから行くぞ！」

「でも……」

と、おばさんが動いた。

いきなり「ちち」と音がするほどの勢いで、またお兄さんの頭を殴りつける。

「このバカつたれ！ ちやつちやと行つてあの子助けといで……！」

「けどよ、お袋……」

「けどもくそもあるかい！ あたしゃンな子に育てた覚えはないよ。ここで行かないつてんだつたら、わつわとの家も出ていきなつ！」

すごい剣幕で叱りつける。

これにはお兄さんも、逆らえないみたいだった。

「ちつ、わかつたよ」

ダグさんと、ゼロールさんも立ち上がる。
あたしもすぐ後ろについた。

「いいかい、ダグ。手抜いたらタメシ抜きだかんね！」「でもルーちゃんたちの『飯は、とつとくからね～』
声援（？）が後ろから聞こえる。

「どんくらい前の話だ？」

「ほんとにダグさんが、帰つてくる直前で……」

アパートの階段を降りながら答えた。

「真つ直ぐ帰つてればともかく、寄り道でもしてたらやばいわ」「ともかく、探さないと……」

「つても、どこを探せばいいんだ？」

ゼロールさんが考え込む。

「ダグさん、分かりませんか？」

「ムチヤ言つた。よそのガキがどこの歩くかなんぞ、天氣予報より難しいぜ」

「そうですけど……」

でも早くしないと、何が起るか分からない。

その時、なぜかやり取りに加わってなかつたイマドが、悔しそうに言った。

「さきしょ、居場所はわかつたけど場所がわからんねえ！」

「イマド？」

「いかあたしたちとは違ひ、彼は、ワインのこる場所がわかつてゐみたいだつた。

「分かったの？」

「それがわからんねえんだって！ なにせこの辺知らねえから、どっちの方角かも見当つかねえんだよ！」

「え？」

「この言い方……。

急いで記憶を探つて思い出す。

そう、確か母さんが時々、こいつ言い方をしてて……。

「ねえ、何か目印になりそうなもの、ない？」

よくこいつして地図とつき合わせて、位置を割り出していたはずだ。

「田印？ そう言われても……待てよ、ジャンク屋があるな。掘つ立て小屋みてえので、裏手にジャンク品が山積みになつてて……」「そりやドアルんとこだ。そのガキ、やっぱ寄り道しやがつたな。

ついて来い、こっちに抜け道がある」

急に右に折れたダグさんに続いて、慌ててみんなで進路変更する。

「あそこから連中のアジトまでは、使う道はひとつだ。これ以上は道草もしねえだろうし、間違いなくどつかで捕まえられるぞ」
場所をえ分かつてしまえばあとはダグさんの独壇場で、細い抜け道を迷うことなく選んで行く。

「あつ、ごめんね！」

転がされている「ミバケツ」を飛び越えようとして、餌を探していく野良犬を蹴飛ばしかけた。

「お前、イスに謝るなよ」

「でも、邪魔しちゃったもの……」

それ以外にもいろいろ障害物があつたり塀の隙間を抜けたり、拳句に右左と折れていくから、学院のランニングよりよっぽどハードだ。

「ここ曲がりや、あとまじつぽんだ」

先頭のダグさんがそう言つて、スピードを上げる。
けどそれを上回つてスピードを上げたのがイマドだ。

「いたぞ！」

「ほんとに？！」

あたしも並んでスピードを上げる。

「お~い、いくらなんでも……」

後ろからゼロールさんが何か言つてこるのが聞こえたけど、気にしてる暇がなかつた。

「そこを道なりに右だ！」

「うん」

これなら何がある前に、ワインのといふく着けるだらつ。
そう思つた矢先だつた。

殺氣！

「ぐく微かだけど、感じる。

「イマド、じめんね、先に行くわ！」

「なつ……！」

呆れるイマドの前で、あたしは自分に防御魔法と、高速魔法をかけた。
もう一段スピードが上がる。

角を曲がると、ワインの後姿が見えた。

だけど同時に、殺気がふくれあがる。

ふわりと通りの右から出てきた男が、隠すようにして短剣を構えているのが、なぜか分かった。

魔法でどうにかしたいけれど、それが出来ない。通常魔法は指向性がないから、これだけ2人の距離が近いと、間違いなくワインまで巻き添えになってしまふ。

男が動く。

短剣が振り上げられた。

「ワインっ！」

とっさに突っ込んで、男に体当たりする。

「痛つてえ！」

切つ先がワインの腕をかすめたけれど、それだけで済んだ。けど別の男が出てきて、またワインへと刃を向ける。

「ワイン、動けるんなら逃げてっ！」

振り下ろされる剣を、鞘にはいったままの太刀で受けとめて、牽制に軽く炎魔法を放つた。

顔面に熱を受けて男が怯む。

「ね、ねえちゃん？！」

「いけない！」

ワインの後ろに、もうひとり。

やむを得ず、小太刀のほうを抜いて投げつける。刃が宙を飛んで、

狙いたがわざその男の首に突き立つた。

この隙にあの子が上手く逃げてくれれば……。

「ウインツ、早くツ！」

だけどウインはすくんでしまつたのか逃げようとはせず、最初に体当たりして体勢を崩させた男が、またこの子を狙う。しかもあたしの後ろからも、別の男が切りかかってきた。

「命の穂刈りしご女たちよ、その者に安らかなる慈悲を！」 グリム・エンブレイスツ！」

あたしへ来た男には呪文を唱えておいて 抵抗しきつたにしても、すこしは時間が稼げる ウインのほうへ向かう。

「ウインツ！－！」

「うわあつ！」

ようやく事態に気が付いて、逃げようとしたこの子の肩が、ざくりと切れた。

倒れたウインツごとごめを刺そつと、男が短剣を翳す。

させないツ！

大きく踏みこみながら、男の腕めがけて太刀を振り上げる。でも刃が達する前に、男がくずおれた。男が持っていた短剣が石畳に落ちて、乾いた音を立てる。

背に、ナイフが突き立っていた。

残る男たちも、ひとりは死の呪文で、もうひとりはあたしの小太刀で絶命している。

あたし、また……。

「ルーフェイアツ！」

そこへやつと と言つても最初から数えてほんのわずか
イマドが来る。

「大丈夫か？」

「うん。片付いたわ。

ワイン、大丈夫？」

たぶんさほどではないと思うけれど、心配だった。

「ちきしょ～、いてえ……」

痛がるワインに急いで駆け寄つて、傷を診る。

よかつた。

逃げようとしていて、まともに切られなかつたのがよかつたのか、命に関わるような傷じやない。

「ちょっと動かないでね」
回復魔法を唱えると、流れていた血が止まった。
ついでに持ち合わせの痛み止めを打つてあげて、応急手当の代わりにする。

「あとは魔法で治すより、病院へ行つたほうが……」
魔法は便利だけど、本来の治癒能力を強引に高めているに過ぎない。戦場のような緊急事態ならともかく、普段はなるべく使わないほうが良かつた。

「俺、もうダメ、息、あがつた」
ダグさんにさらに遅れて、ゼロールさんがここへ来る。
「あの、おふたりとも、大丈夫ですか？」
「あんたにそう訊かれちゃ、かたなしだよな……」
ダグさんが苦笑いした。

「にしてもこのナイフ、誰が投げたんだ？」

向こうではイマドが、倒れた男の人の背を見て、不思議がつくる。

「かなりのウデだぜ、これ投げたの」
「そうだね」

ワインをゼロールさんに預けて、あたしも見てみた。
投擲専用の物が、正確に背中から心臓を突き刺していく、男は即死だ。

でも、このナイフ……？

精緻な彫刻が刃の付け根に施されているけど、それに見覚えがあ

る。もし、記憶違いじゃなければ……。

「 私だ」

路地の奥から声がした。

予想どおり、聞き覚えがある声だ。

「 父さん？」

そう呼ぶと、見慣れた姿が現れた。

「 え、ディアスさん？！」

「 誰かと思えばディアスじゃないか

「 あ、ルーフェイアの親父さん」

他の3人からも一斉に声が上がって、思わずあたしたちは顔を見合せた。

「 その、父さんを」「存知なんですか？」

「 お前の親父、顔広いな」「

「 父さんって……まさか娘さん？！」

「 お前、娘がいたのか。けど確かに似てるな」

嘘みたいだけど、みんな父さんと面識があつたみたいだ。

「 娘のお前が知らねえわけねえけど、ダグさんとゼロールさんは、なんで知つてんですか？」

イマドが訊く。

「 俺は戦場で。もう10年以上も前に、俺が取材で同行したとき、その部隊に彼がいてね。

で、なんとなく気が合つて、そのまま今まで付き合つてるんだ」「ワインを抱いたままゼロールさんが、そう答えた。見かけによらずこの人、すごい場所まで取材しているらしい。

「なる……。んじゅダグさんは?」

「俺らのチームの大先輩だよ、ティアスさんは」

「え……?」

初耳だった。

けどチームの先輩って言つては……。

「父ちゃん、このスラムの出身だったの?」

びっくりして尋ねると、父さんがすました顔でうなづく。

「 それより、医者だろ?」

「え? あ、うん」

痛み止めのせいでの、ワインが痛がらないからうつかりしていたけれど、早く診てもらひにしたことはない。

「えつと、ここからこちばん近い病院つて……?」

「俺が連れて行こう。スタッフにも知り合いが多いから、何かと便利だろ?」

悩んでいると、ゼロールさんが引き受けてくれた。

「 2丁目の病院に行くから、この子の仲間にわざついてやつてくれ

「はい、分かりました」

ワインを今度は背負つて、ゼロールさんが育児に消えた。

「……こつら調べりや、ビーの誰が襲つたか分からうだな」
相変わらず死体を覗きこみながら、イマドが面白そうと言つ。
「生きてりやもうちよつと、樂に分かんだけな。けども、死体
でも少しあ……」

「イマド、下がつて!」

嫌な気配を感じて、あたしは叫んだ。
同時にイマドに、防御魔法をかける。

「へ?

「とせべべ!」

割合近くに倒れていた2つの遺体と、その周囲がいきなり燃え上
がる。
かなりの高熱だ。
でも下がるのが早かつたのと、魔法が間に合つたので、イマド
にはケガがなくて済んだ。

「つたく危ねえなあ。どうこう仕掛けだよ!」
炎が収まるのを待つて、もう一度近づいた彼が毒づく。
「たぶん……誰か他に、仲間がいたんだと思う
あるいは、監視役か。

「そうなのかい?

「……しても、一発でこの有様とは……やつぱり魔法かなにかか?」

「はい」

不思議そうなゼロールさんに答える。取材には慣れてても、戦闘

は本業じやないから、よく分からんんだね。

「炎系魔法の、上位だと思います。最上位だと、もつれようと効果範囲が広いので。

両方の遺体の内よりに一回づつと、中央狙つて一回の合計3回で

」

「解説、またあとでな
「イメージに遮られる。

「あ、ごめん……」

どうもあたし、一とが魔法となると、こんなに強いてしまうみたいだ。

「これで手がかりは無しか

やつぱり遺体をみてた父さんが、ぼそつとつぶやいた。
なにしろ着ていたものさえ、もう分からない。

「どうちにしてもシーモアたちに知らせねえと。それにこれ、もしかするとダグさんのチームと……あと家族もヤバいんじゃ？」

「あつ……！」

イマドが何気なく言つた言葉に、思わずあたしは声をあげた。

「やべえ、早く仲間集めて……お袋たちも移動させなこと……
ダグさんも心なしか責やめる。

「俺が家のほう、行きましたか？」で、ダグさんが仲間集めれば早いですよ。

ルーフニア、お前シーモアたちと一緒に知らせて來い

「あ、うん。そしたら、行つてくるね」

あたしは太刀を持ちなおして走り出して 父さんに襟首を掴まれた。

「父さん、放して……」

「これじゃまるで子猫だ。」

けじ放してもらえず、詫問そのままに上めりざる。

「ダグ、仲間を集めろ。ハイ、アーニーと一緒に歩いてくれ」

「あ、わかりました。でもそれすると、俺の家族は？」

ダグさんが心配そうな表情を見せる。

「俺が行く」

同時にこきなり襟首を放されて、あやうく前へ転びかけた。

「父さん、ひどい……」

なのに抗議して振り向いた時には、もう父さんは背中を向けて歩き出した後だ。

「お前んち、おやじともめりやへりやだな。親父さんも相当だな

「それ、言わないで……」

呆れる苡ママアユ葉がない。

「まあいいや、ともかく行け。ダグさん、それじゃまた後で」「ああ。

「アーニーはどこで会ったの？」と聞かれて、場所は誰の町かに聞けば分かる

「アーニーです」

答えて、あたしたちが左右に別れた。

C a l e a n a

「ど～こ～いつちやつたのかしらねえ？」

久々のスラム。時は夕暮れ過ぎ。

もつそろそろ、その辺の家じや夕食の時間かしら？

けど～じ……。

迷うつて言ひほぢには変わつちやないけど、やつぱりどつか馴染
まないのよね。だいいちあたし、ティアスと違つてここの育ちじや
ないし。

それになにより独りだと、ちつとも進めないのが困つもの。

「よお、何か探しもんかい
ずつといじの調子なのよねえ。

「人を探してゐるのよ。金髪で太刀持つた美少女、見なかつたかしら？
じやなきやバスター・ドソード持つた、淡い金髪の美丈夫でもいい
わ」

「どつちも見なかつたなあ。

けどよ、金髪で太刀持つた美女ならみたぜ」

あ～。

「この男、ちよつとは頭が回る？

「ふうん、ど～じで～」

おもしろやうだから乗つてみる。

「そりや決まつてゐだろ～。じ～じでさ」

わかりきつた答えだけど、まあ合格かしら？

さて、次はどう来るかしらねえ

「とりあえずその辺入らねえか？ 今夜は冷えそうだしな」

「そおねえ、どうしようかしら？」

ちょっと迷つたフリして、からかつてみたりして。

「いいじゃねえか。その尋ね人は、うちの連中にでも探させつから
さ」

「あら、あなた偉いのね？」

案外、上手いのが引っかかったのかも。

けど、何者かしら？

なにせあたしはスラムには疎いから、ぱっと見ただけじゃビリの
誰だかわからんなくて困るわ。

しうがなから意識を凝らして、この男を探つてみる。

実言えばあたし、気合入れれば人の考へてることはある程度
まあ漠然としたイメージ程度だけど は読めるくらいの力は、あ
つたりする。

もつともこれつて珍しい話じゃなくて、シユマーの家にはあたし
を上回る連中が「ごろごろしてゐる」、それ以外にも幾つも、この手の
血筋はあるし。

つて、ちょっと待ちなさいよ……。

「ねえ、もう1回聞くけど……本当に金髪の美少女、知らないのね
？」

「ああ。見たこともねえなあ
なるほど、こう来るわけね。

「おかしいわねえ。確かにここへ来たはずなんだけど。それになん

たって、すぐ噂になる子だし」

さてこの男、あたしの表情が変わったのに気が付いたかしら？

「まあいいじゃねえか。そのうち見つかるや

「そのうちじや遅いのよ」

言いながらあたし、手にした太刀を半分抜いて見せた。

「物騒だなあ。

けどスラムつたつて広いんだ。そう簡単には見つからねえことく
らい、あんただつて分かるだろ？」

「普通ならね」

同時に一閃。

男の前髪がひと房宙に舞う。

「さあ、白状してもらいましょつか？ 昼間あの子に会つたわね
太刀を付きつける。

「な……」

ふふ、慌てるわね。

いつも無造作に片手で構えてるだけだけど、この男自分がそこそこ出来るだけあって、すくみ上がってる。

「あたしね、嘘はキレイなのよ」

会つたんなら会つたつてちやんと言つてくれれば、考えなくもなかつたんだけどね。

「い、いや、そりや確かに……けど、あなたの言つてる子がどうか分からんし……」

「金髪碧眼の太刀持つた美少女で、通りすがりのもめ」と頭突つ込んで、拳句に借金をいきなり肩代わりするよつ子は、あたしの娘くらいよ

「む、娘つ！」

あらなによ。

あたしに娘がいやや、おかしいみたいな言ひ方じゃない。

「ともかく会つた場所まで案内してもらわ。

それとそうね、他にも何か役に立つてくれたら、命だけは助けてあげる

「ひでえ……」

チンピラ束ねてる割には情けない声、この男つてば出でじ。やつぱり前言撤回、失格だわ。

「あら、別にいいのよ。別にここで殺してあげたって。嘘ついたんだもの、そのくらいしてもいいわよねえ？」
そう言って、頬に紅い線を引いてあげる。

「あたしのお願い、聞いてくれるかしら？」

「……は、はい」

「よひしー」

とりあえずこの男を連れてれば、ヘンなのに煩わされることが、なさそうだしね

あ、そうだと。

「せうせう、うちの娘があなたに渡した紅玉、返してもいいえるかしら？」

こういつたらいの男、子供みたいに泣き出したその顔になっちゃった。

「別にタダでとは言わないわ。ちゃんとその分は払うわよ。

7000ルルシ……だったわよね？」

あのねえ、露骨にほつとした顔しないの。情けないつたらありやしない。

「さ、出してもらひやる?..」

「これです……」

内ポケットから男が、指先ほどもある紅玉を出して見せた。
受けとつてよく眺める。

「本物みたいね」

この紅玉、あの子けつこうに入つてたのよね。
にしてもいくら人のためだとは言え、それをあつさり差し出しちゃうんだから、あの子つたらたいしたもんだわね。

「あの、すいません、お金は……」

「あのねえ、何言つてるのよ。ちゃんと案内してから。いいわね?」

「げ……」

なんだかカエルが絞め殺されたみたいな声。

「 もへ、もへきから情けない声出して、みつともないわよ。

といふるあなた、名前は?」

さすがに名前がわかんないと、不便だし。

「え? あ、レードつて言いますか……」

「あ、そ。あたしはカレアナ。呼び捨てで構わないから。さ、どっち?」

レードとか言うチソピラを先に立たせて、歩き出す。場所は、ここからそんなには遠くないんだそつ。

「その、そこの近くに住む家族が借金返してきませんで、俺が取りたてに行つたつてワケで」

「ふうん」

「いじやよくある話なんだらうけど。でもそんなに必死に取りたてなくたつて、自分が困るわけじゃないのにねえ？」

「そしたら娘さんが割つて入つて、代わりに払つてくださつたんですけど」

すつかり子分みたいな調子で、この男が弁解する。

やつぱりみつともないわ。

もつとも嘘ついたまま知らん顔してゐつてのも、腹立つんだけだ。

「あ、いじこらあたりです」

割合広めの路地で、レーダーが立ち止まつた。

「いなじやない」

「そりやそつスよ。もう何時間も前の話ですか」

「それじゃ話にならないでしょ。どこ行つたか聞いてらうし」

「はあ……」

「彼が渋る。

「あら、いこわよ。じやあお金払わないもの」

「そ、それだけは勘弁してくださー！ なんことになつたら、社長になんて言われるか……」

「根性なし。」

「いじまで情けないと、もつ形容詞がなくなつてくるわ。

「はいはい、分かつたらさつさと聞いてくるの。10分以内に帰つてこないと、あと知らないわよ」

「ひええ……」

「なんだかぼやきながら、それでも彼が聞きに行つた。で、立つて待つてゐるも面倒だから、その辺の階段に座りこんじやう。

けじせつかく座つてたら、家人が帰つてきちゃうし。

「ちよいとあんた、うちの玄関の前に座つて、何か用かい?」

「あら!」めんなさい。ちょっと人探してて、疲れたもんだから。そうだ、うちの子見なかつた? 金髪に碧い瞳の可愛い女の子で、太刀持つてゐるんだけど」

「」のおばさんが、まじまじとあたしの顔を見る。あんまり美人だから、見惚れたかしら?

「ふうん……なるほどね、あんたがあの子の親かい。確かに、言われてみれば似てるかね」

「でしょでしょ」

なんたつてあたしの血縁の娘だもの。でもあの子自立つから、やつぱりちゃんと見られてたみたいね。

「それで、どこへ行つたか分かる?」

「昼間のあの子がそうなら、ジャスンといに上がりこんだよ。なんだか泣いてたつけね」

あらま。何で泣いたか知らないけど、ちょっと見たかつたなあ。でもとりあえずはあの子探さないと、見るも見ないもないので。

「そしたらそのお宅、どこかしら?」

「 そこのアパートの、2階のいちばん奥だよ」

「 ありがとう、助かつたわ あ、これ、少ないけど取つといて。娘
見つけてくれたお礼よ」

そんなやりとりしてたら、レードが戻ってきた。

「 お嬢さんの居場所、わかりましたぜ」

「 ジャスさんって方のお宅に、上がりこんだみたいね」

「 なんで知ってるんです……」

可笑しくなるくらい、レードががっかり肩を落とす。

「 ま、人徳ね。行きましょ」

何か言いたそうな彼は無視して、あたしは教えられた部屋のドア
を叩いた。

中からまたに「お嬢さん」って感じの人顔が顔を出す。

「なんだい？」

「忙しい」と悪いんだけど、つちの娘のルーフェイア、お邪魔してないかしら？」

「あ、あの子の親御さんかい。
いや、あの子にはすっかり世話をになっちゃってねえ。ほんとだったら……」

長くなりそう。

しうがないからこいつちで遮る。

「「めんなさい、あの子、いるのかしら？」

時間のある時だったら、いぐらだつて井戸端会議に付き合つんだけど。

「あ、すまないね。

それがあの子たち、うちの息子と一緒に飛び出しきまつたんだよ。
知ってる子が危ないとか言つてさ

「そつ……」

あの子「たけ」って言つからには、イマドも一緒つてわけね。

あれで案外、ルーフェイアって鉄砲玉。特に何か人が危ないって言つと、それが片付くまではなし崩しに鬨わつちやう子だし。

「まあ待つてりやそのうち戻るだらうから、上がつていきなよ」

「「めんなさい、そつもいかなそつ。」

もじうちの子がここへ戻つてきたら、あたしが来たつて伝えてくれるかしら？」

「そうかい？　じゃあそつ伝えるよ」

世話を好きいらしかった人が、ちょっと残念そつた顔になる。

「落ちついたら、親子で寄り合せてもらつわね」
ジャスさんにさわづかれて、この部屋を後にした。

「せ、レーデ、どうか心当たり思に出しちゃうだい」

「そんなムチャな……」

「つべこべ言わないの。」このは詳しいんでしょ。

だいいち最初なんて、『手下に探せらる』なんて頼ましことく書
つてたじゃない

「なんでもない」と、覚えてるんすか……」

失礼ね。

あたしこれでも、記憶力は悪くないんだから。

「ともかくそつぱつたからにせ、責任取りなさいね。はい、急いで
急いで」

「だからムチャですよ。

時間もらえんなら、絶対探し出してみせますけど」

「あらそつなの?」

今度は彼、けつこつ自信ありげ。

「そりや間違いないですって。だから時間もらえませんかね?」

「それならあげてもいいけど……この待つのはやめ」

何が悲しくて、こんな寒空の下で待たなきやいけないんだか。

「そりやまあ……んじゃ、知り合この店でいこスか?」

「へんなどこじやないでしょ?」

思わず勘ぐつたりして。

もつともそつながら、営業できないみつこするだけだけだね。

「いや、感じのいいバーですから。

ね、カレアナの姐さん、それで手伝ってくれませんか？」

「やうねえ……」

ちょっと都えこんでみせる。

やたら不安そつたホールの面白こじつたが。

「姐さん、頼みますよお」

「じゃあ、うつしましょ。あたしの飲み代をあなたがおくる、これで
どう？」

「オー……」

わざわざの歎き、聞き逃したりなんてしない。

「あら、そんなこと言つんだ?

じゃあ、うつりの娘に手を出してくれた分、命で払つてもいい
いのよ。」

「わ、分かりました分かりました、それでいいですー。」

で、商談成立

案内してくれるレーダーに向ついて、そのバーとやらへ向かう。

久々に、美味しいお酒が飲めそうだわ。

Seamore

「 ～」

向こうのほうでハミングしながら、ナティエスのやつが何やら作つてた。

あいつが機嫌がいい理由は、単純だ。街へ繰り出してみたら案の定、みんな気が緩んでて、まさに掏り放題つてやつだつた。

「 さあみんな、出来たよ～」

高価な魚介を山ほど放りこんだスープを、ナティが持つてくる。

「 へえ、美味しいやつじゃないのさ」

「でも」めんね、あとはパンとサラダだけ。あ、けビミルクとチーズはあるから

「 いいつていいつて。明日祭りがあるのに、そんなに大食らいするわけにやいかねえからな」

「ホント。だいいちこんな高価いモンけつこいつ久しぶりだし、これで十分だよ」

そんなことを言いながら、チームの連中がぞんざく集まつてきた。

「 おい、もう食つていいんだろ?」

言つが早いか手が出る。

「 あ、ちょっと! 分けて上げるから、待ちなさいつてばー」

ナティのやつが容赦なく声をあげた。

「 つたくもう、意地汚いんだから。だいいちこれ、あたしが用意したのよ」

「 分かつてん分かつてん」

昔から、なんやかやと賄いやつてたナティは、「一ゆーことなら発言力がある。年上だろうがなんだろうが、お構いなしつてやつだ。

「こしても、よくこんなに買えたな」

「だから言つたでしょ、掏り放題だつたつて。

もうみんなバカよね。明後日の記念日に浮かれちゃつて、懐なんかまるつきりお留守だもん

もつともそれを差し引いたつて、こいつの腕はたいしたもんだろうねえ。

ついでに言つとナティのやつ、財布をまるいと取つて来ない。札束のなかからちよこつと抜いて、場合によつちや「落ちました」つて返すんだから、たいした度胸だ。

那人曰く、「そのせつが怪しまれな」「つてんだけだね。

ただもしかすると、単純に掏るのが樂しいつてやつかもしれない。ともかくそれを、場所変えながら繰り返してこれだけの額集めたんだから、もうプロつて言つても通用するだろ。

「はいどうぞ。熱いから氣をつけてね?」

スープをよそり終えたナティの言葉を合図に、今度こいつと一緒に手が伸びる。

「どお? 美味しい?」

「ああ。明日があるから、おなかいっぺい食べられないのが、残念だね」

そう答えると、ナティが明るく笑つた。

「明日は明日で、」馳走にすればいいじゃない?」

あれならいつくらだつて掏れるもの、ちよつと多めに取ればすぐ

貯まるよ」

「言つてじゃないか。頼りにしてるよ」

昔にじこでたこりと、変わらぬ会話。

「どしたの？ なにが可笑しいの？」

あたしが苦笑したのに気付いて、こいつが不思議でついに訊いてきた。

「いやあ、けつぎよくあたしが、ここから離れられないなと思つて、学院はスラムに比べりや天国だけど、やつぱりほのぼうがいい。

「じゃあ、学院辞めちゃえば？ あたしはどうだつていいもん」「そうもないかないだろ？」

あたしとナティが学院へ入学したのには、それなりのわけがあつた。だからおいそれと、辞めるわけにやいかない。

「傭兵隊か。めんぢくせいな~」

「そう言いつつちゃんとAクラスにこるの、どこのどなただい？」

「シーモアが頑張るんだもん」

ちょっとほにかみながら笑つて、ナティがまたスープに口をつけた。

あたしも食べるほうに専念する。

なにせこの人数の上に、ほとどじが男子だ。うかうかしてると、あつとこつまに食つものがなくなつちまつ。

その時、呼び鈴が鳴つた。

「なんでえ。せつかくメシ食つてのよ」

当番のケインがしぶしぶ立ち上がり、玄関のまへへ行く。

「ほんな時間に誰だらうね？」

「わあ。まあおおかた、誰か戻ってきたんじやないか」

今日は家に泊まりとか言いながら、戻つてくるやつも時にはいるもんだ。

けどケインの言葉は、もつと意外だった。

「おい、どうする？ さつきのガキどもがまた来たぜ」

合言葉を言う前に、一応のぞき窓から確かめたら、部外者だったてことらしい。

「さつきのガキって……ルーフェイアとイマド？」

「名前はしらねえけど、金髪で太刀持つたとびつきりの美少女と、

その連れだよ」

「んじゃ間違いないね」

あいつら2人、追い返したのに懲りもなく、舞い戻つてきたりしい。

「ガルシィ、どうする？」

みんなが一斉にリーダーのガルシィを見た。

「まったく、お前に似てダチつてのも、懲りないやつらしいな。まあ放つとけ。そのうち諦めて帰るだろ？」

シーモア、ナティエス、それでいいな？」

「ああ」

「しょうがないもんね」

明日祭りだつてのに、部外者を入れておくわけにはいかない。あいつら2人には可哀想だけど、無視するしかないってやつだ。

「どうせすぐ諦めるや。で、早く食つちまおうぜ」

「うん」

じつ言つとこのときあたしとナティは、ルーフェイアがどれほど強情か、きつちり忘れきつてた。

I m a d

「開かない……ね」

「ああ」

ともかくこじこまで来たものの、シーモアたちのアジトへの扉は開きやうになかった。

力ギ、強引に開けてやるやうか。

思わずそんなこと思つちまつ。

けどルーフェイアのほうは律儀に、また呼び鈴を鳴らした。

何度か間を置きながらの5回目へりこで、さすがにドア越しに声が返つてくる。

「帰れ」

「その、ワインが……ケガをしたんですけど」

ぶつきらぼうな言葉にも負けず、こいつが必死に訴えたけど、返事はにべもなかつた。

「見え透いた嘘言つんじゃねえ。帰れ」

「嘘じやないです！ だつてワイン、こちらへ、戻つてない……ですよね？」

どうにかしなきやつて思いがあるんだが、こいつも引き下がらない。

「寄り道するから遅くなるつて、連絡あつたからな。

さ、帰つてくれ」

それつきり声は聞こえなくなつた。

「まるつきつ俺らにてつもり、ねえみてえだな」

「そうだね……」

ルーフェイアのやつが、困り果てた表情になる。

中にはちゃんと人がいる。その辺はルーフェイアのヤツだつて、十分気配を捉えてるはずだ。俺なんかは、誰がいるかまできつちつ分かるし。

ついでに中の連中の感情まで見事に伝わってくるから、向こうが何考えてる今まで筒抜けに近い。

「どうする、ルーフェイア。一旦戻つか?」

「こいつが黙つた。他のみんながやつてることと引き比べて、自分がどうするか考えこんでるらしい。」

ただ今回は珍しく、悩んでる時間が短かつた。

「 待つわ

「 そう言つと思つたぜ」

じつ言えば最初っから、こいつ来るだろ?と予想はしてた。なんせルーフェイアだ。

こいつは人のこととなると、諦めるつて言葉を知らない。

「んじゃこの辺で待つか?」

「この辺でつて……イマド、先に帰つてて。寒いの……嫌いでしょ

?」

座りこもつとした俺に、こいつがそう言つてきた。

「バカ言え。お前だけ置いて帰れつかよ。

だいいちしたことした日こや、お前の親父に向されつか、わからねえだろ」

なんにも言いやしなかつたけど、あの親父さんルーフェイアなんかあつたりしたら、間違いなく関係者皆殺しつてやつだ。

「それは…… そうだけど……」

さすが娘なだけあって、ここにも親のことはよく分かってるらしい。

「それに俺だつて、帰つてもすることねえしな。

てかお前こそ、そんな薄着で大丈夫なのか？」

「あ、うん、大丈夫。あたしのは冬用の戦闘服だから」

なるほど。

今まで見てて、ルーフェイアのやつはだいたいが寒さに強い。
そこへ戦闘集団だつて言つ実家??で使つ、戦闘服着てちや、 寒いなんてこたあないだろ？

「「めん…… つきあわせちやつて

「だからいいつて

いつものやりとりしながら、結局2人で座りこむ。
つて、ちょっと待てつ！

何を思つたのかルーフェイアのやつが、俺にくつついてきやがつた。

「なつ、じつ、おー!」

「……どうしたの?」

どうしたの、じゃねえだろ……。

けび「マジで」につ、何にも分かつてなかつた。

「このほつが、寒くないでしょ?」

「いや、やつやそうだけどよ……」

そう言つ問題じやないだらうが。

ただこいつ、やつこいつのはぢつかに落としてきてつからなあ。

今だつて頭のてつへんからつま先まで、全部まとめて「寒い」とい
けない「だけで埋まりきつてるし。
と、ぽつりとこいつがつぶやいた。

「思い出すな……」

「何がだ?」

珍しくこいつから、安心しきつた雰囲気が伝わつてくる。

いつも不安げにしているルーフェイア。

それが今は、ない。

「よくね、戦場にいて野宿の時とか、母さんこいつしてもうつたの。

あつたかくて好きだつたな」

「へえ……」

人一倍脆いこいつがどうして戦場で正氣でいられたのか、答えが
分かつた気がした。

「戦場、大っ嫌いだけど……学院来てからさみしかった……」

ルーフェイアの瞳から、一筋涙がこぼれる。

こんななタシュア先輩あたりが見た日には、さうと「甘ったれ」とかなんとか言つて突つ込むだろつ。

「うあえず」こつがいちばん望んでる通りに頭を撫でてやると、そのまま小さい子供みたいに口を開じまつた。

この状況で度胸あることに、眠くなつたらしい。

ま、いいか。

戦場育ちのせいで、寝られそつな時に寝ちまうだけかもしれねえし。

「なんかあつたら起こしてやるよ
「うん……」

言つが早いが、たちまち寝入つちまつた。あとまだれだけシーモアたちと根競べできるか、だ。

でも幸いこいつが ルーフェイアはかなり体温が高い くつ

ついてるお陰で、寒さは感じない。

ここの様子を見ながら、俺は待つことこつた。

それから多分、1時間くらいい過ぎた頃だ。

「イマドリ！ あんたがついててなにやつてんのやつー！」

「お、やつと開ける気になつたか

とつとつ根負けしたシーモアたちがドアを開けた。

「『開ける気になったか』じゃないよつ！」

ほらつ、ガルシイに許可もらつたから、早く入りな！！！」

「りょーかいつと」

ただそうは言つても、すぐには動けねえわけで。

「ルーフェイア、起きろつて」

まず寄りかかつてることつを起しそなことひや、俺も身動きで

きない。

つてあれ？

嘘みてえだけルーフェイアのヤツ、熟睡してやがる。

いつも気配だけで目を覚ますこいつがこれは、かなり珍しい。

「まさか、ルーフェイアってば寝ひきつてるの？」

「ああ。気持ち良さそうに熟睡してるな」

もつとも危険がせまりや、瞬時に目を覚まして太刀を構えるんだ

うけれど。

カジホカの連中は、違う意味に取つたらしい。

「おいつ、誰か来い！」

少し奥にいたリーダーの人が、慌てた調子で仲間を呼んでる。

「？ 何慌てんですか？」

「なにのんきなこと言つてるんだ！ ほりつ、お嬢ちゃん！」

「あ、ダメです、ンなことしたら……」

俺が言い終えるより早く、びくと身をすくませてルーフェイア
が目を覚ました。

その手が太刀を抜きかける。

「落ちつけ、ルーフェイア！ シーモアたちだ！」

「え……？ あ」

一瞬のタイムラグを置いて、ルーフェイアのやつが状況を理解し
た顔になった。

「おはよう、シーモア」

思わずそこにはいた全員が石化する。

「『おはよう』『ひねえだろ……』

「え？」

「こいつ珍しく熟睡しきつてたせいか、どうも寝ぼけてたらしい。

「えつと……？」

「ルーフェイア、なんでもないのねつ？！」

「え？ うん……」

血相変えてるシーモアたちと、ぼーっとしてるルーフェイアの対比がめちゃくちゃ笑えた。

「つたく何考えてんのさー」

ここはケンデイクじゃないんだ。この時期に外で寝てたりしたら、凍死するつてのー！」

「凍死……？ あつたかかったけど……？」

あ、それで慌ててたのか。

もつとも気温の割に、ここはぬくぬくしてたけど。

その上俺にくつついたりしたもんだから、ついそのまま眠り込んだつてところだわ。

「ああもう、つたくわかってんのかい！」

「分かつてねえつて」

ボケてるルーフェイアと言い、分かつてないシーモアとナティエスと言い、もう笑うしかない。

そこへゼロールさんに付き添われて、ワインが戻ってきた。

「あれっ、みんな廊下でなにしてんの？」

「あ、ワイン」

わけがわからないうて顔してるワインに、シーモアのやつが事情を説明する。

「それで入れずにいたら、この通りストライキしてくれたつてわけだ

「ストライキって……ねえちゃんたち、オイラのこと言わなかつた

のかい？」

マヌケだといわんばかりの顔をじこつがする。

「言つたぜ。でも信じてくれなくてな」

「マジ？」

「じゃなきや、こんなとこいるかよ」

はつきつ言つて、俺は「んな寒い場所より部屋の中がいい。

「んじゃもしかして、みんなが信じなかつたとか？」

「だからさう言つたば」

「ひつで～！」

ワインのヤツが素つ頓狂な声をあげた。

「つたく、ウルサイね。もう暗いってのに、カイ声で騒ぐんじゃないよ」

「そゆ問題じゃないだろ？！」

「だいたいオイラ」

「いつが事の顛末を話して、みんなの顔色が変わつた。

「そりや、ほんとなのか？」

「ホントだよ。だいじにこんなことドウン言つたつて、オイラちつとも得しないじゃん」

言しながらワインが、巻かれた包帯を見せる。

「じりやひどいね」

「でも、あんまし痛くないんだ。お医者さんもや、半当でがよかつたつて言つてたし。

「ねえちゃん、ありがと」

「ううん。よかつたね」

ルーフェイアのヤツは締め出されてたことも忘れて、にこにこ顔

だ。

「ともかく、中入りつよ。スープとかもまだ、ちゃんと残ってるか

」

へえ、ナティエスの手料理か。

「いつもルーフュニアと違つて、こいつの手はけつこつ上手い。
どちらにしても今晩は、手つ取り早く夕食にありつけそうだ。
つていう言葉、ジャスおばさんちの夕食どうなつたんだうな
……？」

Ruffer

シーモアたちのアジトに入れてもうれたのは、尋ねてから1時間ほどしてからだった。

「つたく呆れたもんだよ。」の寒空の下に座りこんで、ずっと待つてゐるなんざ」

「ほんとほんと。普通じゃ考えられない」

シーモアとナティエスが呆れ顔だ。

「その、あつたかかったから……」

「だからルーフェイア、さつきも言つたけどさ、」のじりじりや外に寝てたやつが、凍死することだってあるんだ」「でも……」

確かに気温は低かつたけど、冬の戦闘服だったのとイマドとくつついていたのとで、さほど寒さは感じなかつた。

むしろあつたかくて心地よくて、そのままつい眠つてしまつたと言つたほうが正しいだろ？

「ああもう、わかつてんのかい！」

「だから分かつてねえって」

見るとあたしが座らされてたソファの後ろで、イマドが可笑しくてたまらないという風だつた。

「こいつたとつちや、あんなこと朝メシ前なんだつての。だいいちお前らだつて、こいつの性格は知つてんだろ？」だったら最初つから開けてやれつて「だからって……」。

ともかくルーフェイア、冷えちゃったでしょう? これ食べて「ナティエスが湯気の立つたスープ」とお野菜と魚の身? が入つてゐる を、あたしたちに差出してくれた。

「あ、美味しい」

「ほんと? よかつた」

口をついた言葉に、彼女が嬉しそうになる。

「俺にもくれないかね?」

匂いに誘われたんだろう、後から来たゼロールさんもせがんだ。

「え~、どうしよ?」

「とびつきり可愛いお嬢ちゃん、そんないちわる言わないで、おじさんにも一杯、な?」

「やだもう、ルーフェイアの前でそんな」とこわれると、イヤミにしか聞こえないじゃない!」

褒められて何が嫌味なのか分からぬけど、それでもナティエス、まんざらでもないらしい。ゼロールさんにも、スープの入った器を差し出す。

「 お前、サラの花入れ忘れたる」

やつぱり一口食べたイマドが、なにかよく分からぬことを突つ込んだ。

「うるさいなあ、もう! 高いから入れなかつたのよ!」

「ベリルだけでも入れりや、もつむよい落ちつくな」

「もうやだ! イマドつてば男子のくせに、どうしてそつ料理細かいのよ!」

気が付いたときには、言い合ひが始まつてしまつていた。

当たり前だけれどこの変わつた光景に、ここの人たちもみんな呆

然としている。

「ナティ、とりあえずその話、あとじやダメかい？」
シーモアが仲裁に入る。

「え、あ、『めん』

「あとでもう一回、教えてやるつか？」

「イマド、あなたねえ！」

「イマドー！」

面白がって茶々を入れる彼に、あたしとナティエスの言葉が重な
つた。

「イマド、食べさせてもらつたのにそんなこと……聞つたらダメだ
よ……」

さつとナティエスだって、一生懸命作つたはずだ。
一瞬イマドと視線が合つ。
もしかして、怒つちやつただろうつか？

「 そうだな。ナティ、悪かった」
でもあたしの心配をよそに、イマドがあつさり頭を下げた。
「あ、そんな別に、謝つてもらわなくてもいいんだけど……」

よかつた。

2人が仲直りしてほつとする。
周囲の人たちもほつとしたんだろうか？ みんななんだか笑つて
いて、いい雰囲気になつていた。

「やれやれ。

それでルーフェイア、座りこんでまで何を言いに来たのさ」

「えつ？」
呆れて入れてくれただけだと思つていたから、この言葉は意外だ
つた。

「聞いて……くれるの？」
またみんなが笑う。

「つたぐ、あれだけのことしてくれちゃ、聞かないわけにいかない
だろ？」

「ほんと。ルーフェイアがまさか、あんなに強情だなんて思わなか
つた」

「ごめんなさい、さうこうつづもつじや……」

またあたし、あと先考えないで、みんなに迷惑をかけちゃつたみ
たいだ。

自分が情けなくて涙が出てくる。

「あ～、違う違う違うー。

「泣かないで？ ほら、だから向こうへ来たの？」

「えっと……」

「言わなきゃならなことはたくさんあるの、どれから話せばいいのか分からなかつた。

「えっと、だから……小さい子が殺され……」

「よつはその話、裏があるんじやねえかってことなんだ」

「イマジが口添えしてくれれ、よつやくまともな言葉になる。

「裏？ ビリをびりたたりかな話になるんだい」

「でも……」

「またやつせと回じで、信じてもりんなことかと細つと講じへり、また涙が出てくる。

「うあ！ ルーフニア、泣くんじやなこよ。

ともかくガルシイ呼んでくるから、ストップストップ」

「あ、あたし行つてくる」

慌てたシーモアをナティエスが止めて、彼女の姿が奥に消えた。ふつと部屋の中が静まり返る。そして……シーモアが口を開いた。

「ルーフニア

「なに……？」

「彼女が一呼吸だけおぐ。

「どうしてわざわざ、ここまで来たんだい？」

「え？

でも、友達だから……」

シーモアがあたしの瞳を覗き込んだ。

真剣な瞳。

「マジでそれだけなのかい？」

「それじゃ、ダメなの……？」

もしかしてあたし、いちばん最初を間違えてしまったんだろうか？
まっすぐシーモアがあたしを見る。

「ダメじゃないわ。 ありがと」

言葉を聞いた瞬間、胸が詰まって、あたしはまた泣き出しちま
つた。

そのあたしの頭を、シーモアが撫でる。

「あたしらみたいな連中にいるまでしてくれて……あんた、最高のダチだよ」

「うん、うん……だつて、だつて友達……」

「うん、分かつてる」

それ以上、シーモアはなにも言わなかつた。イマドもなにも言わない。

すじくすじく、静かで……。

「お待たせ」。

あれ？ シーモアつたら泣かしちやつたの？」

少し経つて、2人の男の人といつしょに戻つてきたナティエスが、開口いちばんそう言つた。

「ち、ちがうの。あたしが勝手に泣いちゃつて……」

ぐるりとナティエスが、あたしたちを見る。

「なんかよくわかんないけど、まあいいかな。

ルーフェイア、イマド、この2人がうちのリーダーとサブね」

「あの、初めてまして……ルーフェイア＝グレイスです……」

おそるおそる名乗る。

「イマド＝ザニースです。もうシーモアとナティエスから、聞いてるでしようけど」

イマドのほうは平然としたものだ。

「俺は……」

ゼロールさんも自己紹介しかけたけど、これは見事に無視されて

しまつ。

「俺がここにトップやつてる、ガルシィだ」

向こうのチームのトップ、力で攻めるタイプのダグさんと比べて、ガルシィさんは切れ者という感じだった。

黒い髪と浅黒い肌なのに、なぜか水色の瞳。体格も細身で、なんとなく猫科の猛獸を思わせる。

「話のさわりはナティエスから聞いた。細かい話は出来るか？」

あたしは困つてイマドを見た。

なにしろ「細かい」と言つてもほとんどは憶測で、証拠があるわけじゃない。

「申し訳ないですけど、ナティエスが言つた以上のことば、俺らもよく知らないんです。

はつきりわかつてるのは、ワインを襲つたのは向こうのチームじやないつてことくらいですね」

「間違いないのか？」

見透かすような鋭力を含んだ、ガルシィさんの言葉。

「間違いないです」

でもそれをものともせず、イマドはきつぱりと答えた。

「俺ら、あの時ダグさんと一緒にでしたし、その襲つてきた連中はどう見たつて中年でしたから。

あと詳しいことは、ゼロールさんがそこそこ知つてると思っていますけど」

「そう言われても、俺のほうも証拠はないんだが……」

「どうやつたら上手く信じてもらえるか考えている調子で、ゼロールさんもさつきの、『ホームレスの人人が別の犯人を見た』という話

を繰り返す。

「別に偏見を言つつもりはないが、ホームレスのオヤジさんが小銭欲しさいでつち上げたって可能性も、否定は出来ない。

ただあの怯えぶりからすると、多分本当じゃないかと思つんだ」

「だったらその話で、レーハーの濡れ衣は晴れたことになる。それとワインの件に関しては、向こうが関係ないのを認める。

ただそれ以前のことに関しては、向こうがやつたってのは否定出来ないな」

これだけの話を聞いても、ガルシィさんは冷静だった。

「向こうがやつてないのを証明できなければ、 ijutsu としとは許すわけにはいかない」

「そんな……」

「こじでは「疑わしきは罰せらる」 ところの原則が、通用しないのだとあたしは気付いた。

でも……。

本当にどちらも相手チームの子供を殺していないのなら、抗争はやるだけ無意味だ。

「ほんの2、3日でいい。祭りの延期は出来ないか?」

「ijutsu としてはする気はない。ただ、向こうの出方次第では考えてもいい」

ゼロールさんの懇願にも、ガルシィさんガ冷徹に言い放つ。
ともかく歩み寄る気配はなかった。
どうやつたら上手くいくのか、必死に考える。

「そうだ。」

「あの、ガルシィさん……。ダグさんと会つていただけませんか?」

「冗談を言つな」

「ルーフェイア、そいつはムチャつてもんぞ」

「もつ、ルーフェイアつたらおめでたいなあ」

もし直接話が出来れば、なにか変えられるかもしない。そう思つて言つた言葉に、ガルシィさんどころか、シーモアやナティエス

までが反対した。

「でも、会ってみれば……」

「会ってどうなる」

にべもない返事。

自分に力がないのが、悲しくてたまらなかつた。

「でも、でも、殺し合になんて……」

そんなの、いらない。

嫌と言つほど見た。あの戦場で。

誰も死にたいなんて思つてないのに、殺し合わなければいけない場所。

生き延びる唯一の方法が、人の命を絶つこと。

地獄よりもまだ、地獄に近い場所……。

「ルーフェイア、もう考へんな。お前のせいでそつなつたわけじゃ、ねえだろ」

しゃがみこんでしまつたあたしの頭を、今度はイマドが撫でた。そして彼が言つ。

あたしの、代わりに。

「ともかくガルシィさん、ゼロールさんのことおつほんの2、3日、延ばせませんか？」

ケリつけたい気持ちはわかりますけど、ここは戦場じゃない。今なんとしても相手を殺さなきや生きていけない そういう場所じゃないはずです

「それでもダメだ」

もう、どうするとも出来なかつた。

所詮部外者でしかないあたしたちじや、何も変えられない。

悔しくて哀しくて、また涙がこぼれた。

泣いてどうなるものじやないと分かっていても、泣かずにはいられない。

「どうして、どうして……」

「「めんよ、ルーフェイア」

シーモアとナティエスが、すまなそうに謝る。

その時、表のほうから誰かが騒ぐ声が聞こえた。

「そのつ、ガルシィは今、ちょっと人と会つて……」「かまわん」

え？

聞き覚えのある声に、驚いて顔を上げる。
イマドも気が付いたんだろう。半分確信したような声で訊いてきた。

「おい、今の」

「うん」

あの声の主を、あたしが間違えるはずもない。
少し待つてるとと思つたとおり、「その人」が入ってきた。

「父さん、ダグさんのご家族、もう大丈夫なの？」
訊くと父さんは、自信たっぷりにうなずいた。

「ううう」と、どうして母さんと似てるんだろう。
困った意味で、似た者夫婦だと思つ。

「ちょっと待て、『父さん』だと……？！」

そうすると君は、ディアスさんの娘なのか？」

「え？ じゃあガルシィさんも、父さんご存知なんですか？」

どうも父さん、このスラムじやよほどの有名人らしい。さつきのダグさんと、似たようなやり取りになる。

「ガルシィ、まさか『ディアス』って、この人あのディアスさんなのか？」

「うそ、信じらんない……」

しかもどういうわけか、シーモアとナティエスまでが驚いた顔になつた。

確かにこのアジト？へ簡単に入れてもらつてるんだから、この中に知り合いはいるんだろうけど……。

「あの、すみません、父さんとどういうお知り合いなんですか？」
きつと父さんに訊いても「まかされてしまつだらうから、思い切つてガルシィさんにあたしは訊ねた。

一瞬の間。

「俺たちのチームの、昔のリーダーだ」

「え？」

今聞いた言葉を、もう一度頭の中で繰り返す。

つまり父さんは昔、このチームのリーダーをやつて……なのに
もうひとつチームの、ダグさんの大先輩で……？
よく分からぬ。

「ガルシィ、話はもう聞いたな」

悩むあたしを無視して、父さんが話を切り出した。

「はい。もつとも、信じられませんけど」

「それはどうでもいい。

ともかく聞いたなら、これからレーーサのところへ来られるか？

この話、彼女も裏があると言つてはいる

その言葉を聞いた途端、ガルシィさんの表情が明らかに驚きへと
変わつた。

「あの人……？」

レーーサといふ名前には、あたしも聞き覚えがある。たしかさつ

き、ダグさんが落ち合つ場所に決めたお店 だ。
けどあたしが思つていたよつな、単純な名前と場所ではないらし
かった。

「クリアゾン ？」
よほど驚いたのか、ここの人たちが使つ言葉がスラングへと変わ
る。

「クリアゾン レニーサ」

父さんもそれに、同じスラングで答えた。こうなると共通語しか
知らないあたしには、断片的な単語しか聞き取れなくなる。

「イマド、分かる……？」

念話の能力が高い人だと、言葉がわからなくても意味を読み取れるのを思い出して、彼に訊いてみる。

「話が込み入つてて、なんだかわからんねえ」「そつか……」

ある程度の意味は分かっても背景が分からぬから、結局全体の意味は分からぬ、ということらしい。

こうなると、誰かに説明してもううしなさそうだった。だけど誰かに聞こうにも、父さんはもちろんシーモアもナティエスも、なんだか早口で話に加わってしまつていて。

「ま、ひとくぎつけば誰か教えてくれるだろ」「

「そうだね」

待つよりほかなさそうだった。

部屋の隅に座りこんで、あたしの知らない言葉を話していくみんなを、ぼんやりと眺める。

不思議な感じだった。

こういう風に相手の言葉が分からぬといつのは ほとんど初めての経験だ。

小さい頃から両親に連れられて世界各地を転々としていたおかげで、あたしが話せる言葉は多い。おもだつたものは全部読み書きできるし、通常は知られていないヴァサーナ語も、日常会話程度ならどうにかこなせる。

ほかにもシユマー内の公用語が古代ローマ語の変形だから、ロー

ム語と古代ローマ語の両方も出来た。

でもシーモアや父たちが使っているスラングは、単語の使い方さえ違っていて、ローティスティオ語が出来ても理解できない。よく知っているはずのみんなが、今だけ遠く見えた。

戦争って、いつからいつから始まるのかな。
ふと、やう思つ。

今あたしみたいに、どこかの誰かが何故か遠く見えて……相手の言っていることも考えていることも分からなくて、まるで魔物みたいに見えてしまうのかもしれない。

そうやつていろいろと思いをめぐらしているつまこ、ガルシィさんが立ち上がつた。

「どうやら、話がまとまつたみてえだな」

「うん」

あたしたちも立ち上がる。

ガルシィさんがこっちへと視線を向けた。

「レニー サ 2人」

「え?」

困つてイマドのほうを見る。

「今、なんて……?」

「一緒に来いってさ」

彼があつさりと通訳してくれた。今度は内容が単純だつたから、読み取れたんだろう。

ガルシィさんがはつとした顔になる。

「客がいるのに、つい仲間内の言葉になつてたみたいだな」

「いえ、あの、大丈夫ですから……」

慌ててそう答える。

だいいち、特に困つたわけでもない。

「それで、どこへ行かれるんですか?」

行き先が知りたくて、あたしはガルシィさんに尋ねた。イマドが隣で呆れた顔をする。

「『レニーサの店』だつて」

「そうなの?」

確かに会話の中には、何度もその名前が出てたけど……。

「ああそっか、すまねえ。まるつきりお前、分かんなかったんだもんな」

「いや、我々のミスだな」

ガルシィさんがそつ言つてくれて、さりげに補足してくれた。

「ディアスさんからの話じゃ、今回の話にウラがあるのは確実らしい。それもどうやら、俺たちの単なる抗争を超えたヤツだ。だからその店へ行つて、真相を聞かせてもらひ」

「はい！」

自分の声が、思わずはずむのが分かつた。

ガルシィさんは一言も「ダグさんと会ひ」とは言つてない。けど同じ場所へ足を向ければ、会わないわけにいかない。そして会えれば、なにか少しは変わるはずだ。

（カツコつけねえで、最初つから『余つ』つて言やあいいのによ）
(イマドー)

隣でこいつそり毒を吐く彼を、慌てて止める。こんなことでは、せつかぐの成り行きが台無しになつたら大変だ。

でも幸い、ほかの人には聞こえなかつたみたいだった。

「ディアスさんから訊いたがお前たち、どうせその店へ行くんだろう？ ついでに案内してやる」

「ありがとうございます」

また何か言いかけたイマドーは、でも視線が合つと黙つてくれて、あたしはガルシィさんに頭を下げた。

「ナティアスさんはどうするのです？」

「一緒に行かせてもいい？」

「そのままどこかへ行くんじゃないかと思つた父さんも、ついてくるみたいだった。

「店までは少し距離がある。急ぐぞ」

「ガルシィ、あたしたちも行つたらダメ？」

部屋を出かけたところで、ナティエスも同行を申し出た。

「来てどいつもするんだ」

「どうもしないけど、面白そうだし、ルーフェイアつたらあたしたちの友達だし」

にこにこと言い放つ。

それにしてもシーモアでわざ一皿置いてくるところのコーダーに、ナティエスはぜんぜん臆した様子がない。

人はみかけじや分からないつて言つけど。

ナティエスも意外と、そういうタイプちらしい。

「あたしたち追いかけてわざわざケンティクから来ててくれたんだもん、あたしたちがついていかなくちや」

「まあいいだろ」

一瞬苦笑めいたものを浮かべて、それでもガルシィさんは、ナティエスたちがついてくるのを許した。

「つたくガルシィ、ほんとナティにいや甘いんだからさ」

「え、そななの？」

「ああ、そうだよ」

そういうことなら納得がいく。

「どうでもいいだろ？。

それより、行くなら急げ

「あ、俺も行つていいか？」

ジャーナリストとしては逃したくないのか、ゼロールさんも立ち上がる。

ガルシィさんも、今度は断らなかつた。いちおうゼロールさんは、真相に近い情報を持つてゐる人だから、来てもらつたほうがいいと思つてゐるんだろう。

「行きたいやつはこれで全部だな？

あとダリード、一緒に来てくれ。それからケイン、留守を頼む

てきぱきと指示が下して、ガルシィさんがさつさと部屋を出でていつた。

あたしたちも慌てて後に続く。

少し後には、あたし、イマド、シーモア、ナティエス、ガルシィさん、ダリードさん（こここのサブリーダーのひとりだそうだ）、それにゼロールさんと父さんの総勢8人が、完全に暗くなつたスラムの道を歩いていた。

C a l e a n a

レードがあたしを連れてつたのは、確かに感じのいいバーだった。入り口はちょっと分かりにくいけど、中へ入つちやうと案外広いし落ちついてるし。

で、ここに放り出されてから、かれこれ2時間ちょっと。

つたぐ、いつまでかかるのよ。

いくら飲み代がタダつたって、退屈つたらありやしない。しようがないからこここの女主人と喋つて、時間つぶしてる。ちなみに彼女、薄い茶色の髪に透き通つた若葉色の瞳。しかもバーの女主人つてのがしつくりくる雰囲気。

「でさ、その偉いさんときたらね~」「うんうん

あたしの話つてどういうわけか、どこ行つてもウケるのよね。今もこの人、けつこう面白がつて聞いてるし。

「それにしても、その年で現役の傭兵なんて凄いじゃない?」「そんなことないわよ。うちじやあたりまえだもの」「だいたいがうちの一族の食いぶちは、これと研究成果の専売とで稼ぎだしてる。

けどこの人　名前はレーニー　サツ　言ひやう　ほんと話してて楽しい。

もつとも見かけはけつこう大人しそうだけど中身は……つてやつね。そんのは見てれば分かる。

ま、その手の人間ときたら、つちのサリーアにかなうのは、いな
いだらうけど。

「それにしても、レーダーたらいつたい誰を探してるので？」

「あたしの娘」

一瞬店の中が静まり返る。

「娘……？」

「言つとくけど、すつごに美少女なんだから」

再び沈黙。

いつものこととは言え、ビリしてあたしがこいつと、毎度周囲
が沈黙するのかしらね？

「ま、まあ、あなたが言つんだからやつなんだらうけど……」

「あ、信用してないでしょ。

ともかく嘘じやないわよ。あれを美少女といわすして
信じてくれないもんだから、思わず力が入っちゃう。

「わかった、わかったわ。

けど今日は、人探しが流行る日ね」

「はい？」

彼女が言つた言葉が一瞬飲み込めなくて、思考停止する。
ちょっと待つてね、ちゃんと考へるから……。

「もしかして他にも、誰か尋ね人してたわけ？」

「ディアスが って、久しづりに来た昔馴染みだけど、彼も女
子を捜してたわね。

会えたかどうかは分からぬけど
えーと、彼がわざわざ「こへ顔を出したって言つ」とは。

「ここって、ディアスのねぐらだつたんだ」

「そんなとこね。それよりあなた、彼を知つてゐるの？」

「知つてゐるもなにも。

「けどレニーサ、ディアスつてばいいでしょ」

とたんに店の中が、深夜の僻地みたいに静まり返る。

そのあときつかり一呼吸は間を空けて、彼女がようやく声を出した。

「そりや、悪いとは言わないけど。

じゃなくて、あなたディアスとどういう関係？」「レニーサの視線が、極地の雪原みたいに冷たい。

「うーん、また誤解されちゃつたかしらね？」

とりあえずそのまま放つとくのもなんだから、説明することに。

「あたしね、いちおうディアスのダメ女房」

彼女が田と口を丸くした。

次いで、やおらグラスを磨きはじめる。

「ああもう！ どうりで居着かないわけよねつ……」

「あたし、なんか悪いこと言つたかしらね？」

ともかく彼女、親の敵みみたいにグラスをこすつてる。

「……そんなに力入れたら、グラス割れるわよ？」

「2つ3つ割らなきや気が済まないわ！」

「もつたひないじゃない……」

せつかくいいグラスなのに。

「ともかくやめなさいって。割るんだつたらあたしが持つて帰るわ
「あなた、意外とみみつちいのね」
「みみつちいって……」

もつたいないものは、もつたいないと思つただけ。
というか、それより。

「よかつたら『ディアス、貸すわよ?』
「お金じゃあるまいし。
だいいちいくらあたしだつて、人様のものに手をつけるほど、あ
さましくないわよ
「あ、気兼ねしなくていいのよ~。
どうせあたしら、2人で好き勝手やってるんだもん」
「どうじう夫婦よ」
「これ、よく言われるけど……なんでかしらね?」

「ま、気にしないで」

それからあたし、ちょっと真剣になつて彼女に訊いた。

「ねえ、このスラムで近々、なにがあるの?」

実はここへ来ることになつたのは、『ディアスが言い出したから。あの子がスラムに来つて話を訊いたロシュマーの連中が人を用意しようとしてたんだけど、そこに珍しく横槍入れて、彼つてば來たのよね。

そりや、ルーフェイアが心配なのはわかる。
でもロシュマー連中の洗い出したこここの情報見て飛び出したから、それだけじゃないはず。

「ちびちゃんなたちの抗争があるのは、あたしも一応聞いてる。けど、それだけじゃないんでしょ？」

「いつとレーニーサが躊躇つた。

「ちよつと部外者に言つわけにはね……」

「お願い、教えて。

「うちの娘と、その友達が絡んでるのよ」

「娘さんが？」

一瞬だけ、レーニーサが間を開けた。

そしておもむろに口を開く。

「まあ、あたしもそれほど細かい」と、知つてゐわけじゃないのよね

「それでいいわ」

なんにも状況がわかんないのに比べれば、ずっとマシだろ？」
わかった、と言つてレーニーサが話し始める。

「祭りがあるのは知つてゐて言つたわよね。そうしたら　原因、

「聞いてる？」

「せへんせん」

「あ、ね、そんな呆れた顔しなくたつていいじゃない。

ともかくレーニーサつたらひとつ溜息ついてから、氣を取りなおしてみたいに話を続ける。

「双方のチームのちびちゃい子を、互にに殺つちやつたのが原因なのよね」

「ちびちゃい子って、まさかよちよち歩きの子？」

「もうちよつと大きいけど、どうももう歳くらこじやないかしら」

気が滅入るような話。

世の中何がイヤって、子供が死ぬのくらい嫌なものってないもの。

「 いじもシビアなのね

「 やうつけのかしら?

でももともと、いじのスマッシュやいじごはい法度だし、だい
いち普段はちゃんとしてるあの子たちがどうしてこんなことしたの
か、まるつきり見当つかないんだけど……

「 じゃあ何? なんの怨みか知らないけど、双方でいじ法度破つてや
りあつてるわけ? 」

「 やうなつけやうわね

なんてことかしら。

そりや怨みが嵩じてやつあいつへこいつのせ、古今東西あつきたり
なパターンだらけだぞ……。

「自分たちだけにしておけないのかしらね?」「そこ、あたしも腑に落ちないのよ。それでいろいろ、探つてみたんだけど……やっぱり裏がありそうなのよね」「どうやら、思つてたより状況が複雑みたい。

「ただあの子たち、もともと仲は良くないのよ。といふか、『悪い』つて言ったほうが正解ね」

「なるほどね……まんまと乗せられたんだ」

確かに最初からチーム同士が仲が悪かつた場合は、そこにいる人間はどうしたつて無条件で相手を嫌うようになる。で、みごとにそこを突かれた、つてことみたい。

「うううの、人間の性癖、なのかしらね?」

だいたいが戦争だつて、誤情報に尾鱗がついて、敵国の人間を人扱い出来なくなつちやうことも多いし。

しかもこれがどういうわけか、実際に戦争してる人間たちより銃後の人間に多く見られるから、世の中つて不思議。まあ、見えない分簡単に誤解できるんだろうけど。

「実言えばね、あの2つのチームつて昔はひとつだったのよ。だから余計何かと目の敵にする傾向があるの」

「跡目争い?」

「そう。

昔リーダーやつてたディアスが抜けた後、真つ二つになつたのよ」

「それで」

「これでようやく、ディアスがここへ来るはずだつた人間を差し置いて、自分で来た理由が分かつた。

「分裂自体はよくある話なの。だからディアスも、別に口出さなかつたんでしょうね。

「もつともここを出た人間には、そういう発言権はなくなつちやうんだけど」

レーニーが言つには、そういう暗黙の不文律があるんだとか。

「けどそうだとすると、ディアスがここへ来たからつて事態は変わんないような……？」

とはいえ以前のリーダーが来れば後輩？たちも少しは考えるだろうし、気が変わるかもしれないし。

なによりディアス、あれで案外、面倒見はいいし義理堅い方。

「気になつたんだ」

「多分、そうだと思つわ」

しん、と店の中が静まり返つた。

「ディアスがここでどんな暮らしをしてたのか、あたしも詳しくは知らなかつたりする。

「小さい頃にどこからかここへ流れついて子供を亡くした女性に捨てられて、けどその女性も抗争に巻き込まれて亡くなつて、その後はとある殺し専門のグループに入つて……。

知つてるのはそれだけ。

それから彼、このスラムを抜けて傭兵になつて、あたしはその頃出会つた。

「世の中つて、不公平ね」

「え？」

つぶやいた言葉に、ルーナが話を返してくれる。

「ハハ、なんとなく……そう思わない？」

「ひ細ひや
やうね、やうね」

また店内が静まり返つた。

何か分からぬ
せむせなし憤り

けど、納得だけはしたくない。

そうしたらなんか負けの気がするから。

かからぬかし
れさと笑顔で
一サは語しかけた

「ゴメン、なんか湿っぽくなっちゃって。もつかい飲み直そうか？」

一
そ
れ
は
上

だから……。
変えたければ、自分が動いて変えなきゃいけない。

「明日に乾杯、かしらね？」

Nat tie s

冬の寒空だつていつの間にあたしたす、なんだかぞろぞろ御一行様してたの。

なにしろレーニーサさんのお店つてば、アジトとちゅうど正反対。スラムつたつてそれなりの広さはあるから、けつこう歩かないと着かないし。

「 寒い」

「 もう、文句言わないの！ だいいちルーフェイアなんか、けろつとしてるじやない」

「 俺、寒いの嫌いなんだつての」

イマドつたらデカいくせに、なつさけないこと言つてゐる。だけどルーフェイアつたら、冗談半分の言葉を本気にしちやつて。

「 ねえ、大丈夫……？ あたしの上着、着る？」

「 へ？ いや、そこまで凍えちゃいねえって」

慌ててイマドが断るのが、すつじく笑えた。

「 『ルーフェイアの性格は知つてゐるだろ？』とか言つてたの、誰だつたつけね？」

こじぞとばつかりに、シーモアも突つ込むし

「 てめえらなあ……」

イマドつていつつも平然とした顔してゐるから、いじめるの面白いのよね。

けど、しつかり誤算があつたり。

「 あああ、ルーフェイア、そんな顔するなつて」

無関係なはずの彼女が、困って泣き出しそうになつたりやうんだもん。

「だつてイマド、ずっとあつたかいケンディクにいたんだし……」

「分かつた分かつた！ ほら、もう着くから」

シーモアが、急いで話題ふつて氣をそらせて。

「へんなどこに店構えてんな～」

「イマド、どこだか分かつての？」

「あの階段降りた地下だろ？」

「イマドつてわからん！」

ルーフェイアもびっくりしたみたいで、彼に尋ねた。

「よく、わかるね……」

「いや、あてずっぽい！」

「もつとよくわからん！」

ホントこいつ、何考えてるんだる。

分かつてるのは、ルーフェイアが絡むと見境なくなるつてことだ

けで、あとはさっぱりわからんやつ。

まあ、悪いヤツじゃないんだけせ……。

でもルーフェイアとイマド、せつかく並んでみても、カップルつて言つより兄妹。

ルーフェイアつたらあたしよりまだちひやいし、イマドつたら学年でもいちばん大きいし。

拳句に何かつて言うとルーフェイアの面倒見てるわけだから、ホントお兄ちゃん。

しかも、ルーフェイアがね。

彼女つてば何がどうなつてるのか、外見以上に中身が子供。頭は

滅法いいしワケわからんいくらい強い　イマドより上　のに、
それ以外はもう呆れるくらいなんにも知らないんだもん。
イマドが好きでいつもくつついてるけど、本人そういうの、自覚
してるかどうかめいつぱい怪しいし。

「お前たち、なにをじやれてるんだ。早く来い
遊んでるふうに見えたみたいで、ガルシイが呆れ顔であたしたち
を呼んだ。

ガルシイ、あたしたち、ルーフェイアのお父さん、あのジャーナ
リストの順で階段を降りる。
にしてもこの廊下、暗いなあ。

「お、無事帰つて來たか。

つておい、ガルシイ、ホントにおめえまで來たのか？」

あたしたちがお店に入つたら、なんだかダグがいて、思いつきり
驚いてるし。

「ディアスさんに呼ばれたからな」

うちのリーダーは、まるつきり平気な顔だけど。

でももつとびっくりしたの、ルーフェイアだつたり。

「か、母さん?...」

奥のほうからニーーサさんと一緒に出てきた女性をみて、半分硬
直してるので。

つて、この人があ母さんなのか……。

ルーフェイアとおんなじ金髪碧眼で、並んで立つたら誰が見たつ
て、母娘って言つはず。

「綺麗な人じやん」

「ルーフェイアとは、ちょっと雰囲気違うけどね」

あたしとシーモアが囁いてたら、お母さんってばすたすた、こつちまで来て。

「あら、いいことに来たわね～」

「ど、どうしてここにいるの……」

嬉しそうなお母さんと、呆然としてるルーフェイアとが、妙に面白かったたり。

「そりや、あんた探してたからに決まってるじゃない」

えーと。

なんでルーフェイア探すと、ここのお店に来るのかな？

なんか

ワケわからぬお母さん。

そうこうしてたら、またドアが開いて人が入ってきて。

「カレアナの姉さん、お嬢さんの居場所分かりました」

「うん、ここにいるものね」

「へ？」

入ってきたの、借金の取り立て屋してたレーベ。

しかもどういうわけかルーフェイアとイマド、この人知つてたみたい。

「あ、昼間の……」

「オヤジ、紅玉と借金との差額分、ここに返せっての」

「げ、なんで……」

拳句になんか、込み入った事情まであるみたいだし。

けど借金の取り立て屋に借金をせるなんて、ルーフェイアったら
凄いかも。

レニーさんとルーフェイアのお母さんなんて、もう爆笑しまく
つてゐる。

「レード、今日のあなたはよっぽど運がないみたいね。

初めまして、お一人さん。あたしはレニー、一応この主人よ

「あ、はい、初めまして。

えっと、ルーフェイア＝グレイスです

あ、ルーフェイアったら見惚れてる
けどその気持ち、分かるな。

レニーさんって薄い茶色の髪に透き通つた薄紫の瞳で、しかも
独特の雰囲氣あるし。

「確かにこの子、あなたの娘ね。似てるもの」

「そうよ~

ね？ 言つたとおり、どうから見ても可愛いでしょ？

おばさん、それ親バカ じゃないんだっけ、ルーフェイアの場
合は。

もつとも言われてる彼女のほうは、やたらイヤそうな顔してたり。

「母さん、そういうわけの分からないことをいつの、やめてよ……」

「なによそれ

まるで母娘漫才。

で、延々とそのまま続きそうな氣配で、レニーさんが笑いなが
ら出てきて遮つて。

「それにしても驚いた。昼間のこの子が、ディアスの娘だったなんて」

「父を、知ってるんですか……？」

ルーフェイアが尋ねる。

まあ彼女のお父さん、このスラムじゃ超有名人らしいんだけど。

「あたしは彼が、ここにいたころから知ってるの。

けどまさか結婚して、娘まで生まれてるなんて思わなかつたわね」

同感。

「親だ」つて来たから違和感感じなかつたけど、ルーフェイアのお父さんつてば独りで歩いてたら、気ままにやつてる独身にしか見えないもん。

「ま、ディアスだもん」

しかもおばさん、意味不明 だけど妙に納得 のこと言うし。ルーフェイアの両親つて好き勝手やってるみたいだけど、案外これで上手くいってるのかも。

「そうね。らしさといえぱらしさ」
「でしょ。
そうやつ、ディアス、どだった？ センチも書いたけど、よかつたでしょ~」

つておばさん、なんてこと書つのよ……。
これじゃルーフェイアが頭抱えるのも、分からうつてもの。
もつとも当人、なんの話かは判つてないんだけど。
ただこのやり取りが、どうしようもないのは分かつてゐみたいで、
お父さんのほうを振り向いて。

「父さん、何か言つて……」
「何が困る?」
「……」

お母さん以上にすゞりお父さんかも。
世の中じつこう両親は、あんまり多くないだらうな。

「あなた、大変なご両親持つたみたいね」
「はい、たぶん……」
レニー・サさんの言葉に、半分諦めた顔でルーフェイアつたら答えてるし。
気持ち、分かるけど。

「でも、ディアスにガルシイ君にダグ君、まとめて揃つたんだから
たいした話だわ。
これなら話も進むでしょうね」

「あの、それなんですか?……」

「そういえばって顔で、ルーフェイアが訊いて。

「父ちゃんがダグさんの先輩で、ガルシィちゃんのチームの昔のリーダー……なんですね?」

「そうじつになるとわね」

きわどい質問に、さすがのレーーカさんも言葉を濁す。でも自分の親のことだけに、ルーフェイアったらすげえ嫌になるみたいで。

「ねえ父さん、両方にいたことあるの?……?」

ああ、いきなりずばつと言つかけやつー。

さすがのこれには、みんなで思わず沈黙。

前のルーフェイアのお父さんじいわが、レーーカさんまで、こわばつた表情になつちやつて。

「その、後じや駄目かしら……」

そう言つのが精一杯。

「あの、すみません、あたしもしかして悪いこと?……?」

あ。

様子に気がついたルーフェイアが、いつもの中の平謝りモードに入っちゃつた。

「じめんなさい、じめんなさいー」

いひなると、この後はパターンひとつなんだよね。

まあ、イメージこるからいいんだねび。

「わつ、泣くな泣くな」

「なにもあなたが泣かなくても……」

あ～あ、やつぱり泣こちやつた。

よく分かつてないレーナーちゃんや向こうのコーダーとかが、慌てて慰めてるけど、そのままひで泣きやむルーフェイアじゃなし。

「これでほかに誰もいなかつたら、あたしの出番なんだけれど。けど保護者のイマドいのから、いいよね。なんて思つてたら……。」

「やれやれ、相変わらずね？」

「言ひながら出てきたの、ルーフェイアのお母さん。そういうえばホ

ントの保護者、今日は出たんだつた。

「気にしそぎなのよ」

「うわあ、ルーフェイアったら！」

「小さい子みたいに抱つこむちやつて……。ナビ、すいへ幸せやう。

「うん」

返事して彼女、泣くのやめちやう。

「どうみても、すつじこ甘えつ子。でも……羨ましいかな？」

と、おばさんふつとこつち見て。

「ディアス、この子お願いね」

「言つが早いがルーフェイア預けたと思つたら、今度はこつちへ来たの。」

「えーと、ナティエスちゃん……だったかしら?」

「え、あ、はい」

ルーフュイアから聞いてるらしいへ、おばさんあたしの名前知つてた。

「いつもありがとね、うちの子の面倒、見てくれて」

「いえ、そんな……あ」

こきなつおばさんに、頭撫でられちゃつた。

でも、嬉しいな。

あたしもお母さん」「いつしもいつの、好きだったから。

「いい子ね」

「えへ」

ルーフュイアのおばさんってなんとなく、「お母さん」の雰囲気あるから、あたしもつい甘えてたり。

「今度みんなで、どつか遊びに行きましょ。

で、結局何がどうこうわけで、ここに勢揃いしたわけ?」

ぐるっと回つてようやく話が本題へ戻つて。けどなにしろ話が複雑だから、あたしたちみんなで顔見合せるばっかりだった。

だつて、いつたいどこから誰が話せばいいんだろ……?

「やあねえ。まさか、誰も概要分かつてないの?」

「そんなことないわよー。」

おばさんの茶々に、向こうでお父さんのお膝に抱つこ(ーー)されてたルーフュイアが、珍しく強い調子で抗議して。

「だから、子供たちが殺されちゃった話で……」

「やつぱりね」

確かルーフィアのお母さんって、このスクムの出雲じやなかつたはずだけど、話はだいたい訊いてるみたい。

まあ、レーナさんあたりが話してくれたんだらうなだ。

「こちばんの事情通はゼロール、あなたがしら?

とりあえずもう一回、整理して話してけりうだい」

言葉は穏やかだけど、殆ど命令みたいなレーナさんの言いつかれてあのジャーナリストが説明はじめて。

「話すつて言つてもなあ。わつを両方に言つたばっかだし。まあ要するに、チビちゃんたちが殺されたのは、『仕組まれたんじやないかと思つてね』

それからあたしたちこいつた、ホームレスが「中年の男が子供を殺した」って話をすむ。

「とはいえ、証拠がなくてなあ……」

「やうなよね。

証拠がない以上、このジャーナリストの狂言つてヤンも否定できません。

「ナビをつみると、俺らんといのノアを殺したのは、いつたい誰なんだ?

ガルシイ、お前りじやねえだらうな

「だからやつてないと、前から言つてゐだらう

なにしろ何度もあつたやつ取りうちこから、つかのリーダーが撫然とした調子で答えて。

そこヘルーフュニアが、おずおず口を挟んだ。

「あの……その子は分かりませんけど、ワインを襲った人のはあたし、武器とかなら詳しいこと、覚えてます……」

「ほんとなの？」

レニーさんがびっくりして訊き返すと、ルーフュニアしつかりうなずいた。

ひとつ深呼吸して、あの時のことを思い出すみたいにしながら彼女、話し出す

「武器は短剣でしたけど、太刀筋は訓練されたものでした。それも二年ほど前に、ローテステイオに吸収された西の小国、ハニア独特のものです。ですから襲ってきた人たちは少なくとも、こちらや向こうのチームとは無関係だと思います。

それに死んだ仲間の遺体を、高位の炎魔法で焼き尽くした仲間がいました。この辺りから考えても、どこかで訓練を受けたプロか、それに該当する人間だと思います。

もちろんどちらかが、そういう人を雇つたなら話は別でしょうけど……」

えーと。

なんかルーフェイア、凄すぎ。

「……お前、こーゆことになると鋭いのな」
イマドも（と言つつか多分、ここにいる人全部）同じこと思つたみたいで、そんなこと言つし。

「え？ でもこいつじゃないと、いやつと言つ時に生き延びられないし……」

見かけとはうらはらに、ルーフェイアってば戦闘向きなの、改めて思い知つちやう。

どこでどう訓練受けたかわからんないんだけど、彼女ってば同学年のAクラスなんか豪快に引き離して、上級傭兵並の強さだし。

もつとも彼女のお父さんってばあたしさえ名前知つてるティアスさんだつたし、お母さんもなんか軍事関係者らしいから、環境なんか？

「ハニアの連中……？」

そうすると、絡んでるのは「マンシオ・ファミリー」かしらね「ルーフェイアの一言から、レニーサさん何か思い当たったみたい。

「何があるのか？」

「ちらつと聞いただけなんだけど、ハニアの元軍人が、まとめて雇われたらしいの。

で、その雇い主がエマンシオ・ファミリーっていう話なのよ

さすがレニーさん……。

この人に訊けば大抵のことは分かるって有名だけど、ホントに情報通。

「ここで仕入れるのかなあ？」
素性は知らないわけじゃないけど、それにしたっていろいろ知りすぎ。

「何か証拠はあるのか？」

「ごめんなさい。それこそ噂だけで、なんの証拠もないのよ。
だいいち向こうの連中だって一応プロだから、そう簡単に尻尾は出さないわ」

「そりゃそうよね。

そう簡単にシッポ出すようだったら、このスラムじゃ生きていけないもん。

「あの、すみません。その『エマンシオ・ファミリー』って……？」

「あ、いけない。

あたしたちはここ育ちだから納得してたけど、余所者のルーフェイアたちにはこの話、なんだかわかるわけないじゃない。

「ちゃんと説明すると、長くなっちゃうんだけど……」

とりあえずあたし言いかけたけど、やつぱりそこで詰まっちゃつて。

あたしも今まで「そこそこが本拠地だけど、もともとスラムの生まれじゃないから、『完結に説明しろ』って言われると難しいのよね。けどどうもつか悩んでたら、ガルシイが代わりに説明してくれたの。

「このスラムのグループは、おおむね3つに分かれる。

ひとつは俺たちみたいな、若い人間のグループ。これはいちばん人数もグループの数も多い。

それから昔からここに根を張ってる、大人たちのグループ。こつちは数はそこそこだが、全体で統制が取れてるし訓練もされてる。そしてもうひとつが、『ファミリー』をグループの後ろにくつづける連中だ」

最後のファミリーの説明で、ガルシイってば露骨に蔑む調子。

「どこがどう、違うんですか……？」

だけどまだいまいちピンと来ないみたいで、ルーフェイアつたら思案顔だし。

「ファミリーって言つのは、新参者なのよ。

大戦のあとからここへ入りこんできた連中でね、当然ここいらの不文律なんて無視。やりたい放題でこの界隈の店からお金を巻き上げたり、住人を脅したり殺したりしてるわ」

補足説明するレーニーサさんも、見下した表情。

まあここに住む人間なら、誰だつてそうするだらうけど。

「なんだってそんな連中、好きにさせてるんです?」
「イマド、あんたいきなりそれ訊くかい
でもシーモアの言つとおり、度胸あるう。

「いろいろの音もじやねえんだ。説明してもうわなきや、何もわか
んねえだら」
「そりやせうだな?」
「それにしたつて普通、いつは説かないよな?」
……

「あ、イマドの言つことも、理あるね。
「なんでだよ?」
シーモアの説明に、またイマドしたら突つ込む。
けでこいつになると、全部話すこと納得しないかなあ?
「いいわ、あたしから説明するか?」
「どうせボウヤたちだけじゃなくて、カレアナも訊きたいんでしょう」
「あら、よく分かったわねえ」
ルーフィアのお母さんたら、妙に嬉そ。

けで、LJのお母さんも不思議。いい加減なのに、妙に隙がなくつ

て。

まあ娘のルーフェイアもなにをどうやったのか滅法強かつたりだから、納得といえば納得なんだけ……。

「ファミリーが新参者だつていつのは、やつを聞いたわよね？」

「あ、はい」

「ええ」

お父さんの膝に抱っこ（…）されながら、でもルーフェイア、ちゃんと話は聞いてたみたい。レニーサさんの質問に、イマドと一緒に返事してるもん。

「その連中がね、ここへ足がかり掴むのにサツを利用したのよ」「利用……？」

イマドとお母さんはピコンときたみたいだけど、ルーフェイアの方は首をかしげてる。

それにしておどりして彼女、ここまでピュアなのかなあ？

あの強さと比べると、ものすごくアンバランス。それになにより、すぐ泣こちやうし。まあ戦つてる最中は、絶対泣いたりしないんだけど。

「そうね、お嬢ちゃんたちには分かりづらいかしら？

つまりはね……」

レニーサさんが、あたしたちスラムの人間には当たり前のことを話し始めて。

当然といえば当然なんだけど、スラムの住人は昔つから、警察とは相性がよくないの。

けど向こうが本気でかかってくるのは、何かあった時だけ。普段

スラムの中での話には、外へ被害が及ばない限り見て見ぬふり。
だからこのスラム、昔から犯罪集団の本拠地になつてゐるよね。

いいか悪いかは、よくわからんないけど。

「ただね、だからこそみんな　ここじゃクリアゾンって呼ぶんだ
けど、ともかくこを大事にしてきたわけ」

そういう

他所へ行けば無法者の集団だけど、「クリアゾン」のおじさんた
ち、このスラムの住人にとっては頼れる存在だもん。

「悪さするやつがいれば捕まえるし、サツが攻めてくれば食いとめ
てくれる。クスリも売っちゃいるけど、小さい子供には渡さないわ。
それにいくらかのお金払つて頼んどけば、へんな客が来ても追い
払つてくれるしね」

これもユーニーサさんの言つとおり。

あのおじさんたちにちゃんと頼んでおけば、女人人がひとりでも
お店切り盛りできるもん。ほかにもどうしようもないトラブルあつ
たときとかも、きつちり代わりにカタつけてくれるし。

しかも別に報酬はナシ。

強いて言えばこここの不文律を守ることと、何か頼まれた時に引き
受けること……かな？

だから案外このスラムつて安全だし、あのおじさんたちもここに
いる限りはチクられるなんてこと、ないし。

「ただその分、クリアゾンはサツとは最悪に相性が悪いの。田の敵にされてるって言つてもいいかしら。

で、そこへ新参者のファミリー連中が、つけこんできたのよ」

「つけこんだ……？」

あらり。

ルーフェニアったら、まだ話が見えないみたい。

「モ。つけこまれたの。

ファミリー連中が、警察と結託しあつたのよ」

「そんなん……！」

あ、やつと通じた。

「抜け田ねえなー。まあこの国、サツも軍もたるんがらなあ
イマダ……。

確かに言つてゐるとはウソじやないけど、それを堂々と言つちゃ
うんだから、どうこいつ神経してんんだろ？

この國太さ、あのミル 今はアヴァンに帰つてる といつて勝
負かも。

「う

「でも、警察つて……普通は取り締まるほうなの……」

「だから賄賂さ。そのファミリーとやらがサツに金ばら撒いて、何
やつても平氣なようこじこまつたんだよ。

なにせこの國ときたら、軍のヤツもサツの連中も、空つケツでび
ーぴー言つてゐるからな。はした金だつて、簡単にまるめこまれちま

「う

……

ダグさんの説明に、よっぽどびっくりしたみたいでルーフェイア、黙つちや「ハ」。

「でもそりあると、なんだつて連中が、ガキ殺したりしたんですかね？」

「そこなのよね……」

これにはみんなで思案顔。

だつてファミリーの連中が狙うとしたら、普通はクリアゾンの関係者。なのにこくら凶悪（笑）つて言えども、ひとつ下にあたるあしたたちのところ狙うなんて、なんか辻褄あわない。

「俺らをぶつけ合つて、潰すのが目的じゃねえか？」

自分で言つのもなんだが、俺らとガルシィのチームはクリアゾンを除きや、ここじや最強だ。

俺らがいなくなりや、あとは雑魚だけつてことになる」

「えへ？」

ダグの言葉に、思わずそんなこと言つりやつたり。けどそれ思つたの、あたしだけじやなかつたみたい。

「潰して……ぶつかる？」

「ティアスの言つ通りよねえ。クリアゾンの方を潰すんならともかく、悪いけどあなたたちを、そこまでして潰す必要があるとは思えないわ」

「だよね。

なんやかんや言つたつてあたしたち、所詮はただの不良集団。

そりや強盗とかクスリはやらないから、その辺のグループよりはマシだけど、筋金入り（？）のクリアゾンのおじさんたちとじや、やつぱり違うもん。

「姐御、そこまで血わなくたって」

「事実だろ？？」

ダグのぼやきにうちのガルシィ、きつちり突っ込み入れるし。

「まだウラがあるんですかね？」

「可能性はあるわね。ここじゃなんでもアリだもの」

イメージの言葉をレーニーサさんが肯定して。

「やれやれ、ヤツらをとつ捕まえて口でも割らせりや、どつにかなるんだろうけどな」

「どこまで行つても頭の回転が鈍いやつだな。

仮に捕まえられたとしても、連中が口を割るわけないだろ？」

ガルシイつてば、突っ込み鋭い鋭い

「ンなもん、やつてみなきやわかんねえだろ」

「それで失敗でもしたらどうする？ 今度はこの程度の騒ぎじや済まないぞ」

ダグの言い分に、うちのリーダーつたり」とく切り返すし。
だけど面白がって見てたら、ルーフュニアのお母さんがとんでもないこと言こ出したの。

「確實に口を割らせる方法なら、あるけど?」
それにしても悪戯っぽい笑顔でそう言つた人、とても娘がいる
よつには見えないなあ。

「本当に?」

「うちの人間ももそつだけど、連中の口の堅さ半端じゃなこわよ
「大丈夫、喋らせる必要なんてなこもの」

「これには尋ねたレーーサさんも合わせて、みんなで顔を見合わせ
ちゃつて。
「どうやつてだろ?」

「おつダンナさんと娘のルーフュニアと、あどどつこつわなか
イマドは意味がわかつてゐみたいだけど……。」

「よく分からぬわ。ちやんと説明してもううべる?」

「もちろん」

それからちよつとだけルーフュニアのお母さん、なんとも言えな
い表情で話しつぶして。

「あたし、念話できるのよ。

だからそれ使えば、相手がだんまりでも、それなりに読めるわ

「それつて……」

とんでもない言葉に、思わずみんな一歩引いたり。

「まさか、今も……?」

「全部じゃないけどね」

おばさんだが、せりふと答える。

「でもほら、街中で他人のお喋りが聞こえたり、するでしょ？ あたしたちことっては、そんなものなのよ。

だから集中しないと分からなしし、聞こえても背景知らないから、意味がないの」

「そりなんだ……」

そゆのつて、なんでもかんでも分かっちゃうのかと思つてたけど、ちょっと違うみたい。

「そういう家系があるとは、聞いたことあつたけど……」

「まあねー、うちの家系、おかしいから」

言つてルーフェイアのお母さん、けりけり笑つ。

「確かにあなた見ると、おかしな家系つてのは納得出来るわね

「ひどいわね」

「あらそうでしょ？」

けどそんな反則技が本当にあるなら、手がないこともないわ

レーニーさん、すじこかも。

あたしたちが戸惑つてる間に、あつたり順応しちやつてるもん。見かけによらず修羅場くぐつてるつて聞いたことあるけど、ホントだつたのかな？

なんて思つてゐるのに、レーニーさんがちょっとだけ真剣な表情になつたの。

「Hマンシオ・ファミリーに繋がるヤンなら、心当たりがあるのよ

「 姐さん、マジでなんでも知つてますね

ダグじゃないけど、ほんとほんと。

今度どこから情報仕入れてるのか、教えてもらひつかな？

「半分商売だもの。

まあそれはともかく、最近格安のクスリばら撒かれてる話は、知つてゐる?」

「レニーサさんの言葉に、みんなが一斉にうなずいて。

当たり前つて言えれば当たり前だけど、クスリつて値段が決まつてゐる。なのにこゝんとこそれ無視して、激安で売りさばく連中がいるつて話だつた。

で、大騒ぎになつてクリアゾンのおじさんたちが、血眼になつて探してゐるんだけど、なんかよく分かんないつて言つた。

「もしかして、そのクスリが?」

あたしたちの間にレニーサさん、ちょっとだけ嘲つて。

「H・マンシオ・ファミリーが、最近ものすごい量を買い付けて運び込んではるは、確かなのよ。

で、それと同じ頃から出回つた、格安のクスリ。おかしくない?」「あ……」

この町へ入つてくるクスリの量は、ツテのある人ならだいたい分かる。だから出回る量も、見当がつく。

それが急に増えてて、しかも買い付けた連中が分かつてるとした

ら……。

「でも、現場見たやつはいなって聞いてますけど？ 証拠もないし」

「それなんだけどね」

何か知ってるらしくてレーナーさん、ちょっとだけ嘲つて。

「どうもそのばら撒いてる人間、子供らしいのよ。エマンシオ・フアミリーが雇つて、どこからか連れてきてるらしいの」
聞いた瞬間、これまで黙つてたあのジャーナリストが、はっと顔を上げた。

「どうやらゼロール、あなた何か知ってるみたいね」「見たことはないんだがな」

それから、この人がかいつまんで説明してくれて。

「俺は外のスラムも取材してるんだが、そこで話を聞いたんだ。最近こっちのスラムの入り口で、クスリを売るバイトがあるらしい。けつこう実入りがいいえ、上手くやればちゅうまかせると、話してくれた子は言つてた」

「なるほどね……」

思わず納得。

このスラムでも入り口のほうは、けつこう人の出入りが多いの。役人街の不良なんかも来て、店で遊んだりしてる。だから他所から人が来てても、分かんなかつたり。

しかも外のスラムの子は、元からけつこう来てるから、よけいに分からぬし。

「でも、なんだって誰もチクらないだか？」
シーモアが不思議そうに言つて。

「格安だからでしょうね。そんないい売り物、ijiijiや秘密にしておくものでしょ」

「あ、そつか……」

チクつたらもぢりん、クリアゾンのおじさんたちがすつ飛んでく
わけで。でもヤク中の人は、ちょっとでも多くクスリが欲しいんだ
から、格安のクスリが消えたら困る。
だから誰もチクらなかつた、つてことみたい。

「ともかく、その子供たちが売つてる麻薬の出所は、エマンシオ・
ファミリーだと思つよね」

「じゃあ、その子を連れれば、何か分かるつてわけだ
がぜんみんな張り切つちゃつて。

ただあたしはなんか、イマイチ張り切れなかつたり。

「でも、どうやつて巡るの？
上手くその子が見つかつたつて、もともとはファミリーと無関係
なんでしょう？」
みんなに訊いてみたり。

「どうにかして、追加を取りに行かせる……とか？」
「どうだろうな。売り切りだつたら、それはないぞ」
「あ、そつか……」

いい手が思い浮かばない。
そのとき、イマドが言つたの。

「思つんだけどよ、そのガキ、売り上げはせつたい持つてくさじゅ

ねえか？」

あつと思う。

クスリもらつて商売して、そこから小遣いもらつてるわけだから、
売り上げを持つてかないワケがない。もしネコババでもしようもん
なら、命がないし。

「追加を取りに行けばよし、行かなくても尾行すれば、ある程度の
事は分かるな」

「だよね」

だいたい話がまとまつてくる。
けど……。

「誰が行くの？」
訊いてみたの。

そういうクスリ売りじや、見張りがいるかもしれないし。それに
よっぽど上手に駆け引きしなくちゃだから、ちょっとやそつとじや
ムリだらうじ。

だけどあしたちの仲間でそういうのができそうな人間、みんな
顔割れちゃつてる。

でもそのとき。

「イマド、あなた行きなさいよ」

あたしを含めてみんなで悩んでたら、ルーフェイアのお母さんが
いきなりそう言ったの。

「げ、なんです」

「あなた、そーゆーの出来るでしょ。しげしげくれるのはナシよ」「なんの話かな？」

なんかよくわかんないけど、すうじこに憮然とした表情して

る。

「同類の目が、誤魔化せるわけないでしょ」

「わかりましたよ、行きますつて」

「うーん、謎。おばさん「同類」って言つてるけど、でもおばさんと同類にされるつて、なんかすつこくイヤかもだし。別におばさんが悪い人とか言わないし、すつこい美人だけど、なんか微妙にイヤ。

でもイマドが囮してくれるみたいだから、いいかな

「ちょっとカレアナ、いくらなんでもスラムと無関係な子を巻き込むのは……」

「どの子ならいいとかつて」と、あたしはないとと思うわ」

レニーちゃんの言葉に、ずばりとお母さん、切り返して。

「それに心配だつたら、周りにこつそり人を置いとけばいいでしょ。もつとも彼もシエラ学院の学年次席だから、よっぽどじやなきやどうつてことないわよ」

「シエラ学院……？！」

あ、そう言えばここの人たち、イマドとかルーフェイアの素性は、知らないんだつけ。

「まあかシーモア、お前より上なのか?」

「悔しいけどね」

ガルシィに訊かれて、シーモアが答えて。
でもほんと、イマドリサボつてくせにじつかり次席なのよね。
シーモアも頑張つてるしスジもいいと思うんだけど、差が歴然とし
てて、どうしても追いつけないんだもん。

「そうは見えねえけどなあ」

「ほつとこでぐだやこ」

わすがにこいつはわねちやうひ、イマドリもくつとカチンと来るみ
たい。

あたしも今度、じつてみよつかな?

「だけど次席つてことせ、まだその上がこるんだもん。学院つて
のはつくづく、とんでもなことこりうだな」

ダグさんが、妙な事で感心して。

「けじょ、その首席つてのは誰なんだ? お前よつてシニヤつなの
か?」

「この言葉にあたしとシーモアとイマドリ、思わず顔を見合わせちゃ
つた。」

「つちの学年の首席は……」「
みんなで指差してみる。

「マジかよ」

「ありえん」

ダグだけじゃなくて、つちのコーダーまでみんな舌聴。でも、眞

持ちは分かる。

だつて指差した先つたら、イマドよりずっと小柄で華奢な、きよ
とんとした顔のルーフェイア。

それも、お父さんのお膝の上で。

「あの、どうか……なさつたんですか?」「
世の中つてのは、やつぱどうかしてるぜ」

今度ばかりはダグの言葉に、あたしも大賛成だったの。

I m a d

「やれやれ、今晚は徹夜か?」

「どうだろ……」

裏通りで座りこみながら、俺らは田端でのヤツを待つてた。ゼロールさんの話じゃ、この辺に例のファミリーとやらが絡んでる、ヤク売りのガキがよく来るらしい。

ただ、毎晩じゃないってのがなあ。

運が悪けりや、寒い思いしただけ損つてハメになる。

もつとも2・3日に1回は顔を見せるつていうから、そう長期戦にはなりず元に済みそうだった。

にしてもさつきといい今といい、どうも今夜は寒空に座りこむ機会に事欠かない。

しかも言い出しつペのルーフュイアのお袋さんときたら、親父さんといっしょに、ちやつちやと消えちまいやがった。

「寒く……ないよね?」

無邪気に身体をくつつけながら、ルーフュイアのやつが訊いてくる。

「寒くねえ寒くねえ」

どうもこいつ、「抱き癖」がついてるらし。

赤ん坊が母親に抱かれると安心して泣きやむのと一緒にくつついてるのをやけに好む。さつきも何気にお袋さんに抱かれてたり、親父さんの膝の上にいる始末だ。

しかもその調子で俺にまでくつついてくるわけだから、かなりヤ

「　　」

そりやまあ、悪かねえけど。

どつちこしてもこいつがお子様体型で、よかつたつてやつだらう。

とりあえず妙に嬉しそうなルーフェイアはおいといて、周囲の気配を探る。

通りは夜中とは思えないほど、人が出てやがつた。しかもその大半が、俺らみたいなガキだ。

大方は俗に言うストリートキッズ、つまり宿無しだ。

あとは多分、家はあるけど悪せしてる不良たちか。

たむろつてはしゃいでるやつらもこねし、ただ無言で座りこんでるやつらもいる。

中には、虚ろな眼のヤツまでいやがつた。
そのストリートにたびたび大人が紛れ込んで来ちゃ、適当な誰か女子だけってわけじゃない　に札ビラ渡して連れてくのも、あたりまえみたいに繰り返される。

「まつたく、誉めていいんだかどうだか

「そうだね……」

俺がなんとなく言つたこと、意外にもルーフェイアは反論しなかつた。

「　　」

外見と性格とでつい忘れちまつけど、こいつはなにせ戦場育ちだ。

そもそも市街戦なんかまで経験して来てるから、かなり修羅場を見てるんだろう。

「やつぱり、戦争で両親が死んじゃったのかな……」

「それだけとは、限らねえだらうけど。

おい、もしかして来たんじゃねえか？」

それまでとは通りの雰囲気が、微妙に変わる。

「え、どこ？」

「あー、お前にはこういつのは、分かんねえか
バトルにかけちゃ天下一品だけど、これはそれとはまったく違つ。
だから把握しづらいんだろ？」

氣配の流れる先に、視線をやる。ルーフェイアもそれには気づいたらしくて、同じほうへ視線を向けた。

「イマド、あれ……！」

「キマリだな」

どうみてもラコつてるやつらが立ち上がったのを見て、確信する。
クスリ売りとやらば、ぜつたいこの先だ。
もつ一回周囲の氣配を探る。

大丈夫そうだな。

実言えば万が一の時のために そんなことがあるとは、ちょっと
と考えらんねえけど ガルシィさんやダグさんなんかが、手下連
れて周囲にそれとなく張りこんでくれてる。
でも、用心に越した事はねえだろ？

「ルーフェイア、行くぞ」

「うん」

俺らも立ち上がって、そいつのあとをひっ飛びつける。そのままのヤク中の野郎は、細い路地の入り口で立ち止った。

「何してるのかな……」

「悪い、ちと黙つててろな」

ルーフェイアのヤツを黙らせて、集中する。

あ、だからルーフェイアのおふくろさん、俺を名謳したのか。

路地の入り口で、合言葉のやり取りがされてる。けど小声だし、ヘタに近寄つたらそんだけでバレるから、ふつうなら聞き取れねえ。でも俺みたいのだと、離れてても気合入れれば、けっこう分かるわけで。

自分でも分かんなかつたけど、たしかにこいつ役には、俺みたのはうつてつけだ。

「イヤマ……？」

心配になつたらしくて、ルーフェイアのヤツが訊いてくる。

「あいつらの合言葉、聞いてた」

「分かった？」

「ああ

」こいつが俺の返事に、ほつとした表情になる。

「んじゃ行ってくるわ。お前はここで待つてろな」

「うん」

「一ゅーキワディやり取りの時に、こいつのボケっぷりは下手すぎるや致命的だ。間違つても、連れてくわけにやいかなかった。」

ホント言えば、さいしょっから俺一人で来りやいいんだらうけどな。

ただイザつて時に独りだと、何かと行動が制限される。学院の訓練とか任務でも、よほどのことがなきや単独行動は厳禁だ。その上今は俺もルーフェイアもメインの武器を持つてないから、尚更気をつけないとヤバい。

「何かあつたら、すぐに誰か呼ぶんだぞ。俺でもシーモアたちでもいい。

あと手、出されそうになつたら、容赦なくやれよ。いいな

「……わかった」

「こいつの場合こいつやって言い置いておかないと、命に関わらない限りは、絶対ためらつて手を出せない。

「……気をつけてね？」

「平気だつて」

前のやつが離れてから少し間を置いて、俺はそいつに近づいた。

「なんだ？ 見かけない顔だな。何の用だつてんだよ」

「雪が降りそつだろ」

「の言葉で、こいつの顔色が変わる。

「誰から聞いた？」

「誰でもいいだろ。

「幾らだ？」

「きなり本題に入る。」

クスリ売ってるヤツはせいぜい俺と同じか、もう少し年下だ。身長も俺とかなり違うし、ひょろひょろしてて風に飛びそうだった。これなら荒っぽくいつたほうが、たぶん早いだろう。

「だから、誰に訊いた」

「つるせえな。ここなら安く手に入るって訊いて、わざわざ役人街から来たんだ。

売るのか、売らねえのか？」

睨みつけて脅す。

「金だつたら、ちゃんとあるんだぜ」

言いながら用意してあつた　といつか、ルーフェイアのおふくろさんが無造作に渡してくれた　高額紙幣の束を、これ見よがしにちらつかせる。スマムじやまずお田にかかれないような額だ。

もちろん俺みたいな子供が持つてるとも不自然といえば不自然だけど、「役人街」の一言が効いたのか、こいつは不審がらなかつた。

「でも、知らねえやつに売つたら、ボスに……」「こんないい売り場、俺だつて喋らねえよ。

それにもし売つてくれるなら、お前にも少しやるぜ。手数料つてことで」「

こいつの皿が輝いた。

「わ、そういうことなら……」

恐る恐るつて調子で、小さな包みがひとつ、差し出される。

ふうん、2、3回分か？

「これで……300ルルシなんだ」

確かに安い。シーモアたちから訊いてた相場の、半分以下つてヤツだ。

ただクスリが目的じゃないから、これですんなり買うわけにいかなかつた。

「　　おい、待てよ。これだけ出してんのに、これっぽつちか？」
違う方向で突っかかる。

「え？　いや、あとこれだけなら」「
さらに包みが、20ほど出された。

「今日は、これでぜんぶなんだ」「
「じゃあ、どつかからもりつて来いよ。10や20どじりか、50
だつてまとめて買うぜ」「
「そう言われたって……」「
「ぞけんなつ！」「

可哀想つつや可哀想だけビ、一につの胸倉をつかんでナイフをつきつける。

「客が買つて言つてんだ。用意するのが売人の仕事だろ。
さあ、さつさともつてこいよ」

「で、でも」

慌てるこいつの首筋に俺はナイフをなぞらせた。
ごく浅い傷がついて、紅く染まる。

「イヤなら、お前なんざ殺して、ありつたけ持つてつてもいいんだ
ぜ。」

じつちが機嫌よく金払つて言つてんだ。さつさともつてこいよ

「ま、待つてくれよ！ あ、明後日なら！」

こいつの命乞ひに、俺はナイフを引いた。

「きよ、今日はもうダメだけど、次なら持つてくれるからー。」

「ホントか？」

クスリ売りが、必死に頷く。

「次が明後日なのか？」

「あ、いや、詳しい事はその包みの中に、入つてるからさ
要するに、やたらと口にしちゃダメなんだろ？」

こいら辺が潮時と見て、俺も折れる。

「ふうん、まあいいか。とりあえず、いま持つてるだけでガマンし
てやるよ」

「う、うん」

ありつたけ受け取つて代金払つ。かなりの量だ。

「ホントにもう、これ以上ないのか？」

「ないよ……。ボスからもらつたぶん、それでぜんぶなんだ。今日はもう店じまいだよ」

「どうか

だとすつや、ここつは売り上げ持つて、ボスんとこへ行くだろ。

「こんども、お前が来んのか？」

「分からぬ。でもたぶん、違つやつだと思つ」

どうやら、毎回違うヤツが来るほうが多いらしい。見つからないわけだ。

「ともかく、悪いけど俺帰るよ。売れたんだ、長話はしたくないし」
言つて、クスリ売りが路地を出た。

俺も続いて路地を出る。ルーフェイアが、そつと近寄ってきた。

「 大丈夫? 」

「 ああ。多分上手くいった」
そう答えるながら気配を探る。

あのヤク売りの後ろを、シーモアの仲間たちが尾けてるのが伝わってきた。あいつらがしぐじるとは思えねえから、半分以上は上手くいったってことだろ?。

それからやつと俺は気付いた。
ルーフェイアのやつが、微妙に離れてる。たしかにペたくつ
きたがつてたのとは大違ひだ。

あ、なるほど。

「 こいつから僅かに怯えが伝わってきて、俺は理由を把握した。
どうもヤク売りとのやり取りが、ショックだつたらしい。 」

「 めんな、驚かせちまつて 」

華奢なこいつの頭を撫でてやると、やつと安心した顔になつた。
ほんと、ガキなんだよな。
ただ可愛いのも確かだ。

「 お~ふたりさん 」

ひょいとウインが顔を出してきた。しかも元気にしてやがる。

「 兄ちゃん、すっかりだね 」
このガキ、けつこうマセてる。

「 やつたじゅん、こんな綺麗なねえちゃん相手でやれ 」

「お前にほやらねえからな」

聞じやルーフェイアが、せよとことじした。なにをどうやっても
鈍いじじつにせ、ほにやつ取りの意味がわかつてない。
で、妙なことを言に出してやがった。

「……ワイン、何かいいとあつたの？」

「こことつて……どうしてやつなるんだよ……」

「だつて、なんかにほにじゆから……」

ワインのやつが、見事なぐらこに沈黙する。
もつともほにじゆは、あんなふうに俺にへつつけない
だらう。

「や、そつ言つ意味じやなかつたんだけどな……」

とりあえず、武器

どつこもリアクションの取れなくなつたワインが、間を持たせよ
うと武器を差し出した。
れつと俺じが預けておいたやつだ。

「悪い」

「ありがとう」

「別に。オイラ、持つてただけだもん」

口ではそう言つながら、ワインのやつは嬉しそうだつた。
自分が役に立つたつてのがよかつたんだらう。

それにしてもやつぱつ「れがな」と、今ひとつ落ちつかない。
ルーフェイアもその辺は俺と同じかそれ以上じつへて、しつかり
握つてやがつた。

「今や、みんながあいつ、尾けてるんだ。」

で、連絡あるまでオイラたが、レーーちゃんのお店へ帰つてゐつ

て

「やうか

確かに俺りじゅ、これ以上はなにも出来ないだろ？

「わいわと行いつよ。オイラ、冷えちゃつた

「んじゅ向こう着いたら、なんかあつたまるもん作つてやるよ。何
か欲しいもんあるか？」

ウインがいつも前に腕組みしながら考へこんだ。

「んと、なに頼もつかな……」

「イマド、あたし、わつきのスープ……」

意外にも、ルーフェイアの方からリクエストが出る。

「わいわのつて、ナティエスが作つてたやつか？」

「うん

「こつがわざわざ言つなんぞ、よほど氣に入つたんだろ？

「よし分かつた。

レーーちゃんのところに材料あるかどつかわかんねえけど、どつこ
かして作つてやるよ

「え、じゃあオイラのリクエストは？」

「後だな

「ひつで～！」

騒ぐこつは放つておいて、俺りじゅレーーちゃんの店へ向かつた。

Seamore

「イマドつてさ、よくわかんないよね」

「それだけ食わせモンつてことさ」

イマドのヤツがうまいことやつて、売り上げ持つて走るヤク売りを、あたしらはつけてた。

つても普通の尾行なんかじゃない。

じつちもそうだけど、向こうだつてこの辺にはそれなりに詳しい。だからちょい、変わつた方法をとつた。

うちらのチームと向こうのチーム、総勢60人近くを2人組みで、要所要所の街角に立たせるつて方法だ。

最初の組が顔を確認したら一手上に分かれてひとりが尾行、もうひとりは裏道を通つて、次に行きそうな場所へ待機しての組へ知らせる。あとはこの繰り返しだ。

この方法だつたら次々尾行が変わるから気付かれにくいし、見失う確率もかなり低い。万が一予想と違う方向へ行つたとしても、尾行してゐるほうが次の連中に知らせるだけだ。

それに手の空いた連中を使って、関係ない方向に待機しての連中を集めることもできる。

大人数ならではのやり方だ。

ま、学院で教わつたやり方だつたりするんだけどね。

そう言や学院の規定になんか、「学院内で習つたことを〜」とか言つ項目があつた氣もするかな?

まあどつちにしたつてバレやしないだらうから、今回は無視だ。

「ナティ、あいつ5丁目へ行くんじゃないか？」

「そんな感じだね」

あいつが妙なところへ入ったのを見て、うちらはすぐに感づいた。他の場所ならこの敷地内をわざわざ突っ切つたりしない。

「そしたらナティ、先回りして知らせてくれ。

あたしはこのまつける」

「わかった。気をつけてね？」

ふわっとナティが駆け出した。

やつぱりいつ、度胸あるな。

つけてる相手を追い越すなんぞ、そつそつできる筋当じやない。けどナティのヤツは「ちょっと急いでる」ふうで駆けてつて、あつさり追い越してみせやがった。

そのままその姿が、敷地の向こうへ消える。あたしはそのまま後をつけた。

ずっと昔に「なんとか開発計画」で建てられたって言つ、2棟づづ向かい合わせに並んだ古アパートの間は、やけに見通しがいい。いちばん見つかりやすい場所だろう。

もつともここは抜け道になつてるせいで、それなりに人通りがある。やたら近づきさえしなけりや、あたしもただの通行人だ。

案の定まだガキのヤク売りは、5丁目の方へ抜けた。

あとはここを抜けた先の丁字路をどうちへ行くかだけ、当然そこは要所だから仲間が居る。

割合簡単だつたじやん。

もつぱりいつとやこじこになるかと思つたけど、予想が当た

つたせいで簡単に片付いちまつた。

敷地を抜けて、また裏路地へ入る。

この辺は同じスラムでもショッピングモールに近いせいで、雰囲気は歓楽街だ。

問題の丁字路まではもう目と鼻の先だつた。
待機してゐるヤツや、ナティがいるのまで見える。

けど、その時。

後ろに気配を感じて、とつさに前へ身体を投げ出す。それともうあたしがいた場所を、何かが薙いだ。

もつともあたしだつて、そつそつ負けちゃ いられない。なにせこつちは学院生だ。

勢いを利用しながら手を付いて前転して、その反動で上手く起き上がる。ついでにその時には、愛用?の短銃が手にあるつて寸法だ。
そしてそのまま後ろは見ずに、カンで撃つた。
押し殺したみたいな悲鳴が上がる。

殺つたか？

特製の弾仕込んだのがよかつたらしい。
警戒したまま、あたしは初めて後ろを向いた。

ここいらじやあんまり見かけない服装の男が、顔から胸にかけて弾を受けて倒れてやがる。バカとしか言いようがないけど、あたしが子供だと思つて油断したんだろう。

でもとどめを刺そうとしたその時、また気配を感じた。
こんどはさとつさに横に避ける。

つて、うそだろっ！

飛び退いた先にもうひとり剣 というか、これは青龍刀つて類か？ を構えてるなんぞ、よほど運が悪いとしか言ひようがない。

さすがにケガは覚悟する。

青龍刀が振り下ろされた。

？

刃が来ない。

代わりに激しく金属がぶつかり合つ音。

「いい大人が、子供相手になにやつてんのかしらねえ？」

同時にこの状況じや、呆れるしかないほどなんびりした調子の声が響いてきた。

目の前を金髪が踊る。

「ルーフェイアの……？」

「ケガないわね？」

視線は連中から外れずに、この人が訊いてくる。

「あ、はい」

「よかつたわ、間に合つたわけね」

割つて入つてくれたのはルーフェイアのお袋さんだつた。
そのうえウソみたいな話だけど、襲つてきたやつが持つてた青龍
刀の刃が、すつぱり切り飛ばされてる。

この人が持つてるのは、青龍刀なんかに比べたらオモモチャみたい
にしか見えない太刀だ。

それで、あの分厚い刃を両断してみせたつてのか？
よほど実力がなきや、こんなマネできつこない。

「ちょっと待つててちょうどいいね。こいつら片付けるから」
あたしを後ろにかばうみたいにして、ルーフェイアのお袋さんが
無造作に立ちはだかつた。

青龍刀を両断された男が、もつひとつ背負つてたほうに持ちかえ
る。

しかも周囲の暗がりから3人も出てきやがつた。

「お、おばさん、ヤバいんじゃ……」

「だ、いじょうぶよ。こんなの最前線じや、囮まれたうちにも入ら
ないから」

「……」

気軽にそう言われちゃ、どう返していいかわかりやしない。てか、
囮まれる時点でかなり問題だし。

にしても娘のルーフェイアも常識外れだけど、このお袋さんもそ
うとうつてやつだ。

「さ、あたしが代わりに遊んであげるわ。

最初はどなたかしら?」

しかもすつごい楽しそうな調子で言つんだから、とんでもないと
しか言いようがない。

「あらやだ、遊んでくれないの?

それじゃ……こっちから行くわよつー」

言いざまこの人人が動いた。

え?

何がどうなつたんだか。

ともかく次の瞬間、ひとりが切り倒されてた。

「あらやだ、見かけ倒しねえ。もうちょっと手応えあるかと思つた
のに」

お、おばさん、ここの状況でそれは……。

なにせこの人、平氣な顔してこいつらにスキだらけの背中向けて、
倒したやつをちょんちょんつま先で蹴つ飛ばしてゐる。

もちろん連中、その隙を逃したりしなかつた。

3人が一斉に襲いかかる。

「 それが甘いのよ 」
嬉しそうな言葉と同時に、風 というより突風 がそいつら
へ吹きつけた。

一瞬視界を奪われて、連中の動きが止まる。
その時にはもうこの人、既に1人の首ともうひとりの胸を切り裂
いて、3人目の首筋へ峰打ちを決めるところだった。

「 はい、これで終わりね 」

それこそ片付けものをしたみたいな気楽さで言ひ、ルーフェイア
のお袋さんの足元に、最後のひとりが崩れ落ちる。

「 ジめんなさいね、待たせちゃって 」

「 い、いえ…… 」

つて言つた、待つって言つまど待たされてない。

「 この2人は始末したほうがいいかしら？ 下手に放つておいて、
アシがついてもヤだものねえ 」

しかもスラム育ちのあたしでさえドキッとするような台詞を、日
常会話みたいに口にする。

「 ま、どうにかしましょ。 」

「 そうだ、誰かに…… 」

集まつてたヤジ馬に、この人が歩み寄つた。

「 ジめんなさい、誰かあたしの知り合いに知らせに行つてくれない
かしら？ 」

もちろん、タダなんて言わないわ

「この言葉にみんなが色めき立つたけど、名乗り出るのはこなかつた。

「そりゃそうだろ？ うつかり関わって、ファミリーのやつに目をつけられでもしたら大変だ。

「金は欲しい。けどそれ以上に命は惜しい。

それがここだ。

「おばさん、ムチャですって。誰だつて関わり合いになんかなりたくないんだ」

「そんなことないわよ。

「お願いできるかしら？」

赤ん坊を背負つたまだ若い女人に、ルーフェイアのお袋さんが声をかけた。

あたりまえだけど、声をかけられた女性が視線を逸らす。

「場所はね、ここからそんなに遠くないの。そこでこれを見せて事の顛末言つて、あたしが片付けて欲しいって言つてたつて言えば分かるから」

それからこの人が何か囁く。

はつとしたように女性が顔を上げた。

「この子を、助けて……？」

「ごめんなさいね。あたしも医者じゃないから、さすがにそこまでの保証は無理だわ。

それでもいい？」

「やります」

意を決した表情でこの女人はそう答えて、ルーフェイアのお袋さんから短刀を受け取った。

「悪いけどよろしく頼むわね。」

あ、そりそり、して欲しいことはありますたけでいいよ?」

ありますたけって……。

いつたい何がどうなってるんだか。

にしてもこないだルーフェイアのヤツがアヴァンで部屋いっぱいにドレスを用意してみたり、お袋さんがムチャクチャな条件をかけたり、どうもこの一家ってのは桁外れだ。

「さ、どうにかここも片付きそりだし、行きましょ

そうそう、もう一回訊くけどあなた、ケガはないのよね?」

「はい」

それだけは保証つきだ。

「けど、あのヤク売りのほうが……」

さつき襲われた時にちらつと、ビルの隙間へ潜り込んだのが見えた。あれじゃ先回りしてくるナティたちも、追えたかどうか。

けどあたしの心配をよそにこの人、けらけらと笑つて手を振つた。

「それなら大丈夫、ディアスが追つてるわ。
それになんたつてこっちには、捕虜もいるしね~」
「さすが……」

ルーフェイアの両親つてだけあって、ハンパじゃない。

「ま、ディアスならここの育ちだし、どうしたことないでしょ。
それより例の店、どっちだっけ?」

「……」

なんつーか、ほんとルーフェイアのお袋さんかね?
真面目で大人しい性格のあいつとは、どうみたって正反対だ。

「えつと、向こうだつたかしら?」

しかもどういう頭の構造してんだか、自分が今来た方向へ行こう
とする。

「それじゃ反対ですつて。

あ、でもその前にみんなを下げないと」

こんなザマになつた以上、長居は無用だ。
まずはいちばん手近にいる仲間 つまりはナティたち のと
こりへ行く。

「シーモア、大丈夫だつたの?」

「ああ」

成り行きを見てたみんなが、心配そうに声をかけてきた。

「ルーフェイアのお袋さんが入つてくれたからね」

「そつか。でもよかつた」

「けど、まつとしてるヒマがない。」

「みんな、ここから急いで退こつけ。」

「それと退きながら、手分けして他の連中に連絡つけないと」

「ここであたしが襲われたってことは、多分ファミリーのやつらのアジトが近い。」

だからこんな風に尾けられたときのために、あいつらみたいな兵隊が見張つてて、場所を突きとめられるのを防いでるんだろう。

「けど、あのヤク売りどうすんの？」

「そつちはルーフェイアの親父さんが、尾けてるつてさ」「なんでもこの親父さん、昔はここじゃ知られてたらしい。ナティも納得したらしくてうなずいた。」

「じゃあそつちも大丈夫かな。」

「けどおばさん、どうしてここにいるんですか？ 確かどつかへ行くつてさつき……」

それはあたしも不思議だ。

確かにスラムの外へ情報集めに行くつて言つてたのに、こんなに早く片付いたんだろか？

「なあによ、あたしが帰つてきたら困るみたいな顔しちゃつて。

ちょっとシテがあつてね、この手の情報はすぐ集まるのよ、あた

「は」

「やつぱーのおばさん、へンだ。でも本人はこれが普通らしいし。

「もつとも最初っから、アタリはつけてたんだけどね。で、戾ろうと思つてスラムの入り口でディアスと合流して、近道

してたら妙な連中がいるのに気付いたってワケ
それでつけてきたらあの騒ぎになつて、思わず割つて入つたんだ
つて言ひ。

「ともかく早く帰りましょ。じきティアスも……あら、戻ってきた
わ」

ダンナが戻つてきてこの人、妙に嬉しそうだ。
しかもダンナはダンナで飄々としてるし。

「どう、首尾は？」

ルーフェイアのお袋さんにさう言われて、親父さんのほうが黙つ
て親指を上げた。

「そ。さすがティアスよね~ じゃああとは、帰つて作戦でも練
りますか。

あ、そつそつ。悪いけどティアス、その荷物持つてよ」
氣絶してゐるヤツをダンナさんに押しつけて、おばさんが歩き出す。
つて、だからせつちば……。

「反対ですつてば」

「あら、そつだつたつけ？」

ホントにこの人、大丈夫なのかね？
なんか不安になりながら、あたしらは引き上げた。

Caleana

「あら、ルーフェイアつたら戻つてたのね」

あの子のお友達と一緒に例の店へ行つたら、当の本人はしつかり
「」飯食べてた。

「なに？ おいしそうじゃない」

「うん」

イマドに作つてもうつたんだろ？「」のナ、嬉しそうにシーフ
ードのスープ食べてる。

「美味しいの。

イマド、みんなにあげてもいい？」

「断らなくていいって」

けつこう氣の付くこのボウヤが、笑いながらちやんとみんなにス
ープ分けた。

いい子よねえ

そのうえなんだか、料理上手いし。

今もちらつたお皿から、いいにおいがしてる。

「やだもう！ イマドつたらあてつけ？」

「あらナティちゃん、どしたの？」

やつぱりお皿もらつたお嬢さんが、素つ頓狂な声でボウヤに抗議。
後ろでシーモアちゃんが爆笑してる。

「だつておばさん、あたしがさつき同じの作つたら、イマドつたら
食べて文句言つたの！」

「なるほど」

自分よつと手に作られたら、そりゃ腹立つわねえ。

「けどイマド、どうしてわざわざ同じものを?」

「いや、ルーフェイアが気に入つたらしくて、リクエストしたもんですか?」

「あらあら」

ルーフェイアがリクエストなんて、珍しい話。なにせあの子ときたら、食べられさえすれば文句言わないんだもの。

前に最前线出てて毎日毎食携行食食べてた時も、毎度毎度「おい」といって言ひへりいだからかなり筋金入り。

ホント、味つてもんがわかってるのかしらね?

そりやまあ、味に文句言わない分生き残る率は高いんだろ?ナビ

けど見てるに今は、ほんとに美味しそうに食べてる。
と、ゆつくり食べてた手を休めて、この子が友達に尋ねた。

「そついえは……シーモアもナティエスも、なんでもなかつた?」

「あはは、大丈夫だよ。あんたも心配性だね」

「ウソばっかり。ヤバかったとこ、ルーフェイアのお母さんに助け
てもらつたんじやない」

「え……!」

ナティちゃんがバラしたもんだから、ルーフェイアつたらびっくりして立ち上がってる。

「け、怪我は?」

「ないない」

苦笑しながらシーモアちゃんが、結局詳細をこの子に教えた。

「 で、結局あなたの親父さんが、つきとめてくれたのです」

「 ほんとに? 父さん、尾行なんてできたんだ」

「 あんたねえ」

ボケ言つてるルーフェイアに思わず突つ込む。

「 この子つてばほんと、もの覚えがいいんだか悪いんだか。

「 傭兵稼業やつてたら、このくらい当たり前でしううが。

だいいち家での訓練には、ヨーヨーのまでカリキュラムに入つて

るしね」

「 そりなの…………?」

つてそりこえば、この子受けてないんだつけ。

どうもうちの実家は信用できないから、この子は最初っからあたしが、戦場連れ出しちゃつたものねえ。

「 ともかく、あたしはこれで稼いでるの」

「 太刀振り回すのと尾行つて、関係あつたんだ……」

「 それは違うだろ」

違つかしら?

「 え、おばさんつてば現役なんですか?」

「 そうよ」

ナティちゃんが興味津々つて顔で訊いてきた。

「へえ……なんか面白い話あります?」

シーモアちゃんも学院生なだけあって、話訊きたがるし。
「面白い話? そおねえ……」

正規軍に振り回された話なら山ほどあるんだけど。
とりあえずいちばん傑作だったの、あの話かしら?

「いつだつたかな、ローデスティオの傭兵隊 つてあたし、ここが
いちばん多いんだけどね、そこが例によつてアヴァンへ侵攻した時
があつて……」

お嬢ちゃんたちが身を乗り出してくる。

話甲斐あるわあ

けど、話せないうちに腰折られちゃつた。

「母さん、そんな話してゐる場合じやないでしょ……」

「え? あ、なんの話だつけ?」
さつぱり覚えてないんだけど。

「……場所を突きとめたつて話……だと想つたけど……」
「わつだつた?」

いつも言つたらルーフェイアの方も不安になつちやつたらしくて、
困つた顔してイヤマのまつを向いてるし。

「俺だつてしらねえつて。

シーモア、結局ここで何の話するんだ?」

「あんたら……」

なんだ、結局誰も知らないんじゃない。
知らないこと訊かれても、困るのよねえ。

「と、ともかくね、まづつきとめた場所を教えてもらえない?
妙にレーーサ慌てて、どうしたのかしり?
でもつきとめたの、あたしじゃないし。

「ディアス、どこだつたの? 騒ぎの場所からは、遠くなかったみたいだけど

「錆びビルの隣のホテルだ」

なにそれ?

錆びたビルなんてお田にかかつたことないわ。つて違う違う、その隣か。

「そこが丸」と、ですかね?」

ダグくんが腑に落ちないといつ表情でディアスに尋ねる。
もつとも彼ときたらこつもの」とく黙つたままで、代わりに答えたのがレーーサ。

「丸」とつてことはないでしょ? なにせあそこの支配人、あたしの知りあいよ。

多分連中、ヤク売る日は部屋借りて、いろいろやりとりしてるんじゃないかしら」

「敵もさるものってワケね

あらやだ。

ルーフハイアつたら露骨に「わかってるのか」って顔で、見なくたつていいじゃない。

「でもつきとめた先がホテルじゃ、それ以上はたどれなさそうね

レーーサがふうと息を吐いた。

「そうですね……」

ルーフェイアも神妙な顔になつちやうし。

けどその中、さすがティアス。面白そうに笑つてゐる。

「れはきつと、なんか楽しいことが待ち構えてるわね
思つてゐつちに表の扉を叩く音が聞こえた。

「　　レーーサ、荷物引き取つてくれるか？」

「あ、はいはい」

配達屋？の声に、レーーサが慌てて出でぐ。

「まつたく、こんな時に荷物なんて……ちよつと、何よこれ

「なあに、どしたのよー」

いきなり深海みたいに冷たくなつた声に、あたしも見に行つてみ
たりして。

「あら、これは確かに変わつたものが届いたわねえ？」

あたしのどこにもいろんなどこから届け物来るけど、この二つの
は見たことないもの。

「変わつたもの……？」

気になつたのか、子供たちも見に来る。

「なんなのさ、これ？」

「人……じゃない？」

「なんのは見りや分かるさ。そつじやなくて、どうしてこんなもんが届いたんだ？」

「俺に訊くなよ」

子供たちがみんなして、首をかしげる。

まあ、そうでしょうね。

届いたのは気を失つたうえに縛り上げられた男性が3人つていい、かなり珍しい物。

「こりいづの、届け物つて言いつの……？」

ルーフェイアつたら悩んでるし。

「届いたんだから届け物でしょ？」

「けど……」

せつかく説明してあげたけどこの子、いまいち納得できないみたい。

い。

「ともかくこんなもの、引き取れないわよ！
つたぐ、誰がこんな悪趣味な冗談……」

「俺だ」

レニーザが叫んだところへ、絶妙のタイミングでディアスが答える。

「俺だつて……ディアス、あなたが？」

「あ、なるほどね。ホテルにいた連中、ディアスつてば叩きのめしきただんだ」

さすがあたしのダンナ ただ尾けるだけじゃ、芸ないものね。
見ればディアス、してやつたりつて顔してるし。

「んじゃ、これがそのファミリーの一昧ですか？」

「そしたらこいつらに、口割らせれば……」

みんなの瞳がなんだか輝き出す。

分かる分かる。

「——ゆーの楽しいもの。

「さつきたしが捕まえたのも合わせて4人いるから、もつとどうにかなるでしょ」

「どうにかしてもらわないと困るわよ。

けどさつきたしが言つてた方法、大丈夫なんでしょうね？」

なんだか信用ない言われかたねえ。

けど、ちゃんと勝算はあるし。

「まあ、見ててよ。それに万が一あたしがダメでも、イマドがいるし。

「ね？」

「……」

あら？

しかも答えがないのを訝しんでたら、ルーフェイアがすごい形相で睨みつけてきて。

「 母さんつー」

「 どうしたのよ？」

「 どうしたもんつしたもないでしょつーー！」

さすがにこの剣幕には、あたしも少々驚かされる。

「どうして母さん、そうやって無神經なの?」

「あたしだって、神経くらい通つてるつじば」

「やうじやなくて!」

とりあえず口で親子ゲンカしながら、イマドのほうにあたし視線を向けた。

(あなたまさか、この力のこと黙つてたの?)

声に出さずに会話出来るのは、念話能力を持つ人間同士だけの、特典なのよね。

もつともこのボウヤは初めてだつたらしくて、少しの間があつてから答えが帰つてきたけど。

(はい)

(よくそんなこと、今までしてたわね……)

そりや所構わぬ言えとは言わないけど、まるつきり内緒にしてたら、ストレスなんてもんじやないでしょ?」

「カレアナ、なにがどうなつてるの?」

「どうつて言つても、大したことじやないんだけどね」

一旦そつ言つてから、あたしはもうこいつかいこのボウヤに視線を向けて。

(思いきつて言つちゃいなさい。あなたが心配するほど、人は驚かないわよ。

それとも、あたしから言つたほうがいいかしら?)
決めかねてるんだろう、答えはなかつた。

まあ、しょうがないかもね。

「うはそういう人間がごつそり出る家系だから偏見なんてないけど、世の中にはあたしたちみたいなのを毛嫌いする輩もいるし。

「ま、早い話がこの子もあたしの同類なのよ」

「あらま」

レニーの反応に、イマドが拍子抜けした顔になつて。

「……へンなヤツだとは思つてたけど、なるほどね」

「けど、なんかかえつて納得できない？」

シーモアちゃんとナティちゃんも、あつせつ順応。

「やついう人間つてのは、そんなにゴロゴロしてるものなのか？」
ここまで言つて、やつとボウヤが笑つた。

「あ～もひ、なんかヤになつちまつな」

「だから言つたでしょ、案外平氣だつて。

ヘンにこそこそしてゐはうが、よつぱん嫌われるんだから

「それとこれとは違う氣もするけど……」

なんかレニーから突つ込みが入る。

「違わないの。

それよりレニー、場所貸してよ」

「ちょっと、店は止めてよ！ そつから降りて、下の倉庫にしてち
ょうだい

「はいはい」

ダグくんやガルシイくんあたりに連中担がせて、言われた地下へ

降りる。

興味があるのか、ルーフハイアたちもつまらつこひめた。

「 も、起きてもらわなくちゃね。

ほら、朝よ~」

つてだらしないわねえ。

せつかくあたしが起こしてゐていつのこ、誰も田を覚ませないんだもの。

しうがないからティアスと手分けして、活を入れて起こしていく。

「おはよ」

「んあ……あ~..」

ちょっと何よ。

次々と田を覚ましたのはいいけど、みんなして驚いた顔しちゃって。

あ、そつか。

あたしみたいなイイ女がいたから、驚いたのかしらね?

「目が覚めた?」

面倒だから、武装解除もなにもナシ。ついでに縄も解いてあげる。

「ずいぶん舐めたマネしてくれるじゃねえか」

多分リーダー格とアタリつけてたのが、真っ先に口を開いた。

「そあ? 話を聞くんだから、転がしたままじゃ失礼だしゃりにへいし。

そつそつ、逃げたかつたらそつしていいわよ

ちなみにここ、地下だから当然出口はひとつ。

つまりあたしたちをどうにかしないと、絶対出られなかつたり。

「そつか、じやあそつかせてもらひ」

あら。

案外この連中統制取れてるみたいで、一斉に武器を構えて襲いかかってきた。

でもねえ……。

片手でディアスに合図して、子供たちを下がらせてもらひ。一方でルーフェイアにはめくばせ。

「 エターナル・ブレスッ！」

この子が防御魔法を展開させるのを背中で捕らえながら、あたしも呪を唱えた。

「 ヴエゼ・ジーヴルッ！」

あたしの中位氷魔法に足元を閉じ込められて、男たちが動けなくなる。

「 もつかいやる？」

半分凍りついた連中に尋ねてみたら、今度は子供みたいに首振つた。

「そりそり、大人しくしてたほうが身のためよ。

さ、今あつためてあげるわね

言つが早いが、ルーフェイアが今度は「く小さな炎を連発して、たちまち室温が上がる。

ほんと、我が娘ながら凄いわね。

この魔法の使い分けとコントロールだけは、どうあがいてもあたしじゃかなわない。

まだからこそ、15歳でシユマーの総領になることを、約束されてるわけだけど……。

あと、およそ3年。

たつたそれだけでこの子はあたしの代わりに、数千人の頂点に立つことになる。

あと僅か3年で……。

「母さん？」

ちゃんちゃん、ヒルーフェイアが服の裾を引っ張つてきた。

「どうかしたの？」

「あ、なんでもないわ。

それよりルーフェイア、あんた相変わらずたいしたもんじやないこの言葉に、ルーフェイアが怪訝そつな顔を見せる。

「母さん……ほんとに大丈夫？」

「どういつ意味よ」

可愛い娘だけど、この言われ方されると少しつと不満。

「だつて、母さんが……そんな風にあたしのこと、言つなんて……」「ああ、そういう意味？ 別にどうもしてないわよ。しばらく見なかつたけど、やつぱりさすがだと思つただけだから」

あら大変。

言つた瞬間ルーフェイアの顔が曇つちゃつて、微妙にアレなところに触れたのに気づく。

このまま放つておいたら、この子つてば泣き出しちゃうわね。

「「めん」「めん、そういうつもつじやなかつたのよ。

さ、イマドかディアスのどこにでも行つてなさいね。あたしはこつち片付けちやうから」

幸い間に合つたみたいで、この子が泣き出さないつちに手が打てた。

で、今度は男たちに振り向いて一言。

「でね、あなたたちにはちょっと、聞きたいことあるのよ」
聞ける相手は4人。「うちひとりは、あたしが捕まえてきたファミリーの兵隊。

残る3人のうち2人も、どうみても用心棒。装備見れば分かっちゃう。

けど、わざと知らなそうな人間に訊いてみた。

「さ、ボスの『今』居場所を教えてもらいましょうか？」

「し、知らねえ……」

なによ。

にっこり笑つて問い合わせたのに、こいつつたら後ずさつたりして。

「知らないわけないでしょ。ボスからの命令無しに、あんなことで

きるわけないんだから」

「知らねえものは知らねえよー。」

「あらそー」

まあこんなただの用心棒が何か知つてるとほ、あたしも思わないけど。

もつともわざわざ訊いてるのには、当然下心アリ。

「素直に言つてくれれば、手荒なマネしなくてすむんだナゾ?」

「だから、知らねえって言つてるだろー。」

話を訊いてる男の顔色が変わる。

別にあたし、何も言つてないんだけどな。
いつたい何を想像したのやら。

もつとも縄解かれてる上に武器まで持たされてて、それでも逃げ出せないようなメンバー相手じゃ、しょうがないのかも知れないけど。

ただ、一つ読み間違いがあつた。

「母さんお願い、そんなひどいことしないでー。」

こつちも何を勘違いしたのか、ルーフェイアがあたしと男の間に割つて入る。

「じゃ、下がりなさいってば」

慌てて言つたけど、ちょっと遅かった。

好機と見た男たちがすばやく動く。

「おいつ、この娘の命が惜しかつたら、俺達を開放しろっ！」

ルーフェイアに刃物突きつけて、人質作戦に出る。

知らないわよお、そんなことして。

ちなみに当の本人は太刀持つたままきょとんとして、拳句にこんなことまで言い出す始末。

「あの、危ないですから刃物は……しまつていただけませんか？」

絶対状況分かつてないわね、この子。

「度胸あるよなあ、あいつにあんな真似するつてのはや」

「あたしもそう思うね」

「命知らずつて言わない？」

この子の友達も、みんなしてそんなこと言つてるし。

「お、お前ら、こいつがどうなつてもいいつてのか！」

「命が惜しかつたら、その子放したほうが絶対いいわよ？」

可哀相だから忠告する。

「何ワケわかんねえ」と言つてやがる！ だつたら ！

あ、知らないと。

男がナイフを動かそうとした瞬間、それまでぼーっとしたルーフェイアが動いた。

「トオーノ・センテンツアツ！」

いきなりの電撃に、ルーフェイアを捕らえてた男が怯む。もちろんあの子がその一瞬を逃すわけがなくて、するりと腕から抜け出しながら強烈な柄の一撃を、下腹部の急所めがけて叩き込んだ。

捕らえてた男が悶絶して動けなくなる。

「こ、このつ！」

逃げ出してしゃがんだ格好になつたあの子を捕まえようと、近くにいた男が押え込むように覆い被さる。

瞬間勢いをつけて、ルーフェイアが伸び上がつた。

あれば痛いわね。

男の下顎に、下からの見事な頭突き。次いで伸び上がりながら抜かれてた太刀が、大きく振り下ろされて首が飛んだ。

後ろから来た男へは舞うように反転しながら一閃、腹部が裂かれる。

「このガキ！」

最後の男が銃を抜いた。

だけどあの子、それを見てもまるつきり動じない。

「あ、姐さんつ！」

「大丈夫よ」

ダグくんやガルシイくんが慌てて助けに行こうとしたけど、あたしはそれを止めた。

あの子は……そんな可愛い子じゃない。

「あたしたちが下手に出たら、邪魔になるだけだわ」
立て続けの銃声。

同時にルーフェイアが前へ出る。

魔法の防壁が弾をはじく音。

「ば、化け　！」

言葉はすべては聞けなかつた。
まずは下段から。そして返す刀で上段から。
たつたこれだけである子がケリをつけた。

「なんて子だ……」

誰かがつぶやいた。

死の舞の後に残つたのは、死にかかつた
男が4人と、呆然と中央に立つルーフェイア。
そのルーフェイアが振り向く。

あるいは死んだ

「母さん……」

いつもの、泣き出しがちな表情。

「ケガ、ないわね？」

言つて抱きしめると、この子が腕の中で泣き出した。

「あたし、あたし……」

「いいのよ」

優しいルーフュニア。シユマー一家はもうろく、ふつつの人間の間でも、これほど優しい子はそう多くないはず。

なのにこの子には、人殺しの才能がある。

動き出したが最後、機械より正確に敵を倒していく。
不憫だった。

もつと平穏な生活こそが、この子には似合つだらう……。

「最初にじどうするか、あなたに言つておくんだったわね。
いやな思いをせて、悪かったわ」

謝りながらこの子の頭を、撫でるしかなかった。

親のあたしがもう少し注意していれば、こんな目に遭わせなくて済んだはず。

いつも子だからぜんぶは防げないけれど、だからじくなるべく
こじつけとは少なくしてやるべきなのに。

「ユニー、汚しちゃうめんなさいね。あとでちゃんと始末するわ

慰めながら、後ろに声をかける。

「よろしく頼むわね。あたしでも始末できなくてはいけないけど、やつて

もらえば助かるわ

それ以上言わないとこ見ると、レーーサは予想してたみたい。

「おばさん、ちゃんと分かったの？」

ナティちゃんが半信半疑で、尋ねてきた。ここまで見てて思うけど、この子は案外冷静で、にこにこしながら核心突いてくるタイプ。

「大丈夫、だいたいわかったわ。イマド、あなたも観たわね？」

「ええ」

あたしを遙かに上回る能力の持ち主の彼が、はっきりうなずいた。

「リーダー格の男？」

「そです」

びづやひづやは当たつたみたいね。

人間ってのはたとえ喋らなくとも、思つことは止められない。ましてや今みたいに見当違いの人間に尋ねたりしてると、優越感も手伝つて、内心せせら笑いながら聞かれてることを思い浮かべる。

そう思つて下つ端に聞いたのが、大当たりだつた。

「じゃあいつたん上にもどりましょ。そこで場所を特定して、あとどうするか決めないとね」

まだべそかいてるルーフェイアを抱き上げながら、お店の方へ戻る。

「いいのよ、ルーフェイア。あなたのせいじゃないんだから」

そう何度も、繰り返しながら。

Ruffer

「ううしてあたし、いつなんだろう……。」

後悔してた。

「あとは言え、また何人も殺してしまつて……。」

自分が嫌になる。

「いいのよ、ルーフェニア。あなたのせいじゃないんだから」「うう母さんが何度も繰り返してくれるけど、気は晴れなかつた。あたしがやつたというのが、変わるわけじゃない。涙がこぼれて止まらなかつた。

あたしなんか、いなればいいのに……。」

「うーん、やつぱり可愛こわねえ」

「え?」

あたしの顔を覗き込んで、母さんが妙なことを言つ出す。

「あなたの泣き顔。

「写影に撮つといつかしら」

「や、やめてよつて……」

とんでもないことを言つ出されて、慌てて涙をこらえた。なにしろ母さんが大事にしてるアルバムときたら、とても見たくないようなあたしの写影ばかり並んでいる。

それにこれ以上追加されるのは、絶対にイヤだった。

「はー、その調子その調子。

あたしは泣いても可愛いからいいけど、みんなが気にするわ

やつ言つて母さんが、今度はイマドに向ひ直つた。

「イマド、説明できる?」

「はい」

彼がはつきりと答える。

母さんがそれに、満足やつこひつなずいた。

「それで、どんな場所だったの?」

「どつかの屋敷みたいでしたね。かなりの広さの。やつこひながらの親玉と、誰か偉そうな人などが話してましたっけ

「なるほどね……」

みんなが納得したみたいにうなずいた。

けど、ここ的事情にはあまりあたしは詳しくないから、意味が分からぬ。

「ねえ、どうこひこと?」

「よしするにね」

レーナさんが口を開く。

「フアミリーがどこか國の上の方の連中とつるんでるんじゃないかなつていうのは、さつき言つてたでしょ? それがつまり、その屋敷の誰かさんじゃないかつてことなのよ。

まあ恐らくは、軍か警察か大統領の側近か……そんなとこでしょ

うね

「そんなん!」

もしそうなら、本当に犯罪組織がやりたい放題になつてしまつ。

「多分、レーナの言つとおりでしょ。そしたらイマド、屋敷の周

囲はどうなつてたか分かる?」

「と、あたしも一緒に観たほうが早いわね

母さんが目を閉じる。共感能力を利用してイマドとシンクロして、同じ映像を観ようつていうんだろう。

けど確かにきちんと絞りこまないと、ベルテナードは広いから探しれない。

「スマートじゃないわね、これ」

「絶対違いますって」

母さんとイマドが2人だけで納得しながら話をしているのは、考え方によつては不気味だ。

「だいじにんなでかい家が並んでる場所なんて、この辺にありますか？」

「役人街じゃないかい？」

もうこの状況に慣れてしまつたみたいで、シーモアが横から言葉を添えた。

「そうなのか？ よくわからんねえけど。

屋敷の田の前がでっかいバス通りで、その向こうは公園みたいな

「じゃあ、まちがいないわよ」

ナティエスもうなずく。みんな心当たりがあるみたいだ。

「でも役人街つたつて広いわ。

まあ屋敷ばっかりなら西南地区だらうけど、それだつてけつこうあるのよ？」

「あ、そうか……」

けじそうし二ーサさんに指摘されて、この町を良く知つてゐるシーモアやナティエス、ダグさんやガルシィさんがため息をつく。

「どんな屋敷か、細かいことわかる？」

「さすがにそこまでは、分かんねえなあ……」

「だだつぴろい庭に軍用犬が放してあるくらいかしら？」

イマドも母さんも、それ以上はわからないみたいだつた。

あたしも下をむいたまま考えて見たけれど、いい考えは浮かばない。

「しょうがない、やっぱ二ーサは あら、お帰り」

「なんだ、もうみんなお揃いか」

反則技を使える母さんとイマド以外では、いちばん情報集めが上手い人が帰ってきて、みんなが一斉に期待のまなざしを見せた。

「ゼロール、そつちは何かわかつた？」

母さんがいきなり聞く。

「ウワサばかりだよ。

どれも確証がなくて、情報としてはイマイチだな」
意外にもゼロールさんのほうは、さほどいい情報はなかつたようだ。

「それよりあんたたちこそ、何かつかんだみたいだな」

「こっちも確証はないのよ」

言いながらも一通り、母さんはゼロールさんに役人街のことを話して聞かせた。

「そんなわけで、なあんか役人街の住人が絡んでるのは、わかつたんだけどね。

ただそれが、どこの誰で何の目的かはさっぱり」
うんうんとみんなもうなずく。

「ウワサの中にそれ系の話、何かなかつた？」

「あつたぜ」

にやつとゼロールさんが笑つた。

「コーニッシュ大佐が、どつかの犯罪組織とつるんでるってウワサが、最近聞こえてきてるそうだ」

「コーニッシュ大佐？ あの陸軍の？」

あたしもびっくりして顔を上げる。

ロデスティオ軍のコーニッシュ大佐といえば、軍の中でもトップ

クラスの実権の持ち主だ。

「ということは、大佐が庇護してゐるせいでファミリーはやりたい放題。ついでになにをやってもお由にいぼし……ってどこかしらね？」

「それなら話の辻褄が合つた

レニーさんや切れ者のガルシィさんも、納得したみたいだ。

「つまるところ、ファミリー連中はなんやかやと手を回してもらつて、大佐はその見返りに大金をもらつ。資金源はおおむね麻薬。ついでにいろいろ邪魔なクリアゾンなんかを、ファミリーが潰す手助けをして、もう一段双方で甘い汁、と」

「確かにクリアゾンが潰れりや、その隙にシティを牛耳れるしな」

「しかも警察やら軍やらは、反抗分子がいなくなつて喜ぶつてわけだ」

みんな、話の筋道が見えてきたらしい。

「それにしてもこのシティの偉いさんは、やること汚ねえな
「汚いと言つよりあれば、気が乗つたかどうかと利益があるかどうか
かで動いてるな」
誰もが酷評する。

「けどコーニッシュ大佐つたら穏健派だから、ほかとは違つと思つ
てたのに」
憤懣やるかたないつて調子でつぶやいたのは、ナティエスだ。
「でもナティ、あの大佐、昔はワサールのテロ組織を片つ端から潰
してたつて言つよ」
「ここまで軍の信用がない国も、そりゃあくはないだろ？」

「ま、偉いやつなんて誰でも同じで」と。

「そしたら、そのコーニッシュ大佐をどうにか呪きのめして……」

「ねえ、そのウワサ、ホントなの？」

怒りに燃えてたみんなに水をさしたのは、母さんだった。

「さあな。でも、火のないところに煙は立たないとも言つし

「そりゃそうだけど……」

「どうもこの話に納得できないうしくて、顎に手を当てて考えこん
でいる。

「リオネルはあたし、直接知つてゐるのよ。けど彼、犯罪組織とつる
むようなタイプじゃないわ」

「でも姉さん、場所から言つても可能性大つてやつですよ
ダグさんの言葉にみんなも視線で同意したけれど、それでも母さ
んはイエスと言わなかつた。

「そりや軍務には忠実だから、一寸命令となればテロ集団の殲滅だつてするでしょうね。」

「けどね、それならあたしもおんなじ。もう20年以上も傭兵やつてるんだもの、殺した人間の数なんて、数えるのもバカらしいほどになつてるわ」

静かな言葉。

ただその奥に潜むものの凄さに、みんな圧倒される。

「戦争つてそういうもんよ。けど個人となれば、少々別。行動には当人の性格とか考えかたが出来るわ。そして彼……そういうのは嫌いだったのよ」

静寂。

誰もが母さんの言葉を、胸の内で繰り返している。

「でも、そうするといつたいどこの誰が……？」

誰かの咳きに、母さんが笑つた。

「あたしが出向いて探してくる」

「探すつてあなた、役人街中を訪ねまわるつて言うの？」

レニー・サさんが「なにを言うんだろう」って顔で言つ。もつとも母さん、この程度でこたえたりしない。

「こたえてくれたらいいのに。」

ともかく得意そうにふふんと笑つて、あたしたちに説明した。

「イメージが観てたものは、あたしもちゃんと覚えてる。」

だからそれを頼りに役人街中を探せば、今夜のうちにその屋敷の場所が分かるわ」

「 便利ね」

「 そうでもないわ」

「 ふうん、 そうなの？」

「 そお よ」

この話はあたしも聞いていた。

あたし自身はこういう能力はないから分からぬけど、 意外に範囲が限定されたりする上、かなりのリスクがあるのだという。

端から見ていると便利そうでも、案外魔法と同じで、使い勝手はそれほど良くないのかもしね。

「ともかく急いで探してくれるわ。
ティアス、行きましょ。あ、みんなはけやんと寝るのよ?」
まるで一陣の風を巻き起しそうのような勢いで、母さんが出でいく。

あとに残されたみんなが、なんとなぐため息をついた。

「毎度ながら、妙なお袋さんだよなあ。親父さんも変だつたし
「だからそれ、言わないで……」
あたしこそはじつすることもできないから、尚更気が重い。

「そうしたら俺も、もう少し知り合に当たつてくるか
ゼロールさんも腰をあげた。じつやう母さんの話を聞いて、また
調べてみる気になつたらし。」
「また、何か分かつたら連絡するよ」
「よろしく頼むわ」
ぱたんと扉の閉まる音を残して、このジャーナリストの男性も出
ていった。

「そしたら、あたしらどうする?」
「よくわかんないけど、探した方がいいんじゃない?」
シーモアとナティエスが相談を始める。

「でも、ジジをどう探せば……」
「うーん、とりあえす……」
「こりゃ、あなたたち何言つてるの」
レーニーさんが一喝した。

「ですけど、このままってわけにも」

「子供は寝る時間よ。」

「くら明日の祭りが延期になつたとはいえ、夜更かしはダメ」
「やあぱり言われてしまうと、さすがにそれ以上相談はできな
い。」

「しゃあねえ、引き上がるか」

「こつちもそつさせてもららう。」

あとはあの人があのうこう情報を持つて帰つてきてくれるかだろ
うな」

「てめえ、気安く『あの人』なんて言つんじゃねえよ

「はいはい、もつ終わりにしてね。あたしさこのあと、まだ予定が
あるんだから」

言い合いを始めたダグさんとガルシィさんを、今度も簡単に
レニーさんが止めた。

多分これが、いつものレニーさんなんだろ。ともかくみんなが立ちあがつて扉のほうへと向かう。
あたしもなんとなく立ち上がりかけて、やつと気がついた。

「ねえイマド、あたしたちどうしよう?」

「へ?」

「あ、言われてみりやそうだな」

行き当たりばつたりだった拳句になんだかばたばたしていたから、
今晩泊まる場所を決めていない。

「なんだ、泊まる場所ねえのか? んじゃうち来いよ

「え、でも……」

押しかけていいものか迷う。

「ちょっと待った、ここからひらひらのダチなんだ。」さちで泊まるのがスジつてもんだよ」
シーモアとダグさんとが、睨み合いを始めてしまった。これじゃ
どちらについていっても、もう片方が気まずい思いをするだろ。う
どちらにも迷惑をかけずに住む方法をじっくり考え込んで、今度
は上手く思いつぐ。

「そしたらイマド、あたしたちが父さんが言つてたホテルに
」
「なつ、ばかっ んなのダメだダメだ!」
「ちょっとルーフュニア、マジかい?」
「いいのか……?」
「確かに、『ホテル』かもしれないけど」
「そりゃマズイだろ」
みんなが一斉に反対した。

「どうして……ダメなの?」
ホテルって、泊まるといふだと思つたのに。けど誰も、説明は
してくれない。

そして代わりに、レーーサさんが声をかけてくれた。

「お嬢ちゃんたち、泊まる場所がないならここにしなさいね」
「でも……」

押しかけた上に泊つたりしたら、迷惑じやないだろ? が。

「ほんと、お母さんに似ないで遠慮深いのね。でも構わないわよ。店の奥の部屋、もともと泊まれるようになってるから。

それにどうせティアスたちもここへ戻るんだろうから、その方が何かと都合いいでしよう?」

「そうですか? そしたら……」

なぜか隣で、イマドがほつとした顔になつた。

「そしたら、また明日ね」
「寝坊するんじゃないよ」

「うん」

そう言って、シーモアやナティエスたちと別れる。

「さ、あなたたちはあっちへ行きなさいね。今度は多分、妙な連中
が来るに違ないから」
「そんな変な人が来たりして、大丈夫なんですか?」
心配になつて尋ねると、レーーサさんが大笑いした。

「あの……」

「あ、『Jめぐ』『Jめぐ』。やつ言えればあなたたち、JのJの人間じゃないものね。

妙つて言つのはね、クリアゾンの連中のJよ」

「えつ？」

そんな人たちがきたらもつと大変じゃないかと思つたけれど、レニー・サさんが気にしている様子はなかつた。

「どうも大事になりそうな気がしたもんだから、トップ連中に招集かけといたの。

「夜中前につて言つといたから、そろそろ来るわ」

「けど、本当に大丈夫なんですか……？」

普通の人には手を出したりしないという話は、JのJへ来てから聞いてる。けどクリアゾンの人たちが集まつたら、お互いの間で暴力沙汰になつてしまつかもしれない。

「ほんと、あなたつてお母さんとずいぶん違つわね。でも大丈夫。クリアゾンの連中が、ここでバカやるJはないわ」あたしの心配をよそに、レニー・サさんが断言した。

「なんですか？」

「Jも不思議だつたらしくて尋ねる」

Jのお姉さんが、ふふつと笑つた。

「これでもあたし、いちおう先代のボスの孫なのよ。だから問題な

いわ

「あ、それで……」

よつやく納得する。

「ただ困るのはね、ああいう連中つて案外、子供好きが多いのよ。だからあなたみたいな子がいたりしたら、たちまち捕まつて寝る

「おじやなくなつちやうわ

「げ

なにが嫌だつたのか、イマドがおかしな声を出した。

「おい、早くひつこもうぜ

「あ、うん……。あれ？」

「ちょっと遅かったみたいね

店のドアが開いて、ガルシィさんやダグさんたちより数段凄そ

な男の人たちが、入つてくる。

でも凄いのは気配だけで、顔はにこにこしていた。

その人たちが、レニーさんに挨拶する。

「お嬢さん、お呼びだてどおり来ましたぜ

誰もがみんな下手に出る。

レニーさん、ほんとに凄いんだ。

人というのはまさに、見かけだけでは分からぬ。

「悪いわね、こんな夜中に。折り入って相談があるのよ。もとも
話は、全員集まつたからになつたやつね」
「やつやもつ。

「あれ、可愛こ子がこるじやなにスか。ほり、おじわことおこ
で」

「ほんと、顔で手招きされた。
困つてレーナさんを見る。

「ほんと、あなたも子供好きよね。

けどもつ寝かせるといふだから、少し元気になつた。あと、お酒

なんか飲ませないでね」

「わかつてしまつて。ほりお嬢ちゃん、いつおこで。何か食べる
かい？」

「なんだか断るのが、申し訳ないような笑顔だ。ただ食べただ
から、食べたくても食べられない。

「えつと……その、さつや夕食はこただきましたから……」

「そりやうだらうなあ、なにせこんな時間だしね。じゃあ
果物でも食べるか？」

「そつちのボウズは何がいー？」

「あ、そしたら俺、ワイン

「おこおこ」

「でも苦笑しながらワインを出してしまつたつ、このおじわこ、
本当に子供が好きみたいだった。

「ほんだけだぞ」

「あ、すいません」

ちやつかりイマドも飲んでる。

あたしの前にもいつのまにか、果物やお菓子、それに軽い食べ物が並べられていた。

「ほら、遠慮するな」

「あ、はい……」

ちよつとだけ口に運ぶ。

そのうえ気が付くと何人もの人が集まつてきていて、すっかり見世物みたいになつていた。

「にしても、可愛い子だなあ。ほら、お小遣いあげよう」

「あの、そんな……」

みんな母さんみたいなことをする。

「いいつていいつて、遠慮するな。それでなんか、好きなもんでも買ひな」

結局手のひらに強引に握らされた。

「あ、てめえズルいぞ。ほら、おじさんもあげよう」

「でも……」

だけど嬉しそうな顔を見ると、断るに断れない。

「そうそ、子供は素直がいちばんだ。明日になつたら、2人でシヨツピングモールでも行つといで」

「明日、行く暇あるだろ？ か？」

ふつとそんなことを思った。

それに行くとなつたら絶対に母さんがついてくるはずだから、たまたもんじやないだろ？ し。

でも、大人に囲まれてるのは嫌いじゃなかつた。

ずっと戦場で育つてしまつたあたしは、あんまり同じ年くらいの子知らない。むしろこうやつて大人の中にいるほうが、慣れている分ずっと楽だ。

「よしよし。

それにしても、うちのガキもこのくらい素直ならなあ。もうでつかくなつちまつたうえに、最近じや親父なんか知らん顔しやがつて

「あなたに似たんでしょう」

おじさんのぼやきに、レーニーサさんが容赦なく突っ込んだ。

「そんな言い方しないでも……。

けどお嬢さん、今日の話つてのは、ホントのとこなんなんですか？」

これはあたしも訊いてみたかった。

シーモアたちよりもう一段上のこの人たちが動くのだから、それなりの理由があるはずだ。

「 しうがないわね。けどボスが来てないから、ちょっとだけよ。

実はね、例のファミリーのボスの居場所、わかりそうなの「そりゃマジですかい！」

一斉に店内が色めきたつた。

「 そりゃ、それで叩きのめすために、あっしらを呼んだってワケか」「けど、よく居場所がわかりやしたねえ？」
誰かが不思議そうに言った。
今までどうやっても分からなかつたみたいだから、当然なんだろうけど。

「 」の辺ウロついてるジャー・ナリストの彼が、情報持つてきてね。
そこへ、子供たちが協力してくれたのよ

「それでよく……」

また誰かが感心する。

「 まあ、途中ちょっと「タつこちやつたみたいなんだけどね。けど最終的にディアスが元売り捕まえてきて、その口を奥さんが割つたのよ。

もつとも詳しい場所はまだで、夫婦して探しに行つてるんだけど

「 ね

「 はい？」

一瞬、店の中が静かになつた。

「 今、『奥さん』って聞いたよつな……」「言つたわよ」

再び沈黙。

「その……あのディアスが、女房連れてるんですかい？」

「そうなの。あたしも最初は驚いたんだけどね。実言えれば、その可愛いお嬢さんが娘よ」

「えええつ！！」

居合わせたクリアゾンの人たちが、一斉に声を上げた。

けど、そんなに驚かなくたって。

もとを正せば父さんなんだろけど、なんだか自分が悪いことをしたような気になる。

「娘つて、娘つて……。

でも確かに、言われてみれば似てるか……？」

「そりや、あの美形の娘だもの。あなたみたいな熊親父とは違うでしょ」

「あ、ひでえ」

さつき以上に人があたしの周りに集まつてきて、今度こそ見世物のようになつてしまつた。

なんだか恥ずかしくて、つい下を向く。

「お前たち、どこでその子拾つてきた？」

男の人があたしひとり店に入ってきた。

「バカヤロウ、みんなして取り囲みやがつて。ほらみる、怯えてるじゃないか」

「あ、ボス」

呼ばれたからすると、どうやらクリアゾンを束ねている人らしい。

年は……40代くらいだろうか？

黒い髪。黒い瞳。背もそんなに高くないし、身体つきもさほど逞しいわけじゃない。それに、こここのどの男の人よりも優しそうだ。ただ、その眼光は鋭い。何気ない仕草からも、実際はかなりの腕を持つていることが分かる。

けど今ここでそれを見せる気は、全くないようだった。

「つたく可哀想に。

ほら、早く謝つて向こうに行け」

「は、はあ……」

まるで蹴散らされるみたいにして、大の男の人たちが、あたしに謝りながら離れて行く。

「悪かったなあ。びっくりしたもんでつい、な。ほら、お詫びにこれやるから、勘弁してくれや」

なかにはまたお金を押しつける人がいて、本当に困ってしまった。

「あの、別にいいんです……」

「そんなこと言つなつて」

「こらつ！」

ボスが一喝した。

「困らせるんじゃないつて言つてるだろ？が。
だい、いちお前たち、金なんてつまんないものばっかり渡すな。も
うちょっと気の利いたものにしろ」

「へ、へえ……」

「この人にかかると、熊のような人まで借りてきた猫みたいだ。

「ちょっと待つてろ、今俺が手本を　ん？　なんだ、今日に限つ
て口クなもんが入つてないな」

ベルデナードを配下に治めるというボスが、必死にポケットをひ
つくり返している様は、なんだか可笑しくてつい笑つてしまつ。

「お、笑つた笑つた。うんうん、可愛いな

ボスも嬉しそうに笑つた。

「いい子だいい子だ。

にしても、なんで今日は何も入つてないんだ？　ライターじゃダメだしなあ……」

「　あ

上着の内ポケットがちらりと見えて、思わず声を上げる。

「ん？　あ、これか？」

ボスも気が付いて、それを出して見せてくれた。

「これに目をつけるとは、大したもんだな」

もの 자체は、ただのナイフというか、短刀だ。
でもこれ……。

「ローム時代のものですよね？」

「ほう、よく知ってるじゃないか
ボスの顔がふつと曇った。

「あの、すみません。あたし何か……」

「いや、お嬢ちゃんのせいじゃないことよ。ただちょっと、思い出しち
ね」

一呼吸おく。

「お嬢ちゃん、何歳だ？」

「？ 11歳です」

「そうか、やつぱりうちの娘と同じくらいか……」
店の中が静まり返る。

「あの……？」

なにが起こったのか分からなかつた。
ただあたしのせいでこつなつたのは確かだ。

「い、ごめんなさい……」

「おわ、ほらお嬢ちゃん、泣かない泣かない
そう言われても、涙は止まらない。」

「いめんなさい、いめんなさい……」

「ボス、女の子泣かしちゃいけませんぜ」

「つるわいっ！ おまえはすつこんでろ
茶々を入れた男の人を、ボスが蹴飛ばした。

「つたぐ、いらんこと言いやがつて。

ほら、別にいいんだよ。死んだ娘を思い出しだけなんだ。あの子もこれが好きでね、よく欲しがつてたもんだから」「そんなん……」

話を聞いて、よけい悲しくなつてしまつた。

あたしと同じくらいで死んでしまつただなんて、ボスはとても辛かつたはずだ。なのに、そんなことを思い出させてしまつなんて。

「じつや困つたな。頼むから泣き止んでくれないか?」

「「めんなさい」」

泣きながら謝る。

泣くのもやめたほうがいいのだね」けど……自分でも情けないけれど、申し訳なくて可哀想で、涙が止まらない。隣でイマドが、笑いながら立ち上がった。

「すいませんここ、メチャクチャ泣き虫なんですよ
「ありや、そうだったのか」
なんだかヒビレーことを言われる。

「もー、かなりすげくて、学院でもじょっちゅうじゅうなんです。それに1回泣き出したら、そう簡単に止まらないですし」

「イマド、ひどい……」

さすがに抗議する。ホントのことだけど、人前で言われるのはずがにイヤだ。

「なら泣くなつて」
「ごめん……」

思わず謝ったけど、まだ涙は止まらなかつた。
そのようすを見ていたボスが、笑い出す。

「けど、泣いてるのも可愛いなあ。うんうん、可愛い
この人まで、母さんみたいな言い方だ。

「こまどりの辺じや、わづかって泣くのもこないしな。いいじや
ないか、女の子らしくて」
「ですかね?」
イマドが答えてる横で、必死に涙をぬぐう。
泣いてるのが「可愛い」なんて、言われるあたしは面白くない。

「よしよし、可愛いからやつぱり、何かあざよひ
「い、いいです……」

断つて、それ以上泣かなこようガママンした。
イマドやボスや他の人がまた笑つたけど……。ソロド泣いたひきつ
と言われるだろ。」

「とつあえずここつ、向こう連れていきますね。つか、俺ら寝たいで
すし」

「おう、悪かつたな。お嬢ちゃんのこと、慰めてやつてくれ

「は」

イマドがあたしの腕を引っ張つた。

「ほり、行くぞ」

「うん」

あたしも立ち上がりて続く。

後ろからレースカーテンもそつとつこいてくれて、こびほん奥の
部屋にベッドを用意してくれた。

「そ、これで寝られるわよ。

そんなに泣いて疲れたでしょ？ ゆづくつ寝なさいね

「こは」

その言葉に甘えてベッドへもぐつこむ。

「けど、なんでボスの娘さん亡くなつたんです？ 雰囲気からだと、

なんかあつたみたいでしょ？」

「もうだいぶ前だけビ、殺されちやつたの」

「ボスともあう人の娘が、ですか？」

「それがね……」

すぐに跟くなつてきて、イマドヒースカーラと会話を遠くか

ら聞えた。

「あの……みなさんには、申し訳ありませんでしたって……」

「わかった、ちゃんと聞かとくわね。だから安心していいわよ」

「はい……」

それを最後に、あたしは眠ついこんでしまった。

翌朝。

「ルーフュイア、起きなさいー。」

「なに？ 敵襲？！」

母さんの言葉に跳ね起きて、とつさに枕元に置いていた太刀を掴む。

それからよつやく気付いた。

「あ、違った……」

寝ているといふくの母さんの声で勘違いしたけど、ここは戦場じゃない。

「 あんた、しっかり染みついてるわねえ」

「だつて……」

あの頃はこじりじゃなければ、それこそ死にかねなかつた。

「まあいいわ。寝起きがいいのは、いいことだし。

それよりね、例の黒幕わかつたわよ」

「ほんとに？」

いい加減な父さんと母さんの組み合わせで、よく分かつたものだと感心する。

「 あんた、今あたしのこと『いい加減』とか思わなかつた？」

「だつて、そうじやない」

父さんと母さんが周囲を引っかき回す名人なのは、嫌といつまでもよく知つてる。

戦場にいる時だつて相当だし、これが実家にいる時となると、もうみんなして振り回されまくつてしまつて、ため息の連続だ。

「つたぐもう、人がせつかく探つてきてあげたのにそんなこと言つなら、教えてあげないわよ」

「母さん……」

「子供みたいな拗ねかたしなくたつて。いつものことだけど、さすがに呆れて黙つてしまつ。

「あら、本氣にしたの？ 大丈夫、ちゃんと説明するわよ」

「そういつて母さん、手をひらひら振つて笑つた。

「昨日の話の続きなんだけどね、やっぱり「コーニッシュ」大佐じゃなかつたのよ、あの屋敷。

同じ軍は軍なんだけど、マルダーグ大佐のお宅だったのよね

「マルダーグ大佐……？」

少し考える。

確かに記憶じや、「コーニッシュ」大佐と並んでロデステイオ軍の実力者だつたはずだ。

ただ「コーニッシュ」大佐が穩健派と言われるのに対し、この大佐はタカ派じやなかつただろうか？

「けどタベ、その誰かとファミリーのボスが一緒にいるつて、言つてなかつた？」

「そおよ」

考えようによつてはとんでもない話を、母さんが楽しそうに肯定した。

「でもそつしたら、「コーニッシュ」大佐が犯罪組織と結託してゐつていつ噂は……？」

確かに昨日、情報通のゼロールさんはそつとつてたはずだ。

それとも、まさかとは思つけど……。

「それこそ、濡れ衣だと思つわ
あたしが考えたのと同じことを、母さんも言つ。

「証拠があるの？」

「確たるものはないけどね。

でも、マルダーグ大佐のほうがファミリーとツルんでるのは間違いないわ。それにね、その大佐ときたら、出世に邪魔なりオネルを目の敵にしてるって言うし

「そなんだ……」

確かにそういうことだったら、「ライバルに濡れ衣を着せて」つていうのは常套手段だろう。

「ともかくその大佐とファミリーのボスとが、今回の黒幕じやないかなって思うわけ。

でね、これから屋敷ごとどつかしちゃおつかなつて

「屋敷ごとつて……」

それこそ器物損壊、不法侵入じやないだろ？

「あらいいじやない。

だいいちね、ちゃつかり権力の座に座つてゐるくせに裏でヤバいことに手染めてるなんて、いちばんのクズよ。

悪いことするならするで、肚くくつときつちりやんなきや

そういう問題だらうか？

なんか違う気がするけど、母さんにそいつと戻つても通じないだらう。

「で、あたしとディアスでとつちめに行いつと戻つて

「父さんと2人だけで？！」

「いくらなんだつて、それはムチャだ。

「他の人は？ ほら、クリアゾンの人とか……。

だいいちそれ、警察の仕事でしよう？」

「警察が何もしないから、みんな困つてゐんじやない

あつさりと母さんが言い放つた。

「それにここの人たちだつて、そう簡単に手なんて出せないわ。あたしらはしつかり無国籍だから、どこで何やつたつてどうつてことないけど、の人たちはここに住んでるのよ？

うつかり変なものに楯突いたりしたら、それこそ暮らししていけなくなつちやうでしょ」

「そうだった。

基本的にシユマーの人間は国籍がなくて、あたしなんかもいつも、偽造したもので通過してる。だから法の庇護も期待できなければ、

反面何をやつてもお咎めなしのところがあつた。

何よりシユマー自身が、ある意味國のような形を成しているから、たとえ國籍がなくても困るような事態にはならない。

けど、普通の人は違つ。

そうおいそれと國を捨てることはできないし、そうしてみても後のこととは見通しが立たない。それに不法滯在している人ともなれば、見付かるだけでも致命的だ。

だから母さんは父さんと相談して、2人で行くことにしたんだろう。

「でも、どうしてタベ行かなかつたの？」

ふと氣になつて訊いてみた。

「ううことは時間をあけるより、いきなり置みかけたほうが有効だ。

「眠かつたんだもの」

「……」

何も言えなくなる。

確かに母さん、うう人だけ……。

「ともかくそーゆーわけだから、これから行つてくるわ。ディアスがもう、車回して待つてるしね。

あんたは どうする？」

母さんが訊いた。

いつもそつだつた。どんな時も、どんなことも やむをえない理由であたしを戦場に連れ出したという以外は 母さんはあたしに、無理強いしたことはない。

「行かなかつたら……どうなるの？」

「どうつてことないわ。ちよこつとてこする程度かしほうね
それが嘘なのもすぐに分かつた。」

母さんが「ちょこつと」と付け加えるときはたいてい、普通の人
なら「絶対無理」と言つような場合だ。

「あたし、行く」

「いいの？ また辛い思いするわよ？」

「かまわないわ」

父さんや母さんが怪我をしたり 最悪死んでしまつへらになら、
自分が出るほうがよつぽどマシだ。

それに実を言えば、両親よりあたしのほうが強い。

生まれつきの強大な魔力と、考える以前に身体が的確に動くとい
う特異な能力は、パワー不足を補つて余りある。

「ありがと、助かるわ。

「めんね、頼りになんない親で」
そう言つて母さんがわたしを抱いて、頭を撫でた。
久々のこの感じ。

「うん、いいの」

ちょっとだけ泣きたくなる。

「ほり、泣いたら写影に撮るわよ。最近のがないから、狙つてるんだから」

「もうー。」

慌てて離れる。

母さんのほうは今度は、イマドを起しこなかつた。

「ほりイマド、あなたも起きなさい。寝てる場合じゃないわよ」

かなり乱暴に揺すり起こすと、『落とす』

「つてえ

あ、おはよーございます……？

「もう、寝かけてるじゃないーーー出かけるわよー！」

こきなしこう言われて、さすがのイマドもなにのことが、分からなかつたみたいだ。

「出かけるって、どこへですか？」

「黒幕のことに決まつてゐるでしょ

イマドが『なんのことだ?』つて顔であたしを見る。

「あのね、昨日観たつて言つ邸宅……あつたでしょ? あれこの場

所と持ち主、分かつたんだつて

「あ、なるほど。ナビ、どうして俺が出かけるんです?」「

「ルーフェイアが行くって言つか?

「わけのわからない説明を母さんがする。

「あ、ですか。んじゃ俺も……」「

でもイマド、それで納得してしまった。

「いい子ね。じゃあ行くわよ」「

「へ? もう行くんですか?」「…

「なによ、又句あるの?」「

「だつて俺、メシ……」「

まだ起きぬけで、いまひとつペースが上がらないイマドが、それでも母さんに抗議した。

けど、このくらいで動じる母さんじやない。

「つたぐ、なでまつてんのよ。戦場出たらい食べてるヒマないのなんて、ショットやうなんだか」「

「んな」と言われても……」「

タバあれだけ食べてたのに、しつかりお腹がすいてるみたいだ。

「しょうがないわねえ。レーニーサになんかもらってあげるから、車の中でも食べなさいね」

「あ、すいません」

なにか食べられると聞いて、イマドは少し元気が出たらしく、でも、結局なにももらえなかつた。

「カレアナ、大変よ!」

真剣な顔で、レーニーサさんが部屋に飛び込んでくる。

「ん? どうしたの?」「

「治安維持部隊に、ここへの出動命令が出るらしいわー!」

「はー?」「

母さんが間の抜けた返事を返した。

「治安維持部隊って、治安維持部隊よねえ？」

別に戒厳令も出でないのに、なんでそんなものがくるわけ？
なにかクーデターまがいのことがあつたならともかく、治安維持
部隊に出動命令が出るなんてよほどの話だ。

「それが……」

レニーさんが説明を始める。

ことの発端は、例のシーモアたちの抗争だといつことじだった。

「で、それが今日の予定だつたでしょ？」

だからそれにかこつけて出動して、いろいろ根こそぎ潰そうとして
ことらしいのよ

「 とんでもない連中ね」

母さんが毒づく。

けどこれで、最後のパズルの欠片がはまつた。
つまりちょっとのことでは動かないクリアゾンの代わりに、ダグ
さんとガルシィさんのチームを仲違いさせて抗争を起こさせる。そ
してそれを口実に、スラムの日障りな人たちを片付けるつもりだつ
たのだ。

「ともかく急がないと、大変なことになりかねないわ」

「それはそうね」

あたしも同感だった。

『治安維持』と言えば聞こえはいいけど、この場合は下手をす
ると、強盗集団よりタチが悪い。

なにしろロデステイオ軍の規律の乱れは有名だ。進軍した先で一
般市民に暴力を振るつことも日常茶飯事で、母さんは見つけるたび
に叩きのめしてた。

それがシティの人たちさえも嫌う、スラムへ進軍? したら……。

「まつたくいつもほほつたらかしなのに、今回に限つて連中も何考
えたのかしらね？」

それにコーニッシュ大佐とやら、とんだ食わせ者だつたわ。 穏健
派でならしてゐと思つたら、この騒ぎだもの

「どうこう」とへ。
母さんが尋ねる。

「EJの命令だしたの、マーク・シュー大佐だそりや
「リオネルが……？」

昨日と同じよひに顎に手を当てて、母さんが尋ねるんだ。
わざと言ひ漏れないとんだ。

「そりや、あなたは大佐を直接知ってるみたいだから、信じたくな
いんだろうけど。

でも軍に行つてゐる子が、出動の情報と一緒に流してくれたから、
間違いないわ」

「……」

しばしばの沈黙の後、母さんが口元したのはゼゼゼん別の言葉だ
つた。

「部隊が来るの、どうやらかかりそりや。」

「小一時間つてどこかしら？」

どこのどう情報を手に入れたのか、迷つたくな／＼サさんが
答える。

「……わ。それじゃ黒幕のどこへ行つてゐ暇はなさそうね。
せつかくの獲物を逃がすのは癪だけど、しょうがない、防衛戦に
回りましょ。」

「わ、行くわよ」

せつかく遊びに行つとしたら寸前で邪魔が入つた、そんな母さん
が言った。

「ちよ、ちよっと、あなたたちだけで？！」

もう少しすればクリアゾンの面々やらひぢちゃんたちのグループ

が揃つから、それまで待ちなさいよ

「へーきへーき、このメンツだつたらビールの一つやつ、軽く壊せるから」

しかもどういわけか、イマドの襟首をつかむ。

「メシ……」

「じのいの言わないのー。」

引きずられてく彼を追いかけて、あたしも部屋を出た。隣の部屋へ抜けて、それから店のまつへ出る。

「どこへ行くんだ?」

「そりや、治安部隊叩きのめしに決まってるじゃない」

「あんたたちが? それに子供まで連れてくのか?」

店にはもう、クリアゾンの人たちが集まっていた。ボスの顔も見える。

「あんた、何考えてるか知らないが……これは俺たちの問題だ。出る必要はない」

「そもそもいかないのよー」

きつい調子のボスの言葉に、母さんはけろりと答えた。

「ディアスは『いい』の出で、あたしは『ちおう』の連れ合いだもの」
それから一転、鋭い笑顔になる。

シユマ一家の歴戦の猛者をも震え上がらせる、凄絶としか言いようのない微笑み……。

「悪いけど、あなたたちが束になつてかかつても、あたしたちは倒せないわよ」

しん、と店の中が静まり返つた。

「というわけで、最前線に出させてもいいわ。
だいいち連中の起動兵器と渡り合ふのは、現役で傭兵やつてるあたしたちぐらいでしょ？」

「まあ、そうだろうが……。」

だが、この子たちまで連れてくことはないだろ。子供の戦力なんぞ、タカがしれてる

言られて悲しくなつた。

あたしの戦闘能力は……普通じゃない。

「言いたいことは分かるけど、そう言わないで。あたしだつて一応親なのよ。連れてかないで済むなら、そうじてるわ。
けどこの子たち 並じやないのよ」

ボスが複雑な表情になつた。

きつと母さんの言葉の裏を読み取つたんだろう、腕組みをしながらため息をつく。

「……そしたらお嬢ちゃん、これを持っていきな

「え？ でもこれ、大切な……」

ボスがあたしに差し出してくれたのは、昨日の短刀だ。

だけどこれは、亡くなつた娘さんの思い出が詰まつてゐんじゃなかつただろうか？

あたしが躊躇つてゐると、ボスがふつと笑つた。

「これはな、持つてゐる人間に幸運をもたらすつて言われてるんだ。娘が死んだときもそつと。俺はこれを持つてでかいヤマを片付けて、意氣ようようで……。

けど欲しがつてた娘は、ちょっとしたことで殺されちまつた」

視線が下へ落ちる。

「わつと娘に渡してりや死ななかつたんぢやないか。くだらないとは思いながら、いつもそう思つのさ。だからお嬢ちゃん、持つていいくといい」

「わかりました」

短刀を受け取る。

「わ、もたもたしてらんないわ。わつと行つて片付けるわよ」この話はこれで終わり、そんなふうに母さんが言つ。

「俺たちもすぐに行くからな」

「あ、そしたらその前にちょっと頼まれてよ」
ぞくりとする。

あの母さんの、子供みたいな悪戯つぽい表情……。

「こゝの人たちには、当然知らせるんじょ？」

「もう使えるだけの人間使つて、知らせてる最中さ。もつとも知らせたとこで、家にこもつてゐるくらいしかテはないんだがな」

「それなんだけどね」

なんだかボスと相談を始める。

「確かにそれだつたら、イケそうだな
「でしょ？ そしたら頼むわね。あたしはリオネルに連絡入れたら
すぐ出るわ。

「レーナー、通話機借りるわよ
慌しく母さんが奥へ行消えた。

「メシ……」

隣ではイマドがまだぼやいている。
あまりにも可哀想だつた。

「あのね……携行食でよかつたら、あるけど？」
「それでいい」
「あつとよつぽどお腹がすいてるんだろう、いつもなひらちゃんとし
たものを食べたがるイマドが、あつさつ妥協する。

「まあったく。

そんなんじや戦場出たら生き残れないわよ？」

「もひ、母さんのせいでしょ！」

いつのまにか戻ってきた母さんに、やすがにあたしも言に返した。
なにしろじきなり振り落として起こした上に、口クな説明もしないで巻き込んで、こんな迷惑な話はない。

「だいいちイマド、あたしと違つて戦場でなんて育つてないんだから…。なのにそつしろなんて、ひどすぎるわ…」

けびあたしが真剣に怒つてこるのと、母さんが笑い出した。

「なにが可笑しいのよ…」

「あ、『ごめん』『めん』。でもあんたがそういうふうに言つて、初めて見たもんだから。

まあ確かにそうね。いくら急いでたとはいえ、ちょっと荒しすぎたわ。悪かった

意外なぐらい簡単に、母さんが謝る。

「いや、とりあえず食つたからいいです。

あ、でもあとで、なんか『馳走していただきても』

「ルーフェイア、あんたとんでもないの選んだわね

「？」

あたしが何を選んだんだって…

意味がわからなくて隣のイマドと母さんとを見比べたけど、どう

ちも笑うだけだった。

けつきよく教えてくれるつもりはないらしい。

「ま、ともかく行きましょう。じゃあボス、やつやのいる、ようこへお願いねー

「ああ。

お前たち、絶対にムリはあるんじゃないぞ?」

「あー、」

それから店を出て狭い廊下を抜け、階段を上ってやっと通りへ出た。

冬なのに時間がまだ早いせいが、あたりはやつと田が昇つたくら
いだ。

いるのは当然父さんだ。

「ディアス、ごめん、行き先変更になっちゃった」

「どうだ？」

「こののはじめから、だから、父さんは驚きもない。

「治安維持軍が来るらしいの。どうちへ行けばいい？」

「向こうだな」

言いながら父さんが車を降りて、わらわとお別れ。

る程度の所で、軍が待機するらしい。

車に乗らずに済んで、よかつた。

内心ほつとする。

いの両親の運転ときたら、かなり荒っぽい。特に母さんなんて

言つと、信号を無視して突つ込んでみたり強引に道の真ん中でロターンしたり、ともかくムチャのしどおしだ。

けど今は、もつと別に考えなきやならないことがある。

「母さん、ローテステイオ軍の兵装つて、最近変わつた?」

「そうでもないわよ。一般兵はまるつきりいつしそうだし、上級士官も大差ないし。

もつとも人形なんかを持ち出されたら、それなりに気合入れなくちやね」

「そう……」

その「人形」が問題だつた。なにしろあたしが最後にそれを見たのは、1年半も前だ。新型が出てるかもしれない。

俗に人形と呼ばれるそれは、要するに「ゴーレム」だ。無機物を何かの形にして、思い通りに動かせる。ただ元が生き物じやないから、思考パターンが単純で、簡単な事しかできない。

けど最近は魔視鏡の操作技術を取り入れて、遠隔操作でかなり高度なことが出来るようになつてゐる。それに噂じや、操縦者なしで動くものも出てるつて言つ。

かといつてこんなのは機密だから、よく傭兵で参加してゐる父さんや母さんも知るわけがなかつた。

「まあ、出たとこ勝負ね。

もつともあんたじや、そうそつ負けたりしないでしょ?」

「そんなの、勝手に決めないでよ……」

戦場に「絶対」なんて、ないのに。

「そこで拗ねないの」

「拗ねてないわよ!」

“いつも幽也さんと話してると疲れる。

「おひやつへ。
おひやつ、イマド、これ持つてきなさい」
ひとと無造作に母さんが、クリスタルの結晶のよつなものを放り
投げる。

「 つと。あれ？ これ精霊ですか？」

「 そうよ」

イマドの手の中からちらりと見えた、淡い薄氷色。たぶん氷系の精霊だ

「 炎防いだりできるから、上手く使いなさいね」

「 はい」

母さんがイマドを心配してくれて、理由はわからないけど、なんだか嬉しくなった。

「 一般兵は無視していいわ。そっちの方はみんなが、なんとかしてくれるだろうから。

あたしたちは、人形だけに的を絞るわよ」

「 わかった」

確かにあれと渡り合える人間は、このスラムにはそれほどいないだろう。

母さん、いちおう考えてるんだ。

いい加減なことでは並ぶ人がなさそうだけど、こと戦闘となれば、うちの両親は平均よりずっと上だ。

「 人形つて、どんなヤツだよ？」

「 種類はそんなに多くないの。3、4種類くらい……かな？」

尋ねてきたイマドに、記憶を手繕りながら説明する。

「 行動はそんなに複雑じゃないから、分かれば避けるの、簡単だと思つ。あと魔力が不安定だから、魔法攻撃すると暴走して倒せるの。

ただ新型は、ちょっと……

もつとも街中だから、それほど凄いのを持ち出すとは思えなかつた。

「それだけでも分かつてりや、だいぶ違うつて。サンキューな

「うん」

少しだけまた嬉しくなる。

「イマド、ムリしなくていいわよ。伝令代わりにあんた連れてきたんだから。

ヤバいと思つたら、さつさとルーフュイアに任せなさいね

「パシリかよ」

「さつとも言づかしりっ?」

気に入らなさうに言つた言葉を肯定されて、イマドがますます嫌そうな顔になつた。

それを見た母さんが、またけらけらと笑う。

「そんな顔しないの。ただのパシリならぬ、別にあんた連れてこないわ。

あたしが念話でこつちの状況伝えるから、それをルーフュイアに教えてやつて」

「あ、なる……つてあれ? ルーフュイア、お袋さんとお前で直接できねえのか?」

「うん、ダメなの」

意外そのものといふ響きの言葉を、あたしは肯定した。

うちの家系は血が濃くなつてゐるせいか、念話をはじめその手の強力な力を持つ人間が多いけれど、あたしにはどういふわけか全くダメだ。

そのつえ家の誰も、あたしへの「接続」は出来なかつた。

「ふつう親子は出来るらしいけどな？」

「ま、いいか。おれとお前のお袋さんなら、けつこう」

「なにがいいんだ？」

「イマドの言葉に別の言葉が重なる。

「ゼロールさん？」

重なつた声の主は、あのジャーナリストの人だつた。

「どうしたんですか？」

「どうした、じゃないさ。治安維持軍がいきなりスラムへ向かつたりしたら、これは事件だろ？ それもかなり非道な部類になるやつだ。

だからきつちり記録に残してやるわと思つてね
言いながらこの人が、手にしてくる写影機をちよつと持ち上げて見せた。

「こいつに撮れば、そう簡単に言い逃れはできない」

「フリーの特権つてワケね」

母さんの茶々に、ゼロールさんはこやつと笑つてうなづく。

「自分で自分のメシ代稼いでるからな。誰にも文句はいわせないさ。

というわけで、僕も同行させてもらひよ」

「美人に撮つてくれるならいいわよ」

「母さん……」

分かつてゐるのか分かつてないのか分からぬ、母さんの言動にため息をつきながら、あたしはみんなと一緒に南へと歩を進めた。

Natress

ああもう、やんなつちやうな。

みんなまだ寝ぼけてるか起き出しあきたくらいなのに、あたしつたらひとりで早起きしてご飯作り。

やつぱり誰かに押し付けちゃったほうがよかつたかなあ？
けどそうすると、めちゃめちゃに不味いもの食べさせられかねないんだもの。

「おーい、そろそろできそうか？」

「つむさいなあ！ 人に作らせてるんだから黙つて待ちなさいよ

「あ、悪い悪い」

ケインったら口ではそう言つてゐるけど、顔が催促してゐる。
ちなみに今朝のメニューは割合簡単で、野菜をいっぱい放りこんだスープとパン、それにサラダ。あとは……卵料理作ろうかな？
箱を開けて卵の数を確かめたけど、どうにかありそудだし。
じゃあ、えつと人数分だから……。

「おい、誰か出でくれ～」

第一弾の卵を割ろうとした時、ドア当番のウハ一が悲鳴をあげて。

「もう、しようがないなあ

みんながまだ着替えてたりなのを見たあたし、仕方なくドアへと出た。

背伸びをして覗き窓を覗く。

あれ？

慌ててドアを開けた。

「なによ、 こんな朝早くから。」

「俺だつて好きで来てるんじゃねえつて」

「ドアの向こうにいたの、なんとダグとその手下。そりや今日の祭りは延期になつたけど、だからつてねえ……。」

「ともかくガルシイのやつに会わせてくれ。とんでもないことになつちまつたんだ」

「なによ、 それ？」

「いまやうこいつにとんでもないつて言われても、ちよつと説得力ないのよね。」

でも、ダグつたら真剣な顔で言つたの。

「治安部隊が来るつてんだよ。」

「うそ？！」

さつきのナシ。

これは確かにとんでもないもん。

「と、ともかく入つてよ。ガルシイ起きてるから」

事態が事態だから、慌ててこの男たちを中へ招き入れる。

「悪いな。えつと…… こつちか？」

「そつちは台所！ いつかだつてば」

ほおんと、これでよくコーダーやつてるよね。

うちのガルシイはすつじい切れ者だけど、この人ときたらじつか抜けてる感じだもん。

まあ、誰か下に凄いのがついてるのかもしれないけど……。ドアの外から、声かけてみる。

「ガルシイ、 入つていい？」

「構わないが、なんだ？」

「んとね、ダグが来たの」

一瞬の間。

さすがのガルシィも、これにはびっくりしちゃったみたい。

「あ、別に何もなくて入れたんじゃないのよ？」

「なんかね、治安部隊が来るって言つもんだから

「なにつ！」

ガルシィをもう一段驚かしといて、あたしドアを開けたの。

「その話、本当なのか？　だいいち、どうしてこうした話が急に持ち上がったんだ？」

ともかく、みんなをどうにかしないと……」

そうよね。

治安維持部隊なんて来ようもんなら、あたしたちまつれきに槍玉に上がるちゃうもん。

それにこの辺の人たちも、避難させなきゃ。巻き込まれちゃったりしたら、良くて逮捕、最悪だと収容所送りになりかねないし。

「ともかくウソじゃねえって。

なにせレーニーサさんから連絡あつたんだ。で、町中に知らせて回れってや」

後ろからついてきたダグもそう言つて。

「部隊はいつ来るんだ？」

「よく知らねえけど、だいたいあと3、40分がそこらつて言つてたぜ」

「そお？」

隣でなんとなく話を聞いていたあたしも、さすがに責めちゃつた。だつてたつたそれだけじゃ、いちばん逃げなきゃならない小さい子連れたお母さんとかが、逃げらんない。

いうなるとあとは、家の中に閉じこもつてゐるしかないんだけど……。

けどこの国の治安部隊つて、はつきりと言つて「治安悪化」部隊。もう勝手に上がりこんできて貴重品持つてつちやつたり、食料盗んでつたり、その辺の人を殴つてストレス解消したり。

若い女人なんてなにされるかわからんないし、ちつちやい子だつて危ないつたらありやしないし。

なにしろ子供がちょっと兵隊に逆らつただけで、家族」と地区の収容所に入れられちやつたつて言ひ、嘘みたいな話まであるんだもの。

「ともかく手がたりねえ。うちの連中はもう二丁目へまわしてあるけど、お前んとこも手伝つてくれ

「分かった。

「おい、お前たち！ のんびりしてゐヒマがなくなつたぞ！ ガルシイがあつさな声を出して、いきなりアジトが騒がしくなつて。

「治安維持部隊が出動するらじし！ 町中に知らせるや！

ダリード、お前はアサルタンテとその下の連中に、片つ端から連絡しろ。方法は任せる

ガルシイに命令されて、ダリードが飛び出してつた。

ちなみにアサルタンテつてのは、強盗を専門にしてる少年グループのこと。もちろんあたしたちなんかより、グループの数も人数も多いの。

けどほんと、うちのリーダーつて切れ者よね。

こゆとこすぐ頭まわつて、どんどん指示だしてくれるもの。

「もたもたするな、俺たちもすぐに出るや！」

「待てよガルシイ、朝メシくらい食わせてくれつて

「ダメだ」

容赦もないけど。

「あ、朝ご飯途中まで作つてあるから。適当にサラダとパンとスープ、つまむくらいならできるよ」
「ひやあ、ナティ、恩に着るぜ」
「じゃああとで、なんかプレゼントでもしてね」
「ひでえヤツだな」
ムツとすること言つから言つ返す。

「いいわよ、そしたら食べさせないもの」
「ひええ、ウソ、ウソだつて！」
「ナティ、なに朝から漫才してるんだい」
髪を乾かし終わつたシーモアが、入ってきた。

「あたしのせいじゃないもの。それよりシーモア、話聞いた？」
「ああ」
さすが。
頭洗つて乾かしながら、シーモアつてばガルシイの言葉聞いてたみたい。

「武器、ちゃんと出した?」

「あんたねえ。」

あたしだつて学院生だよ。武器出してないわけないつて
彼女がいつもの不敵な微笑みで返してくれる。

そうだよね、やつぱりこうじやなくつちや！

「部隊はやつぱり、南から来るのか?」

立つたまま食べながら訪ねたガルシィに、ダグが答える。

「レーーちゃんはそう言つてたな」

「そうすると、南の住人がいちばん先だな。それぞれ一区画づつ受け持つて、その先はその住人に任せるとしかないか」

「オッケー、そしたら俺、食い終わつたから行つてくれる。一丁目の44番地と、その北側な」

「頼んだぞ」

まず先陣を切つて、ウハーが出てつて。

「さ、うちらも行こう。

ガルシィ、あたしはナティと一丁目の29番と30番まわるよ

「わかった。俺もすぐに行く」

あたしとシーモアも食べ終えて出ようとしたとき、また人が来た。

「あ、レードさん?」

クリアゾンのメンバーが直々にここ来るなんて、珍しい話。

まあ、非常事態だからなんだろうけど。

「お、ダグもいるのか。」りや都合がいい。もつお前り、話は聞い

てるな？」

「はい、聞いてます」

さすがのガルシィも、この辺の人相手だと一応口調が丁寧。

「そのことなんだが、ボスから付け加えだ。いいか……」

気になるから、ちょっとだけ聞き耳たててみる。

「どうせこの時間じゃもつ、逃げるのはムリだ。だからみんなして、家にこもるしかないだろ。

そこで、だ」

これには思わず、あたしも身を乗り出しちゃって。もちろん説明がされるにつれ、みんなの顔も輝き出しつ。

「そいつは面白やうじやねえか

「うん、ぜつたいい！」

「よし、そうと決まつたら、急いで知らせに行かなきゃね」

急にアジトの中が活気付く。

「ナティ、行け。」

「もちろん」

「あ、ちょっと待て」

ナビ出でにこうとしたら、リーダーに呼び止められちゃつて。

「もう、なによ。時間がなにって言ったの、リーダーでしょ？」

「ああ。だからこれを使え」

「あ……」

思わずシーモアとあたし、ここでじりじゃつた。

なにしきリーダーが出してくれたの、浮遊ブレード。板に小さい浮遊石が仕込んであって、ちょっとだけ宙に浮く。だから雪の上のソリみたいに、乗つてちょっと片足で地面蹴るだけで、すいすい進

む。

あとは重心を変えたりして、自由自在。高価いものだから滅多に使わせてもらえないけど、これがあればグンと早く知らせに行ける。

「ホントにいいのかい？」

「非常時だからな。それにちゃんと人数分あるから、気にしなくていいぞ」

「やつたね！」

あたしとシーモアと、ひとつひとつ受け取つて。

「ナティ、あんたちゃんと乗り方覚えてるかい？」

「そういうシーモア」」、大丈夫なの？」

もつとも言う気持ちは、わかんなくもなかつたり。だつて実は浮遊ブレード、学院じゃ禁止。とはいへ、けつこうみんな見つからないようにして乗つてはいるんだけど。

「けどこれなら、一丁目まですぐに行けるよね？」

「あんたが転ばなきゃ行けるわ」

「もう！」

そしてあたしたち、通りへ飛び出したの。

Ruffeir

「あんたたち、なに民間人に刃向けてるのつー。」

母さんの怒声と共に銀光が閃いた。

剣をはじき飛ばされて、兵士が膝をつく。

「ずいぶん強い人だな」

くつついてきたゼロールさんが感心した。

「うちの両親、いちおう現役で傭兵稼業こなしてますから。

大丈夫ですか？」

答えながら、兵士に素手で立ち向かおうとしていた男の人に、あたしは駆け寄った。

「た、助かったよ。もうダメかと思った」

男の人の後ろには奥さんと、抱きかかえられた赤ちゃん。

ゼロールさんがすかさず写影に撮った。

「女房と子供を、スラムの外へ出そうと思つただけなのに、途中でこいつらに出くわしちまって……」

「おっさん、もう出るのはムリだよ。早く家へもどつた方がいい

「シーモア？」

声に振り返る。

炎色の髪をした、見慣れた姿があった。

「こっち、終つたよ あれ？ ルーフェイアじゃない」

ナティエスもどこからか出でてくる。

「2人とも、どうしてここにいるの？」

「そんなんびっくりした顔しなさんなって。

ボスなんかに言われてね、スラム中に知らせてたのを」「あ、それで……」

「どうりで辺りが静かだったわけだと、納得する。

「けどよ、この状態で知らせたって無意味じゃねえのか？ よほど
のバカじやなきや、見りやわかるぜ」

「別にただ『来た』つて、言つてるわけじゃないからね」

「？」

それ以外に、何を伝えてるんだろ？

「はい、お喋りはそこまでね。やることが山積みなんだから」
一通り兵士を蹴散らし終わつた母さんがもどつてきた。
「連中いっただん引いたから、次は本格的に来るわ。あたしはティア
スの方へ回るから、ここは頼んだわよ」

「わかった」

さつき父さんから聞いた話じや、このスラムで人形を持ち出せや
うな広い通りは、じこともう一本しかないのだといつ。

「イマド、連絡役お願ひね。

んじや向こう、片づけてくるかい」

それこそ片づけものをしてくるような調子で、母さんの姿が路地
へ消えた。

「緊張感とか、カケラもねえ人だよな」

「だから、言わないで……」

イマドの言葉に思わずため息をつく。

しかもあれで、意外にも失敗しないといつていつのが……。

「ほんと、似てない母娘だね。なにせ

なんだい、ありや

何か言いかけて、シーモアが違う方を指差した。

「やだ、なにあれ」

「報道関係……みたいだけ……」

動影機を担いだ人と取材人の組み合わせだから、それ以外にはちよつと考え方なかつた。

しかももう、放映が始まっているらしい。

『えへ、現場です。治安維持部隊はすでに到着しましたが、入り口付近で抵抗に遭っている模様です。

人通りはさほど多くありません。おそらくは少年たちの抗争とから逃れるため、みな自宅にこもっているものと思われます。

あ、すみません。どちらへ行かれますか？』

「つむせえやつ！ てめえなんかさつさと踏み潰されちまえ！」

取材人にいきなり集声機を向けられた人が怒鳴った。追いすがつて何か聞こうとしても、その人は知らん顔で行ってしまう。

取材人が仕方なく、別の通行人に集声機を向ける。

『あの、子供たちが派手に抗争をやるとの話ですが、どうですか？ やつぱり怖いですか？』

「なにバカ言つてんだい、あの子たちの抗争なんかどうつてことないよ。なにせあの子らは、あたしらは絶対巻き込まないからね」おばさんが言い返す。

『ではなぜ、閉じこもつたりするんでしょうか？』

「あんた、頭悪いね。軍が来るからに決まってるじゃないか。 つたくあいつらときたら勝手に上がりこんで貴重品持つてくれ、せつかくの食料は台無しにするわ。

拳句に若い娘さんなんか、なにされるか分かつたもんじやないし

『ね』
『は、はあ……』

おばさんの物言いに、取材人が絶句した。

後ろの動影機のほうで、「カット、カットだ！」とか「もう流れ

「ちやいました」と言つて、報道の人たちが慌てている。そのあとメモを持つた若い人が、取材人のところへ駆けてきた。

メモを見て、取材人が姿勢を正す。

『えへ、ウワサには聞いておりましたが、こここの住人は軍に対し、かなり間違つたことを吹きこまれているようです。

やはりこれも、教育が行き届かず……』

隣のナティエスが息をのんだ。シーモアとイマドの表情も険しくなる。

「なんかすっげえ腹たつな

「ぶん殴つてやろうか？」

「でも、動影で流されちゃうよ。まずくない？」

戸惑いながらあたしたちが遠くから見ているなか、取材人は構わず継続している。

『我が番組の調査では、こここの子供たちの4割が学校に行っておらず、路上でスリやひつたくりをしながら ?!!』

好き勝手なことを言つていた取材人の言葉が、急に途中で途切れた。

考えるより先に身体が動く。

「ヴェゼ・ジーヴルフ！」

なんのはずみか取材人へ迫つてきた、人形の足元に冷氣魔法を放つと、思惑通り片足が凍りついた。

「ルーフェイア、あれじや倒せてねえぞ」

「大丈夫」

言つているうちに派手な音とともに人形が転倒して、兵士が2・3人巻き込まれる。

「情けねえ……」

「あの人形、旧式で頭が重くて、足元狙うとひっくり返るの
呆れてるイマドに説明した。

「ヤダ、みつともない」

「つていうか、それで兵器つて言うのかね？」

ナティエスとシーモアも呆れ返る。

でもそれ以上の反応を見せたのが、取材人たちだった。

『ななな、なんで私たちを狙うんだ？！　私たちは、その、無関係
な……』

集声機を握つたまま慌ててると見ると、ここがどうこういう場所
か全く分からずに取材してたらしい。

「ドンパチやつてるとこで、なにワケわかんねえこと言つてんだか
「きつとさ、お弁当とかおやつ、持つて来てるんじゃない？」
あたしが牽制に魔法を放つ後ろで、みんなが容赦のない突っ込み
をした。

向こうではまだ取材人が騒いでいる。

『だいたいっ、わ、私たちを狙わないというから、わざわざ それに上手く軍を擁護する報道をしろって言つててきたのは、そもそも……』

わわわっと叫んで、後ろから取材人の仲間らしい人が集声機をもぎ取つた。

怒声が飛び交つところをみると、これもしつかり放映されてしまつたらしい。

「だからこんな企画、ヤだつて言つたんだ！」

ぼやきつづける報道陣を見るつち、なんだか可笑しくなつてくる。理由はわからない。ただ慌てふためくその姿が、可笑しくてたまらなかつた。

「ははっ、ははは、マジ マジ、バカじゃねえの」

「馬脚つて……あはは、このこと、よね……」

「くくく……ナマで漫才……はは 放映、しますつて……？」

イマドもナティエスも、シーモアも笑い出す。

「つまりは眞実を知らしめるふりをして、ウソを流そうとしてたわけか。

報道に携わるものとしては、最低の行為だな

あたしたちとは対照的に、ゼロールさんの声は冷たかった。同業
なだけに許せないらしい。

厳しい表情のまま、つかつかと歩み寄る。

「ガマランド、キミがいながらよくこんな話に同意したな？」
どうやら知り合いがいたみたいで、きつい口調で問い合わせた。

「そつは言つけどな、じつちだつてクビがかかつてな……」
「だつたらこの仕事、辞めたほうがいいんじやないか？」
知り合いの人が言葉に詰まる。そこへゼロールさんはたたみかけ
た。

「ジャーナリストが嘘を報道したら、おしまいだぞ。

その集声機と動影機はなんのためにある？ 嘘を流して給料を稼
ぐためか？ そうじやないだろ？！」

放送局 たぶん の人たちがうつむいた。

あたしがさつきから魔法で治安維持部隊を牽制しているから、周
囲は嘘みたいに静かだ。

「俺の言つことが分かるんだつたら、今すぐ妙な報道は止めるんだ
な。代わりに事実を撮つておけ」

言つてこの人が、あたしたちのほうへ振り向く。

「俺はこいつで必ず事実を撮るから、心配しなくていい。

なにせ正当防衛だしな」

「そしたらさ、なるべくいろいろ撮つてね」
しつかりとナティエスがリクエストを出した。

「きっとね、これから面白いことがあるから

「面白いこと？」

思わず話題を返したけれど、ナティースもシーモアも笑うだけだった。

「あ、すぐ」に分かるや。 つと、また来たね

「一般兵か。めんどうせんな~」

「イマジがほやく。

「雑魚はスルーで、一気に中ボスかラスボスってワケでやいかねえのか?」

「そんなんマチャな……」「……」

なにかのゲームじやあるまじ。

「いや、多分やうでわかると思ひよ」

「え?」「……」

さすがに呆れていたあたしの後ろから、シーモアがイマジの顔

を肯定した。

「でも、田の前に兵士　　トオーノ・センテンツアツ！　　すぐ向こうのアパートで、兵士2、3人が上がりこもつとしているのを見つけて、としさに魔法を唱える。

彼らがこつちに気付いて、何か言いながら駆けてきた。あたしも太刀を構える。

「つたぐ、スラムのガキどもはほんとに羨がなつてないな。

ほら、ケガしたくなかったら　　？！」

そう言いかけた兵士の頭へなにかが命中した。

「な、なんだ、どこだ？！」

急に倒れてしまつた仲間の周りで、他の兵士がうろたえる。

「るつさいね！　あんたたちこそその辺ぶち壊したりして、何が治安維持だい！」

驚いたことに何階建てかのアパートの窓が開いて、住人たちが身を乗り出していた。

「ほら、これでも食らつて泣いて帰るがいこさ！　　」

また何かが降つてくる。

「そりだそりだ、ここはお前らの好きになんかさせねえぞっ！」

「しつぽ巻いて帰つて、母ちゃんのオッパイでもしゃぶつてなあちこちから、罵声と共にありつたけの物が投げられた。

お鍋、やかん、酒瓶　　これはちょっと危ない　　ボール、なにかの魔道具、タライ……。

「げげ、ちょっとこれは止めてくれよ　　」

イマドが慌てて避けたのは生ゴミだ。

「せりひ、じゅぢトガりな！ あんまり前にいると巻き添え食つよ」

「ひ、ひん」

シーモアに呼ばれて急いで下がる。

「せりひ、じゅぢてた面白こじとひ、これ？」

「ああ」

「あはは、また当たつた当たつた」

ナティエスが手を叩いて笑つてゐるといつ、もう治安維持部隊は大混乱だ。

確かに生ゴミが降つてくるのを想定した訓練は、あたしもしたことはないけど……。

もつとも実害といつことだつたら、生ゴミはまだいじほつだらう。これが植木鉢とかフライパンとか包丁だと、命に関わる。

でも、やつぱりちょっと嫌かな？

あたしも大抵のことは平氣だけじ、どうひらかと言へば生ゴミは頭からかぶりたくない。

「しつかし、よくこんなこと考えついたな？」

「あたしらじやないんだ。クリアゾンの誰かが考えついて、伝令回したのさ」

「クリアゾンの誰か……？」

唐突に、母さんがボスに何か言つてた光景を思い出す。あの時の母さん、なんだかひどく嬉しそうで……。

「お前のお袋だつたのか」

「たぶん……そうだとと思う」

きつと読み取つたんだろう、何も言わないのに声をかけてきたイマドに、あたしはため息をつきながら答えた。

ほんとに母さんときたら、やることが突拍子もない。

「だから、だから私は、こんな場所への出動はイヤだつたんだ！」
向こうのほうでは何か布じゃなくて、赤ちゃんの使用済みオムツらしいの直撃を受けた上級士官が、愚痴をこぼしていた。
この仕官は気が進まなかつたものの、命令に逆らひなくて嫌々ここまで兵を率いて来たらしい。

「そんなにイヤなら、来るんぢやないつてのさ」
「それは……無理よ」
毒づいているシーモアに、あたしは答えた。
「命令に従わなかつたら、どうなるか分からぬもの良くても營倉入りだらうし、時と場合と所属している国が悪かつたら、死刑も有り得る。

「向こうさんもお氣の毒つてやつた。タイヘンだな」
イマドが少しだけ同情したような声を出した。
あいかわらず向こうは大混乱だ。

「ええい、何をしているか！ 早く人形を出せっ！」
業を煮やしたのか、さつきとは別の上級士官がそう叫んだ。
「ともかく構わん、片っ端から叩き壊せ！」

なんてめちゃくちゃな。

およそ軍人とは思えない命令に呆れる。
でも治安維持部隊の兵士たちはそれを真に受けたらしくて、次々
と人形が前へ出てきた。

じうなると……どう考へても一般の人やシーモアたちには荷が重
くなる。

思つてゐるうちに一機が連射砲を撃つて、慌ててスラムの人たちが
部屋の中へと引っ込んだ。

あの人たち、なにもしてないのに。
ひどく腹がたつてくる。

「あのね、ここ以外の状況つて分かる？」

向こうの部隊を見据えながら、あたしはイマドに聞いた。

「ちょっと待つてくれな。

向うはぜんぜん平氣だつた。あと、ほかの細い道なんかはクリアゾンの人が出て、防衛線張つてくれたらしいぜ。
とりあえず、お前はそこをしつかり守つてろつて。で、なんか突

破されたら『影増やすとか、お前のお袋言つてるぞ?』

「……」

最後の一言は余計だ。

とりあえず牽制に魔法を放つておいて、あたしはさつと頭の中で戦力を計算した。

シーモアとナティエスの武器は、基本的に飛び道具だ。当然遠距離からが向いている。あたしとイマドは近接武器で精靈も使ってるから、これもポジションは決まりだつ。

できれば、もつちょっと人数がほしいんだけど。

守り切れないことはないけど、この人数差だと手加減ができない。ただの防衛戦なら、できる限り死傷者は出したくなかった。

「ルーフェイア！」

考え方をしていたあたしを心配したんだろう、イマドが叫ぶ。

でも、戦場で育つたあたしの感覚は、しつかり周囲を捉えていた。

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ」
振り向きながら呪文を唱える。

「ケラウノス・レイジッ！」

魔法が決まって、人形が倒れた。

「さつきのとは違つな」

「うん、このほうが後継機で、新しいの」

もつとも後継機というのは呼び名だけで、中身はまったく違う。その辺はローテステイオ軍の傭兵隊にいたとき、たまに部隊に配備されたからよく知つていた。

長年使われていた旧式の頭でつかちとは違つて、これは見かけもスマートだ。

「滅多に回してもうえなかつたけど、これがあると戦闘が楽だつたの」

「……んなもん、一撃で倒すなよ」

「そう言われても……」

「こんなの相手にモタついていたら、それだけ戦闘が不利になる。

「2人とも、なに和んでんのさー」

「和んでるわけじゃ、ないけど……」

「まだ戦闘 자체が、差し迫つた状況になつていない。

「ともかく、この通りまつりだじつかしないこと ひとつ、やつと援軍が来たね」

シーモアの言葉どおり、向こうからガルシィさんやダグさんが来るのが見えた。

どうしよつ。

人数が増えたのは嬉しいけど、ヘタに前線へ出てこられたらかえつて危ない。

「ねえシーモア、みんなの主な武器つてなに?」

「あん? まあだいたいナイフか銃かな?」

「そり……ナティエスは苦無よね?」

彼女はいつも、猛毒を塗った苦無を得物にしてくる。

「あ、でもあたし、ここにいるときは銃も持つてるから」

「そうなの?」

けどそれなら、かなり戦法の幅が広がる。

あたしはやつと周囲を見回した。

割合まっすぐな通り。少し奥には十字路と停められた車。だつたり……。

「あたしとイマドで、前線に出るわ。

シーモアたちは後ろの十字路と車使って防衛線とつて、そこから弾幕張つて。もし自動小銃とか手榴弾があつたら、使つちやつていから

「つ、使つちやつて……」

ナティエスが信じられないといった顔になる。

「ナティの言つ通りだよ。あんたはまだとかく、イマドはびつな

「平気よ」

自信があった。

なにしろイマドは、母さんを上回る能力の持ち主だ。だとすれば、間違いない、周囲をあたし以上に把握できる。

「イマド、ホントに平氣?」

「どうにかなるだろ」

心配したナティエスが訊いたけど、彼のイマドの答えもあわかつしていた。

「つたく、あんたら2人ときた日じゃ……。
ま、いいか。そしたらともかく頼むよ」

シーモアたちが下がる。

「足枷がなくなつたつてか?」

「そんな言い方したら、悪いわよ……」

確かにシーモアたちにそばにいられる、巻き込みやうで力が出
し切れないけれど、それはみんなのせいじゃない。

「それより、人形狙つてね?」

「こうか?」

いきなり1機の旧型が、小さな爆発を起こしてひっくり返つた。
ついでに吹き飛んだ腕が、向ひのまつで兵士の頭に命中する。

「な、なにしたの……?」

「魔力暴走させただけだつて」

どうつてことない。そんな調子でイマドが説明した。

「心のないもんに魔力むりやり宿せると、案外簡単に暴走すんだ
よ。だから外からちょっと後押しすると、すぐああなつまうんだ」

「そ、そう……」

返す言葉が無かつた。

なにしろ理屈では知っていたけど、実際に見たのはあたしも初めてだ。

実家で開発してゐる兵器、急いで全部に魔力干渉防ぐ機能つけな
きや。

イマドみたいな能力の持ち主が何人も出たりしたら、完全に戦略
が崩れてしまう。

「さ、行こうぜ」

「うん」

2人で最前線へ飛び込んで、目に付いた人形を順番に叩いていく。

振り下ろされる腕をかいぐぐつて懐で魔法を放つと、中の思考石
が暴走して、次々と動きが止まつた。

もつと効率がいいのはイマドだ。間合いに入り込んだ人形を、あ
つという間に暴走させて片付けている。

しかも慣れてきたみたいで、視線さえ向けずに倒してた。
シーモアたちも上手く弾幕を張つてくれていて、部隊は完全に足
止めされた格好だ。

「なんだ、何がどうなっている…」

「それがよく……」

混乱する治安維持部隊のやり取りが耳に入る。

「ははっ、慌ててやがる。正規軍のくせにじょうがねえな」

「普通……びっくりするわよ……」

大規模な軍隊と遭遇したならともかく、相手はこれ以上ないくらいの小人数だ。

「けどよ、シエラの先輩たちなんてたいてい、この程度の人数で任務行くぜ？」

「治安維持部隊は、傭兵隊と戦つたり、しないもの」

言いながらもう一休漬した。

隣でイマドが、真後ろから切りかかってきた兵士を躊躇して、振り向きざまに魔法を放つ。

「つたぐ、後ろから来るなんぞ卑怯なやつだよな

「……」

そう言つてイマド自身もよく同じ事をしてゐるから、どう答えていいか分からぬ。

「……」

「にしても次から次へとよく 今度はなんだ？」

「最新型。無機物じやなくて生体人形、要するに合成獣で……」

「説明、サンキュー。で、どうすりやいい？」

イマドが途中を省略した。

「弱点はね……ウイペラ・ツアンナつー」

毒の呪文に、トカゲの親玉のような合成獣が、苦しげな咆哮をあげた。

「へえ、毒に弱いのか」

今も毒の苦しさに暴れて、周囲の兵士を巻き添えにして、慌ててローテステイオの兵たちが銃口を向けてる。

「めんね。

本当だつたら一撃で倒せればいいけど、今はさすがにその余裕がない。

「つと、いい大人がムキになるなつて
まだ新人なのか、構え方もおぼつかない兵士の剣を、イマドが跳ね飛ばす。

「いつたいなんだ、あれは！」
「その、子供と思われますが……」
「なにバカなことを言つている、あれが普通の子供のわけがなからう！」

「この指揮を執つているらしい上級仕官が叫んだ。

「ですが、あれはどう見ても……」
「見かけは子供でも、あれは化け物だ！」
それを耳にしたイマドが、憤然とする。
「てめえらが弱すぎるだけだろ」
もつともそんな呴き、向こうは聞いてない。

「例のものをこっちに回せ！ 叩き潰してやる！」

「ですが、あれはまだ……」

「かまわん！ こざといつ時にはテストも兼ねて使ってみると、マルダーグ大佐の仰せだ」

仕官の言葉に、あたしとイマドは顔を見合せた。

「今、『マルダーグ大佐』って言った……よね？」

「ああ。

つてことは、あいつを捕まえれば芋づるで、その大佐もとつ捕まえられるんじやねえか？」

そんな話をしながら、2人でもう一段前へ出る。
けど。

唐突に兵士が左右に分かれた。

「なんだあれ、デカいな」

イマドの言う通りかなり大きな人形が、こっちへ向かって来る。

「なんだあれ、デカいな」
「イマドの言う通りかなり大きな人形が、じつへ向かってくる。
「型、わかるか？」

「つうん、初めて見るわ……」

黒が基調で、カニのような姿をしている。外骨格はどつやう、鋼
鉄らしい。

「思つんだけどよ、人形つてワリに人間型じゃねえの、多くねえか
？」

「最近の、みんなそうかも……」

場違いな言葉に、一瞬戦闘を忘れかけた。

けどたしかに戦闘力が高いものほど、人間からはかけ離れた形になつてゐる。

「しゃあねえな。とりあえず合成獣じゃなくて機械みてえだから、
その路線か？」

「たぶん、そうだと　え？」

鋼鉄のカニが、不意にその爪のついた腕を振り回した。近くにいた兵士がまともに食らつて、吹き飛ばされる。

次いでその人形は、手近な建物や車両に突進し始めた。

「……暴走、してねえか？」

「してる……と思つ……」

呆れてものが言えないといふのは、まことにことだらう。

「なぜだ、なぜちゃんと動かん！」

「その、なにせプロトタイプですので……」

指揮官や上級士官もつらえたてる。

「誰かこいつを うわあつ！」

カニがまた兵士めがけて爪を振り上げたのを見て、あたしはとつさに呪文を唱えた。

「フルグラトル・ラースツ！…」

対魔法防御が施してあつたらどうじよつかと思つたけど、幸いそれはなかつた。

中規模の雷魔法で、間一髪のところで動きが止まる。

「効いたみたいだな」

「うん」

そのとき鋼鉄のカニの目が、あたしたちを見た。

「なに……？」

「ちょっと待て、あのクズ鉄、俺らターゲットにしたんじゃね？」

カニの目が赤っぽくなつたのに、あたしも同じ感想を抱いた。ぎしそうといつ音を立てながら、カニがツメを振り上げて一歩こつちへ出る。

「ぐるぐつー！」

「でも、どうしよう？　！」

こんな大きい相手と戦おうと思つたら、広い場所でないと周囲の建物まで巻き込んでしまう。

けど周囲の建物の中には、人がたくさんいる。

「ちつ、まいつたな……そだ、駅前の広場、ここからすぐじゃねえか？」

「あ、うん。じゃあ場所移動して……」

イメージと一瞬視線が合つた。

あたしの考へてることが伝わつてゐる、そつ確信する。

何の合図もなしに、あたしたちは同時に駆け出した。

左右に分かれながら、タイミングを合わせて低位の雷系呪文を放つて、一瞬だけこいつを食い止める。

「つたぐ、こんなところでランニングするとは、思わなかつたぜ」
カニの向こう側をすりぬけながら、イメージがぼやいてるのが、なぜか聞こえた。

「喋ると、息が続かなくならない?」

すり抜けて合流してから、思わずそう返す。

後ろではまた兵士を巻き込みながら、鋼鉄のカニが「ちりへと」向きを変えたようだった。

「このへりでねあげてたら、学院の訓練で死ぬぜ?」

「それはそうだけど」

ちらりと見ると、追いかけてきているのは例のカニだけだった。ローテステイオ兵は巻きこまれるのが怖くて、追つて来れないらしい。ただ、追いかけてくるスピードはけつこいつ速い。

「けどまあ、近くてよかつたな」

「うん」

「イマドの通りとおり、あたしたちがいた場所から駅前の広場までは、ほんのちょっとの距離だった。」

「ただ歩道を駆け抜けているあたしたちはいいけれど、カニは車道を強引に走つて？ いるから、完全に交通妨害を起こしている。」

「にしても、ロデステイオ車つてのは何考えてんだろうな？」

「あたしに訊かれても……」

「もしかすると、何も考えていないかも知れないし。」

「ともかく駅前の広場にたどりついて、あたしたちは足を止めた。人形が追いついてくる。」

「上級魔法、行くから」

「わかった」

「なにしろあの大きさだ。ちょっとやそつとの魔法じゃ、びくともしないだろう。」

「急いで呪文の詠唱　　さすがに上級魔法となると、ちゃんと詠唱しないと発動させられない　　を始める。」

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ　　ケ

「ラウノス・レイジフ！」

「上級雷系呪文が発動する。」

「雷撃が天から駆け下つて地を貫き、金属のこすれる音をたてながら鋼鉄のカニがくずおれた。」

「やつた……か？」

「わからんない……」

普通だつたら絶対にスクラップになつてゐるはずだけれど、なぜか自信がなかつた。

あの赤い目が、まだこつちを見てゐる気がする。

「でもよ、これでおしゃかにならなかつたら げ、マジ?」
近づけといつとしていたイマドが、うわすつた声を出す。

「そんな……！」

あたしも信じられなかつた。

なにしろこの人形はあれほどのダメージを受けたのに、何事もなかつたかのように立ち上がつたのだ。

「どうなつてんだよ!」

「そんなこと言われても……あ、もしかして……皿口修復機能……?」

ロデステイオ軍はそういうものを人形に搭載させようとすると、以前聞いたことがある。

「皿口修復機能だあ?

んじやどうやつて倒せつてんだよ?」

「機能以上の負荷『えれば、たぶん……』

ただこれだけの機能をもつてゐるとなると、内部の肝心な場所が魔力や電撃に對して、絶縁構造になつてゐるかもしけない。
もしそうならお手上げだ。

「機能以上つておい、上級魔法以上のダメージ』『えろつてか? 『冗談キツいな つと』

イマドがぼやきながら、カニの爪を飛び退つて躲した。
標的をしとめ損ねた目が、周囲を探る。
瞬間、嫌なものを感じた。

「イマド、伏せてっ！」

警告しながらあたしは呪文を唱えた。

鋼鉄の力ニに装備されている、砲門に光がともる。

「 ルス・バレーツ！」

ぎつぎつとのところで呪文が間に合つて、あたしトイマドは光の矢に薙ぎ払われずに済んだ。

焼け付くような熱さは感じたけど、それ以上はない。

「 あんなもんまで装備してやがんのか。これじゃうかつに近寄れねえな」

イマドの言葉にあたしも考え込んだ。
あれだけの雷撃を受けてまだ平氣となると、もう手段が限られてくる。

「 精靈 使わ」

「 まあ、しようがねえな」

精靈は町中では使わるのが基本だ。
なにしろ効果範囲が大きすぎるし、それ以上に使つた地点のHネルギー傾斜を、一時的とはいえ狂わせてしまう。
でもこの状況じゃそんなことは言つてられなかつた。
それに幸いにして広いから、周囲もさほど巻き込まないで済むはずだ。

「魔法防御、働かせられる？ 母さんの精靈なら、それできたと思
う」

「ああ」

答えを聞いて安心する。これなら万が一にも、イマドがダメージ
を受けることはない。

内に宿る力を解放しようと、呪を唱えはじめる。

「鳴り響く時の中に棲む者よ、その稻妻持ちて我が敵を打ち砕け
」

その間にイマドが低位魔法を放つて、人形の足を止めてくれた。
「来いつ、アエグルンッ！！」

靄のようなものがわだかまって、異形としか言ひようのないもの
が、実体化した。

角から、翼から、身体から、鮮やかな電撃がほとばしり、それが
呼び水となつて天空からもいかずちが降り注ぐ。

閃光。
轟音。

そして空氣の焦げる匂い。

手応えはあつた。

これで倒れてくれれば……。

でもその思いも虚しく、人形が再び自己修復を始める。

「精靈はもう、ダメだよな？」

「うん」

こんな町中で何度も精靈を召喚したら、それだけで周囲の都市機能に影響を及ぼしてしまつ。

「ねえイマド、さつきの魔力の暴走って、させられなーいの？」

「できねえ」

望みを託した言葉を、イマドはあつとじて呑みこむ。

「なんか知らねえけど、魔力干渉防ぐ構造になつてゐるみたいださ。つてえか、できりやせつてるって」

「あ、そうか……」

けどこれ以上のダメージを【あ】るとなると、もう肉をなんでも呼んで同時攻撃するしかない。

その時、ちよつと考へるよつこして、いたイマドが突然言つた。

「おい、俺に防護魔法かける」

「えつ？」

「いいから！」

戸惑いながらも呪文を唱える。

あるいはイマド、何かいい方法を思いついたんだろうか？

「　　エターナル・ブレス！」

そうしてゐる間に、また鋼鉄の力一が立ち上がる。

「たかが鉄クズのくせに、てめえ生意氣なんだよつー。」

ロングソードを手にイマドが突つ込んだ。

巧みに爪をかいぐぐり、あつとこつまに肉薄する。

「黙つて壊れてろつてんだ！」

彼が人形のいちばん弱いところ、刃に剣をつきたてた。

剣が奥深くまでもぐつこみ、もういちぢか一動きが止まる。

「ルーフェイア、狙えつ！」

瞬間イマドの考える事をあたしは悟った。

迷わず呪文を唱える。

「遙かなる天より裁きの光、我が手に集いていかずちとなれ　」

上級呪文を、全力でもう一度。狙いはイマドの剣。

「ケラウノス・レイジつ！！」

刃を伝つて、電撃が内部へと流れこむ。

同時にイマドが、あたしの魔法と人形の魔力とを暴走させた。

「砕けろつつ！！」

もとからの上級魔法の威力に、人形が持つていた魔力が加わる格好になつて、通常を遥かに上回る雷撃が生み出される。

太陽が落ちたみたいに、一瞬あたりが真つ白になつて……。

ばちばちという音を立てながら、この殺人兵器が爪を振り上げかけて　不意に止まつた。

周囲が静まり返る。

駅から聞こえてくるアナウンスが、奇妙なくらい広場に響いた。

「今度こそやつたか……？」

彼がそう言い終えないうちに、振り上げられていた爪が根元から外れて落ちる。

「今度は大丈夫みたい」

あたしもようやく緊張を解いた。人形1機にこんなにてこずつたのは、生まれて初めてだ。

こんなのが実践配備されたら……。

ただとりあえず、今はもう心配ないだろう。

「お嬢ちゃんたち大丈夫か?」
さすがに一息ついているところへ、クリアゾンの人たちが乗り込んできた。

「街の連中から、なんかどんでもないことになつてゐるつて聞いて、
なるべく急いで来たんだが」

「あ、はい、どうにか倒しましたから……」

「倒したあ?」

イマドが黙つて、人形を指差す。

動かなくなつてゐる鋼鉄の力ニに、ボスを始めみんなが困惑した
顔になつた。

「こんなもの、普通は子供2人で倒したりしないぞ……」

「そつなんですか?」

確かにこれほど大型のものは初めてだけど、普通の人形ならあた
しは学院へ来る前から、一人で片づけていた。

「だから言つたでしょ、この子達は並みじやないって」

声と共に母さんが姿を見せた。どうやら向こうの戦闘も終了した
らしく。

母さんの後ろには父さんやシーモア、ナティエスたちがいた。

「みんな、大丈夫?」

「ああ、まるつきりなんでもないよ」

さすがというべきか、シーモアもナティエスも平然とした顔だ。

「これじゃ祭りの方が、たぶんハードだつたろうね」

「ウソウソ、あの大佐が来て戦闘停止させてへんなきや、けつこいつ
ヤバかつたんじゃない？」

「ナティ、あんたどうしてそこでそう言つんだい」
シーモアが慄然としたけれど、あたしはナティエスが言つた言葉
の方が気にかつた。

「大佐つて？」

「んと、あのほら、話の出てたコーエツシユ大佐」

「え？ ジやあ大佐が直に来て……戦闘を終了、させたの？」

「うん」

信じられない話だ。

「あたしが連絡しといたから、裏取つてすぐに動いてくれたみたい
ね、リオネルは」

母さんが自慢げに胸を逸らす。

「どお、見なおしたでしょ」

「母さん、娘に威張つてどうするの……」

「このやりとりに周囲から笑い声が起つて、恥ずかしくてしう
がない。」

「事実だからいいの。

あと情報じや、リオネルが憲兵をマルダーグ大佐のお宅に向か
わせてるらしいわ。だからじき、一連の騒ぎも収まるでしょ
「そつか……」

でもなんだかあたしは、寂しい風が吹き抜ける気分だった。

確かにこれで「ファミリー」を名乗る犯罪組織が捕まつて、騒ぎ
は収まるだろう。

だけど殺された子供たちは帰つてこないし、この戦闘で出たはず
の死者も生き返るわけじゃない。

それに何より、このスラムの人たちの生活が変わるわけじゃないから……。

「あんた、いい子よね

「うつむくあたしの頭を、母さんが撫でた。

「ホントビ〜でどう間違えたんだか、うちの人間にしづか優しきだわ。

けどそれにしても、どうもひつひつこの蜘蛛倒したのよ。」

「ぐ、蜘蛛……！」

母さんの言葉に、壊れた人形を振り返る。

4本の足に2本のツメ。

言われてみれば確かに、蜘蛛にも見えた。

戦つてゐる時は、カ一に見えたんだけど。
鳥肌がたつてくる。

「おい、ルーフェイア、お前顔色悪いぞ？ どうかしたのか？」

「あたし、あたし、蜘蛛……」

これだけは大つ嫌いだ。ゴキブリの方が何十倍かいい。

「いやあっ！ 誰か片付けてえつ！ …」

周囲が呆れかえる中、あたしはそのままソヒへ座り込んでしまつた。

Imad

「それにして、お前がクモ嫌いだとはな～」

「こいつ、何見たって平気な顔してつから、まさかこんなモンが苦手だとは思いもしなかった。」

「もう、お願ひだから言わないで……」

「あ、悪い悪い」

よつぽどヤなんだらう、単語すら聞くのを嫌がる。

「けど、なんでンなに嫌いになつたんだ？」

「俺の知るかぎりじゃ、女子つてのはたいてい、ゴキブリの方が嫌いだ。」

「この子ね、むかし熱帯地の戦線に出た時こ、毒蜘蛛にやられてヒドイ目に遭つたのよ」

「あ、それで……」

「こいつのお袋さんの言葉で納得した。ようあるヒラカラマツセやつだらう。」

あの騒動からもう6日、俺らはベルデナードの、駅前広場とやらにいた。

別にわざわざ帰つちまつてもよかつたんだけじ、「祭りでも見てけ」つつーシーモアたちの言葉に、ルーフェイアのお袋がみごとに便乗。結局この街に、俺らもいつしょに居座つちました。

もちろん祭りってのは抗争じやない。ビうこうわけか国をあげて行われる、大統領の就任記念日祝いだ。

でも「見てけ」つてだけあって、街中露店が出てたり大道芸やつてたり模擬試合があつたり、けつこう飽きなかつた。

メインの大統領演説は、めちゃくちゃつまんなかったけど。

ついでに言うと今、ローテステイオの政界と軍部は大騒動つてやつだ。

こないだのスラム侵攻で墓穴掘つちまつたマルダーグ大佐とやらは、結局憲兵に自宅で麻薬組織のボスと一緒にいるところを、とつ捕まつちまつた。

バカなことにスラムに軍出して安心しちまつて、隠れんのも忘れて、高みの見物決めこんでたらしく。

そのうえそつから芋づる式に、政界やら軍部やらの麻薬スキヤンダルがバレて、もうどっち向いてもガタガタ。大統領演説の内容の大半が、こつち関係の話に切換えられたほどだ。

ちなみにこの辺をバラしたのはゼロールさんで、今まで地道にウラ取つてた情報をこじぞと流したんだとか。

それ以外にもこの人は、あのバカ取材人がいた放送局のカメラマンと一緒に、今回のスラム侵攻の一部始終を動影に収めてる。どつか頼りなさそうだったけど、ジャーナリストとしてはけつこう一流だつたつてことだろう。

「けどお前ら、マジで帰んねえのか？」
シーモアたちに尋ねる。

昨日でおおむね祭りも終わつて、俺とルーフェイアたちは町をあとにするところだった。

今ここにいるメンツは俺にルーフェイア、こいつの両親、あとナティエスにシーモアだ。

「もうこじままで来たら一緒にだからね。久々にみんなと新年の騒ぎや

つてから、学院帰るや」

「あ、なるほどな」

確かにこいつら3年くらい帰つてなかつたらしいから、やね氣にもなるだろ。」

だいいち年が明けるまで、もつとくらもない。

「授業始まるまでに、帰つて……くるよね？」

心配そうにルーフェイアが訊いた。一緒に帰るつもりでここまで追いかけたワケだから、氣が氣じやねえんだろ。

「もう、ルーフェイアつたら心配性なんだから。

大丈夫、ちゃんと帰るつてば」

ナティエスのやつに請け合つてしまつて、やつとこいつが安心した顔になつた。

「もうウルサイのも来なくなつたし、心配ないもん
「おかげでやつと、寝れるつてもんわ」
この2人が笑う。

実言うと例の騒ぎの後は、もつと大騒動だった。
なにしろそれまで知らん顔してた報道のヤツが押しかけてきて、
やれ話訊かせろだのなんだの、拳句にシーモアたちを『引き取りた
い』なんていうバカまで出る始末だ。

ガルシィさんとダグさんたち、全部水ぶつかけて追い返しちま
つたけど。

中でもシーモアのやつが、そのバカな連中に言つた台詞は名言だ。
「あんたら今まで知らん顔してたくせに、ちょっと放送見たくらい
でなにか。」
ンなこと言つんだつたら、このスラムの連中全員に、メシと金で
も世話をしなよ!」

この毒台詞に度肝抜かれた偽善者連中の顔は、あのゼロールさん
がしつかりフィルムに収めてる。
けど誰がどう言おうと、シーモアの言つたことは正しい。どうせ
この騒ぎが終われば、みんなばっちり忘れてスラムは置き去りだろ
う。

「結局は、あたしら自身でやるしかないからね」
このシーモアの言葉が、全てを物語つてやつだ。
もつとも凄いって点では、今回はナティエスのヤツのほうが上だ

つたかもしない。

「いつもスラムの生まれじゃないのは言動見ても分かけど、今回放送されたのでも見たんだろう、けつこうい身なりの「親戚」つて名乗る連中が彼女を引き取りに来た。

それも、報道陣引き連れて。

動影映つて有名になつたナティを、引き取るところでも報道させて、自分の利になるようになつたかららしい。

とはいえナティエス、その大人しげな外見からは、想像つかねえ毒持つてゐるやつだ。

あの時は悪かつた、昔のことも家出したのももう言わないから戻つて来いつていうその「親戚」連中に対して、あいついきなり言ってのけやがつた。

「お父さんとお母さんの遺産、返しなさいよねー。」

当然放映中。

親戚連中のうるたえぶりときたら、笑つつきやなかつた。

しかもナティエス、その「親戚」が引き取つた自分にした仕打ちを、片つ端から言ひたてたんだからたいしたものだ。

もう親戚連中はほつほつと体で逃げ帰つて、ついでに放送見てたスラムの連中から生ゴミ投げつけられてた。どつちにしろあの親戚連中は、これからめいっぱい後ろ指させるハメになるのは間違いない。

武器も使わなきや血も見ちゃいないけど、ナティエスのやつの復讐はある意味完璧だ。

気が付いちやいないだろうけどな。

言いたいことを言つてすつきりしたんだね、当人はほほう、んな話忘れちまつてゐらしい。

「けじや、ひと騒動だつたけど、落ちついてよかつたよね。もう向こうのチームとのナワバリ騒ぎも、ないと思ひし」「よかつた……」

俺が思うに、今回のいちばんの収穫はこれだらう。今回休戦した上で協同作戦やつたりのが良かったのか、この2つのチームは、次にリーダー変わる時にまとまる」とで話がついた。まあ聞いたところじゃ、もともとひとつだつたつ一つーし、元リーダーだつたルーフェイアの親父さんや、レニー・サさん、クリアゾンのボスあたりからも話がいつたらしい。

「そうね、ガルシイがさ、ベルデナード来た時は寄れつて言つてた」

「へえ。

けどよ、また玄関の外で待たされたりしてな」

「もう、イマドのいじわる！ そんなことするわけないでしょ」反論してから、シーモアとナティエスのやつは笑つた。

「借り作っただったね」「ま、そのうち返してもいいわ」「そんなことより、今度みんなで遊びにこきましょ。あたしが全部面倒見てあげるから」

「母さん!」「母さん!」

「なこと言ひながら、俺らがワイワイしゃべった時だ。

「兄ちゃん、姉ちゃん!」「あ、ワイン」「あ、ワイン」

あのチビが半分息切れながら、駅の自走階段を駆け上がり始めた。

「もへ、行つちやうつて聞こして。オイ!急いで来たんだ」「「めんね、疲れたでしょ?」「ルーフュニアのやつがそう言つと、ワインがぶんぶん首振つた。どうもこのガキ、こいつの外見に参つてるらしい。

ま、分かるナビだ。

戦闘さえなければいいこいつ、どうからか見ても優げなお嬢様だ。

「けど、ホントにもうこいつまつの?」「このチビの言葉に、たちまちルーフュニアの顔が曇つた。「その……」「めんね……」「あああっ!姉ちゃん、泣かないでつと思つきりいつものひと騒動になる。けどタシュア先輩がいるわけでもねえのこ、なんでこいつなるんだか……。

「姉ちゃん姉ちゃん、ほら、これあげるからさ」

「え……？」

ワインのヤツが箱を差し出して、びっくりしたルーフェイアが顔を上げる。

「お土産だよ」

「あ、ありがとう……」

それからそつと、ルーフェイアが箱を開けた。

「へえ、気が利いてんな。

中から出でたのは、ガラス細工の仔竜だ。

「かわいい……」

ルーフェイアも無邪気な笑顔になる。

「あら、今泣いたなんとかが、つてやつかしらね？」

「おばさん、ンなこと言つとまた泣きますよ」

ただ幸い今は聞こえなかつたらしくて、ルーフェイアのやつはガラスの仔竜に夢中だ。

「ねえワイン、あたしたちには？」

「ナティねえ、オイラに土産せがんどうすんだよ」

ズレたやり取りに、聞いてたルーフェイアもシーモアも笑い出す。

「だいたいナティ、あたしらチームへお土産持つてつてないんだ。もうおうつたつてムリだよ。

「それよりワイン」

前半から一転、シーモアの表情が厳しくなる。

「その仔竜の金、まさか

」「

「ンなことないよー。これ、リーダーたちからなんだ。
だいいちオイラ、さつき失敗しちまつてさ。だからお土産これだ
け」

俺も勘ぐつてたけど、どうやら掏つてきた金で買った、つてんじ
やなさそうだ。

ルーフェイアのヤツあれで案外、チームの連中にも人気があつた
らしいから、その辺から金が出たんだろう。

まあ、出所がまともとは、かぎらねえけどな。
けど今そこまで言つ氣は、俺にもない。

「でもウインが失敗するなんて、よっぽどよね?」

「オイラもびっくりしちまつたよ。カップルで歩いててさ、きつと懐なんかお留守だと思ったのに、いきなり腕掴まれちまつて

「そりゃ、かなりのモンだね」

「聞いた話じゃこのガキンちよ、チームじゃナティに次いで掏りの腕はいいらし」。

なのにそれを察して腕を掴んだってことは、その相手ってのは相当地だ。

「ヤローのほう狙うんじやなかつた。大失敗だよ」

「ま、これ教訓にして、今度から気をつけるのね。でも、よくそれで逃げられたね?」

掏りとしちや一級品のナティエスが、不思議そうに尋ねる。

「いや、それがさ、黙つて手放して見逃してくれたんだ」

「ンな奇特なヤツが、今時いるのか……」

未遂だつたせいもあるんだろうけど、かなり珍しい話だ。

「でもホントそのヤロー、見かけと中身がぜんぜん違うんだ。

髪なんか銀色で前髪だけちょっと紅くしちやつてて、拳句に女みたいに伸ばして三つ編みしてんだぜ?」

絶対、やれると思つたんだけどな~」

「そ、それ、もしかして……」

ウインの説明に、俺も含めて絶句する。

「あ、あのね……その銀髪の人、眼鏡かけてなかつた?」

それとカップルつて……連れの女人、黒い髪に紫の瞳で長身じ
や……」

「あれっ、姉ちゃんなんで知つてんのさ?」

ルーフェイアの説明聞いて、目を丸くしたウインの頭を、シーモ
アがはたいた。

「あんた、その人狙つてそれで済んだんなら、はつきり言つてメチ
ヤメチヤ幸運つてやつだよ」

「ほんとほんと、絶対成功しない相手よ、それ」

ナティエスのやつも一緒になつて、このガキに向かつて突つ込む。
タシュア先輩とシルファ先輩がどつかへ行つてるのは、ルー
フェイアから訊いてたけど、どうやら行き先はここだつたらしい。
世の中広いようで狭いつつーか……。

「にしてもよ、よく五体満足で見逃してもらつたよな」

「タシュア先輩、そんなことしないわ」

俺のつぶやきに、ルーフェイアのヤツが抗議する。

「先輩、優しいもの」

「はいはい、分かつてるつて」

毎度泣かされてるクセに必ずこいつ言つんだから、マジでたいした
もんだ。

「だとすると、この記事の犯人は彼かしらね？」
言いながらルーフェイアのお袋さんが、せつから斜め読みして
た新聞　ウソみてえだけど経済新聞だ　をひらひらさせた。

「なんの記事です？」

「あ、あなたたちじゃ見ても、わかんないと思ひわよ
確かに俺もぞっと見てみたけど、魔力石の相場が上がったとか国
境地帯で金属の採掘権がどうなったとか、ンな記事ばっかだ。

「教えてくれたっていいじゃないですか
「別に知らなくたって、困りやしないわよ。

あら
俺の言葉を軽く躊躇したお袋さんが、遠い下の広場を見ながら面白
がるような声を出す。

「　　げ、オイラ帰るつ　」

「ワインのやつも気が付いて、慌てて踵を返した。

「ちょっとワイン、どうしたの！」

ああもう、シーモア、どうじよつ？

さすがにうるたえながらナティースのやつが訊くと、シーモアも
呆れ半分苦笑半分で答えた。

「ワインのヤツ、タシュア先輩でも見たんじゃないのかい？
けどこれ以上いてもしょうがないし、ルーフェイア、あたしらも
そろそろ引き上げるよ」

「え、あ、うん……」

突然言われて、こいつが戸惑いながらもうなずく。

「ほら、そんな顔しなさんなつて。じつせ年が明けりやすぐ、学院で顔つきあわせるんじやないか」
これで納得したんだろう。ルーフェイアのやつが淡い笑顔になつた。

「そしたらシーモアもナティエスも、気をつけてね？ 風邪なんかひかないでね？」

「大丈夫だつて」

「もう、ルーフェイアつたらほんと心配性なんだから。じゃあね」
それから2人も、手を振りながら下りの自走階段のほうへ向かつた。

徐々に姿が沈んで消える。

「行つちゃつたね……」

「ま、どうせまたすぐ会つんだしな」

「うん」

ちょっと笑顔になつて、じつがこつくりとうなずいた。

「これが可愛いんだよな。

確かに年より幼いだろうけど、ヒヨコよろしくへへついてくることは、俺は嫌じやなかつた。

「で、お前はこれからどうすんだ？」

「えつと……？」

自分じや考へてなかつたらしくて、ルーフェイアが困つた顔して両親のほうを振り向く。

「どこか予定があるのか？」

「あら、ディアスかルーフェイアが考へてると思つたわ」

おい。

親子3人でいたにも関わらず、誰も何も考えてなかつたらしい。この頼りない両親に、ルーフェイアのやつがため息をついた。

「んじゃみんなで、アヴァン来ません?」

「え?」

ちょっと首をかしげて、不思議そうに「いつが俺を見返す。

「いや、俺このまま、伯父をそちらへかられ」「あ……」

一瞬呆然としたあと、一いつが華やかな笑顔になった。

俺とルーフェイアが初めて会ったのは、あの街だ。それに実のところ、孫娘の命の恩人になるこいつを連れて来るよう、伯父さんから何度も俺は言われてる。

「あんときや時間ないわみょーな騒ぎになるわで、たいして見てかなかつたろ?」

来るなら、ちゃんと案内するぜ」

「あら、それいいわね」「けど」
けじいぢばん喜んだのは、ここつのお袋だった。

「あの時はあたし、ぜんぜん見るヒマなかつたのよね。一度ゆつくり見たかったのに」

確かにこの人、戦闘に参加したあとちよこつと来ただけで、多分どこも見てねえだろうナゾ。

「か、母さんも来るの?」

「あら、何か悪いの?」

「だつて……」

強引なお袋さんと妙な勘違いしてるルーフェイアとが、かなり笑了。

「まさかあなた、あたしたちがこのボウヤのとこへ、上がりこむと思つてない?」

「え、違うの？」

もつともこの人が相手じゃ、勘違いするのも当然つて気がする。しかも親父さんときたら止めるビリうか、面白がつて見てるんだから始末に追えない。

「いくら小さい街だつて、ホテルくらいはあるでしょ。とりあえずそこへ泊まつて、彼に案内だけしてもらえばいいじゃない」

「俺にケンカ売つてます？」

歯に衣着せないつてのも、考えモンだ。

「あら、『じめんなさいね。』
でもこれで行き先決まつたわね～」

言つが早いがこいつのお袋、わざわざ切符を買つて窓口のほうへ向かつた。

「母さん、どこの駅で降りるか知つてるの?」

「アヴァン駅でしょ」

「ぜんぜん違いますつて」

答えを聞いて、俺も心配になる。いくらアヴァン領内だからって、首都まで行つちまつとかあり得ない。

けど俺らの突つ込みなんぞこのおばさん、そよ風の『』としだ。

「あらそつたつた?

まあいいわ、駅員にでも訊くから」

「……」

これにはさすがに心配になつたりじつて、無言で親父さんが後を追いかける。

「ホント、すげえ両親だよな」

「だからお願ひ、それ言わないで……」

「悪い悪い。

それよつよ、俺らも行こ。お前の両親に任しどと、なんか

心配だしな

「……うん」

小さくこいつがうなずいた。どうも親2人に振り回されて、気落ちしてゐる感じ。

「ルーフェイア」

「なに……？」

華奢なこいつが顔を上げた。

笑顔がないとその表情はどこか儂くて、消えちまいそうだから……。

「上手くいって、良かつたよな」

「うん！」

極上の微笑みが、ルーフェイアの顔にのぼった。

Fin

あとがき

長い長い話を最後まで読んでくださって、本当にありがとうございます。この話、じつは厚めの文庫本1冊分、あつたりします(汗) 第9作はこれで完結となり、明日から第10作目の連載に入ります。今までと同じく、“夜8時過ぎ”の更新です

感想・評価大歓迎です。一言でもお気軽にどうぞ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3086f/>

言葉ではなく ルーフェイア・シリーズ09

2011年2月7日11時16分発行